393
N99
393-N99ウ
1200500741629
×
複
写

始

393
N99

布川靜淵著

戰爭の科學的研究

大都書房版

亡き母上の記念に

著

者

序

筆者の素志は、支那事變を中心とせる戰爭社會學の研究にあつたが、終局を告げた後ならでは資料も整頓せず、稍〻中間報告的に墮する嫌ひあるため、これを他日に期することとした。この小著は、事變發生以來、ジャーナリストとして、一度世に公にした戰爭に因める隨筆の一部分を集錄したもので、戰爭を社會學的に觀察する小引序說と云ふが適當であらう。

戰爭社會學の性格の一端を知る便りとして、ピトリム・ソローキン敎授著「現代社會學說」中の一章を抄譯し、「特輯」として之を收めた。同敎授は露西亞出身の有數なる社會學者にて、露都大學の敎授であつたが、革命後米國に渡り、ミネソダ大學敎授よりハーバート大學敎授となり、述作も多く、斯學に貢獻するところ尠なからぬ。筆者は、その學風の相互類似より關心を有し、時折これを紹介したる因緣から、飜譯權の承認を得、又幾多冊子の寄贈あり、爾來、文通を重ね、未見の舊知として許るすので、短文ながら筆者には、床かしい懷かし味を覺えるのである。

905
233

筆者昨今の心境は、戰爭といふ社會現象を抽象し分析して、形態や形式を掴み、これより概念や觀念を造り、そして關係や法則の考究に沒頭する業には關心が乏しい。寧ろ眼前に展開されてゐる支那事變と第二次世界大戰の有つ深き意義を考へ、世界人類の禍福に直接の大影響を與へつゝある今次戰爭の性格・影響・推移・傾向等を眞率に直覺し、聖戰の生命を血肉化して、蔣地に之を會得するの必要を痛感してゐる。卽ち、形式の社會學でなく、實驗の社會學を欲求する。その意味に於てこの小著が、聊かなりとも讀者に對し示唆を與ふる所あらば、洵に欣快の至りである。

本書の刊行成れるは、舊識相馬愛藏氏の親誼と、大都書房主野島辰次氏の好意に依ることを記して、玆に深厚の謝意を表する。

昭和十六年八月

著者識

凡例

一、本書に收むる所は、概ね一度「丁酉倫理會倫理講演集その他」に掲げたるものである。

一、本文中、ソ聯或は蘇聯と記し、ポーランド或は波蘭と記する等の類ありて、統一を缺く嫌ひを免れぬ。讀者の寛容を祈る。

一、本書は、初校一回だけ著者自ら校正したるが、印刷事務の都合により再校以下は、凡て書肆の編輯部に於て責任校了されたものである。

戰爭の科學的研究

目次

序

一、戰爭の科學的研究……一

戰爭研究の深化—現代の總力戰—科學的研究の必要—戰爭生物學—戰爭心理學—戰爭と戰費の膨脹—戰爭經濟學—戰時經濟政策—戰爭の人的損失—文明の進歩と戰爭—戰爭勃發の原因—持てる國と持たぬ國の衝突—世界大戰の色彩—今次大戰の由來—太陽熱と景氣變動—太陽面の黑點と和戰—一種の占星學的見解—戰爭の機械化とその將來

二、全體主義國家觀の檢討……六〇

全體主義とは何か—全體主義國家の沿革—近代西歐に於ける消長—近代日本に於ける消長—全體主義の興隆事情—全體及自由の長短—反動と協

調の波動
三、國防國家の倫理性 ……七八
思想體系の三本位—國家本位の傾向—國家・個人・世界の三位一體—國防國家本位の强調—改革運動の原則
四、新東亞建設の認識及倫理 ……八八
帝國政府の聲明—新秩序の建設—國際正義の確立—共同防共の達成—新文化の創造—經濟結合の實現—新秩序と新政策—新秩序新體制の傾向—派遣軍將兵に告ぐ—道義文化と物質文化—事變發生の眞相—事變の解決法—日本人は日本に還れ—時局急務の要領
五、建設途上に於ける世界の新秩序 ……一一二
世界舊秩序の一瞥—世界新秩序の建設着手—獨逸の大捷と大計畫—米國の軍備大擴張—世界四大新秩序圏—獨逸戰勝の意義—スターリンの勝利—英國の決定的敗戰
六、新經濟秩序と金本位の崩落 ……一四二
金を基礎とせぬ經濟組織—幣制推移の一瞥—主要國の金保有高—ルーテル及シャハト兩博士の功績—ヒットラー總統の幣制演說—金本位制の前途多難—幣制改革は刻下の大問題
七、戰時の經濟體制 ……一六六
三種の經濟體制—戰時の統制經濟—平時の自由經濟—相對的と絕對的—戰時體制の經濟倫理—程度の問題—統制經濟と獨裁制—統制强化の意義—皇軍の精神に學べ
八、今次大戰の世界史的意義 ……一八四
世界史回轉の一幕—現狀打破と新秩序建設—何れが事實、何れが詐妄—獨逸の優勝確然—猶太的英國の墮落—英米依存の弊風—現實の適例—英

米學者の僻見—歐亞相剋の一因—民族性格の異同と競爭

九、長期戰と新體制 ……二一一

歐洲の治亂興廢と少數民族—今次の大戰と猶太人との關係—米國の參戰問題—蘇・英・米の外交振り—新體制の聲明—舊體制の回顧—滿洲事變以來の形勢—日本特殊性に據る新體制

一〇、戰爭と新生活樣式の出現 ……二三五

千載一遇の機會—現下の統制經濟—生活樣式の變遷—種族的道德の鼓吹—戰時の生活樣式—戰時歐米の異常性—彼我軍人行動の相異—失業及貧困に由る犯罪の減少—戰時道德の强調

一一、國際政局の展望 ……二六〇

三國同盟條約締結の前後—人間萬事塞翁が馬—ラッセル一流の幻想—今次大戰再起の豫想—大戰再起の原因豫想—猶太力影響の深甚—前途の豫測と創造

特輯

(1) 戰爭の社會學 ……二七六

生存競爭の社會學的解釋—生物學的及社會學的文獻に於ける生存競爭なる意義の不確實—生存競爭の形式及人類史の行程に於けるその變形—批評—社會的機能と戰爭及鬪爭の結果—戰爭の淘汰—人民の健康上に及ぼす戰爭の影響—人口動態に及ぼす戰爭の影響—經濟現象に及ぼす戰爭の影響—協同及平和の擴張手段としての戰爭—戰爭の道德的影響—戰爭と殘忍及墮落—犯罪と戰爭—戰爭と社會的及反社會的行爲—政治機關に及ぼす戰爭の影響—戰爭・革命及改良運動—戰爭と社會流動性—戰爭と意見・態度及計畫の變化—科學及藝術に及ぼす戰爭の影響—戰爭の影響に關する概括—戰爭の要因—生物社會學に關する總括

(2) 事變處理と指導者精神……三四六
英米勢力驅逐の急務—米國の正體—金なしの經濟—無風帶の會合頻出—
指導者精神—他導か自導か

戰爭の科學的研究

一、戰爭の科學的研究

一、戰爭研究の深化

刻下の歐洲大戰と支那事變の發展とは、動もすれば第二次世界大戰たるの形勢あり、自然戰爭に關する研究も益〻多岐に亘りつゝあるが、筆者は尙ほ一層その研究の深化を强調するの要を認めざるを得ない。

戰爭は國家の發生と殆ど同時に起り、未だ曾て戰爭しない民族もなければ國家もない。その規模の大小、期間の長短、影響の厚薄に差別あるが、戰爭は人生社會の避くべからざる必須の定理であるやうに思はれる。歷史は永久の戰爭が無いと同樣に、永久の平和も亦無いことを證明してゐる。平和と戰爭とは波動の高低現象なるが如く、彼の「戰爭は臨時の變態にて平和は常住の正態だ」といふ概念は、必ずしも妥當でない。「戰爭を絕滅し去る戰爭」又は「最終の戰爭」といふことは望ましいが、實際には行はれさうもない。

古代のローマ帝國は、當時の世界たる歐洲及地中海沿岸諸國を征服し盡して、一時安定したるも、北狄蠻人の侵略によりて遂に崩壞した。近代英國は歐洲制覇戰に於て、各競爭國を順次に衰頽せしめ、東西南北に幾多の植民地を獲得し、第十九世紀には第二のローマ帝國たる豪華振りを示し、第一次世界大戰後には國際聯盟の機構を造り、佛國と共同して虛勢を張つたが、現に見るが如き悲境に陷り、今やその衰頽を辿りつゝある。されば、一民族が世界征服の態度を持する事例あるも、これと競爭するもの新たに出現すれば、そこに破綻を生じ、結局一民族一國家が絕對無上の强權を持して「世界國家」を形造り、それが永久に持續するが如きことは尙ほ依然たる夢想に屬する。

將來幾百千年後の夢想は論外とし、今日地球上に建國する幾多の民族が打つて一丸とせられて、その奴隷たるが如き事態よりも、先づ數個の大ブロックが對立して、互に共存共榮を期する權力の均衡成立が、比較的永く平和を持續せしむる道なりと信ずる。この意味に於て日獨伊三國同盟の倫理的强味がある。北米合衆國が太平大西の兩洋に於て、如何なる聯合海軍をも壓倒する大海軍を擴張するが如き、更に英國及蔣政權援助を以て民主々義擁護の道と信じ、日獨伊三國同盟に對抗する米・英・ソ・支の聯合を策謀するが如きことは、將來招致

せんとする世界平和を阻止するのみならず、人類の幸福を破壊する恐るべき結果を生ずる。この見地より、筆者は戰爭の本質に關する研究を一層深化するの要を感ずるのである。

二、現代の總力戰

我々の戰爭に關する從來の認識を見るに(一)戰史關係書類、即ち何々戰史、合戰物語、英雄傳、一般史籍等によつて治亂興廢の跡を知り、戰場の名將、勇士、戰爭の由來經過等を知悉し得た。(二)武器類は博物館その他に陳列される弓矢刀劍及鐵砲等を始め古代より使用された幾多の器具を閲覽して、過去の戰爭を偲び得た。(三)兵法戰術に關することは主として軍事教育方面に屬し、局外の一般民衆は與かり知る所甚だ少ない。即ち舊時代の一般民衆は戰爭に關する淺薄な常識を得たに過ぎなかつた。明治以來、徵兵令發布せられて國民皆兵制となり、又日清日露の二大戰を經てゐるから、無關心であり得ないことは勿論であるが、戰爭の事は多く戰時のみに限られ、他は軍事を職とする方面の任と爲し、兵營に入らざる一般人は、殆ど無關心の態度に出でた。戰爭に與かる將兵はその職掌上、多大の關心を有するも他は各自の職場に在りて勤勞するがため、關心の乏きは素より止むを得ないことであつた。

然るに、現代の總力戰は過去の戰爭とは比較にならぬもので、近代戰と雖も彼の第一次世界大戰に比すれば、物の數でない觀がある。そは交戰國の戰死傷病者の多數となれること、戰費は巨額に上り經濟負擔の尨大となれること、武器の精鋭は驚異に値ひし、特に飛行機、戰車、機關銃等を始め、機械化部隊なるものが偉力を發揮するに至れること、間諜網が到處に布かれ、その暗躍活躍が驚くべき發達を遂げたること等々は、凡て前代未聞のことに屬する。過去幾千年來の戰爭も、その當時に於ては素より相當の脅威であり、大事件でもあつたが、今日のそれに比較すれば一種の爭擾動亂に類し、共に日を同ふして語るべきでない。敗戰の結果として征服併呑せられ、榮枯盛衰常なきことは今も昔も變らないが、今日は堂々たる大國が數週間、又は數日にして地圖面より抹消せられ終るが如き、急激なる電擊戰時代と化し、興亡の急速度は全く驚愕する外ない。

現代の戰爭は「總力戰」と稱され、交戰國民はその全能力を傾けて戰ふ時代となつた。出征將兵が戰線に於て生命を賭して戰ふが如く、銃後の國民も一體一心となつて、その完遂に盡し、その目的を達成するために、努力せねばならぬ環境に置かれてゐる。この總力戰は現代戰爭の特徵なれば、その戰爭現象に關して、綜合的科學的の知識が必要である。大小の戰

爭は古今東西無數に上るが、現代の如く擧國總能力を傾けて、世界史的大轉換を期する如きことは、誠に稀有の事に屬するのである。

三、科學的研究の必要

戰爭に關する科學的研究は、從來より相當に行はれて來たが、世界大戰を契機として、それが格段の進捗を示し、全く劃期的の趣きを呈して來た觀がある。

刻下東西の二大戰爭に使用せらるゝ飛行機・戰車・爆彈・長距離砲等を始め種々の武器類は、二十餘年前の第一次世界大戰當時も既に使用せられてその偉力を發揮したが、その能率に於ては長足の進歩あり、改良に改良を加へ、全く日進月歩の所產である。今日の戰爭は科學戰とも言はれ、一切の科學の粹がこの破壞力の發揮に集注されてゐる。卽ち物理・化學・機械・技術の奧義が各種武器の製作に應用せられて來た。空軍の飛行機も戰鬪機・爆擊機・偵察機・追擊機・晝襲機・夜襲機等々、それ〴〵機能を異にする幾種類あり、投下する爆彈にも幾多大小重量の差があり、之が幾十萬噸の投下となる。例せば皇軍の重慶爆擊は既に約五十次を算せるが、獨逸空軍のロンドン爆擊も亦既に百數十回と傳へられ、その空爆時間が三十七時間連續せられて、漸く警報解除を告げた事實もある。又我が海軍航空隊の敢てせるビルマ・ルートの功果橋爆擊は、高度より一本の吊橋を爆擊破壞し去つたが、殆ど奇蹟とも稱すべき妙技にて、空中戰發展の素晴しさを證する。這般の消息は、支那事變に於ける皇軍及歐洲大戰に於ける獨軍戰果の證明する所であつて、現代の戰器・戰術・戰略の如何に科學的研究の大なるものあるかを推知するに餘りあらう。しかも是等は陸・海・空三軍が專門的に研究し教育し訓練する所であり、高度國防完遂の國家事業であることは、今更言ふを要しない。

之に次で注意すべきは、戰爭を儼然たる社會現象として、之を生物學的・心理學的・經濟學的・社會學的等に研究する傾向の高まつて來たことである。この種の研究は既に着手せられたるものあるが、尙ほ未熟にして粗笨たるを免れない。その主なる原因は戰爭の大さ、卽ち動員兵力に大小あり、戰鬪期間に長短あり、武器の發達に相違あり、收むる戰果と被むる戰禍とにより各方面の受くる影響に差異あれば、之を歷史として記述するに適するも、それを合理化するに困難なる部面が多いからである。例せば戰爭が長期に亘れば出征將兵多數を算するから、交戰國の出生率低下することは明白な事實にて、第一次世界大戰のそれに及ぼ

せる影響は既に明示されてゐるが、之を直ちに一の法則として各戰爭に適用し難い。何となれば、各交戰國は平時に於て、既にその率を異にしてゐるのみならず、政治的・經濟的・社會的事情亦異なつてゐるから、統一的には斷定されないものがある。隨つて戰爭の及ぼす影響に就ても、幾多の議論が對立して、相容れざる如き奇觀もあるのである。戰爭は偉大なる破壞力を揮ふ、一旦敗戰すれば忽ち國家の瓦解となり、社會を變革せしむる總力戰を演ぜらるゝ今日、この戰爭の本質に關する概念を得るの切要なることは、多言を要しない。

四、戰爭生物學

試みに、生物學的見地より戰爭なる現象を冷靜に洞察すれば、集團的生存競爭であつて、種族の集團本能に發し優勝劣敗の結果として淘汰される。卽ち適者は生存し、不適者は敗滅する。されば先づ適者たる條件を具備して、飽く迄も戰勝を期すべく、斷じて戰敗してはならない。ユダヤ民族の如く祖國を失ひ、世界各國に亡命寄生し各地に漂泊して、到る處に迫害を被つたが、之に反抗復讐するため祕密結社を組織し、革命、戰爭、動亂の種子を播き散し、以て平和の擾亂を計畫し、破壞行動を敢てする如き事例もある。

人生社會は、單に生物學的に準據して解說すべきでないが、身體を有する人間としての生活、人口としての動靜、その生死現象等は、結局生物學的たるを免れない。昨今空爆下に惱むロンドン市民が住むに家なきもの數十萬を算し、食糧の不足と燃料の缺乏に惱み、防空壕裡各種の傳染病に襲はれてゐる。第一次世界大戰當時は、露西亞國民の餓死せるもの幾十萬を算して、悲慘の極を呈したことは周知の事實にて、生物は生活の破壞より生命を失ふ結果を生ずる。故に戰爭は必勝を期せねばならない。

又戰線に立つものは靑壯の男子のみであるから、戰死傷病者となるのは一國中堅層の男性である。第一次世界大戰は千三百萬人の將兵を殺した外、二千三百三十萬人の非戰鬪員を死亡させたが、それが人口上に次の如き影響を承してゐる。

獨逸の人口は、戰前の一九一〇年に於て六千四百九十二萬六千人を算せるが、戰後の一九一九年には、敵國の俘虜となつて未還に屬せる四十萬人を加算しても、六千四十一萬二千人に減じた。又戰前五歲以下の小兒は七百七十九萬一千人にて、總人口の約一割二分を占めてゐたが、戰後には三百八十二萬一千人となつて、六分三厘といふ半數に減じた。又戰後二十歲以上四十歲未滿に於て、女子の超過數は次の如くなつた。

	男	女	女の超過
二〇歳—二四歳	二、三九〇千人	三、〇一八千人	六二八千人
二五歳—二九歳	二、〇〇四	二、六九三	六八九
三〇歳—三九歳	三、八八八	四、五九二	七〇四
計	八、二八二	一〇、三〇三	二、〇二一

即ち男四人に付女五人の割合である。

佛國の人口は、戰前(一九一一年)は三千九百十九萬二千人なりしが、戰後(一九二一年)は三千八百七十九萬八千人となり、五歳以下の小兒は三百四十七萬一千人にて、總人口の八分九厘なりしが、戰後は二百三十九萬八千人に減じて六分二厘となり、又戰後女子の超過數は次の如くなつた。

	男	女	女の超過
二〇歳—二四歳	一、四〇五千人	一、六四二千人	二三七千人
二五歳—二九歳	一、二三一	一、五五三	三二二
三〇歳—三九歳	二、五二四	三、〇〇七	四八三
計	五、一六〇	六、二〇二	一、〇四二

即ち女の超過は百萬人にて、男五人に對し、女六人の割合となつた。

英及威の人口は、戰前(一九一一年)に於て三千六百七萬人を算したるが、戰後(一九二一年)は三千七百八十八萬七千人に增加し、五歳以下の小兒數は、戰前三百八十五萬四千人、即ち總人口の一割七厘なりしが、戰後は三百三十二萬二千人、即ち八分八厘に減じ、又戰後の女子超過數は次の如くなつた。

	男	女	女の超過
二〇歳—二四歳	一、四四八千人	一、七〇三千人	二五五千人
二五歳—二九歳	一、三四〇	一、六二〇	二八〇
三〇歳—三九歳	二、五五五	二、九九二	四三七
計	五、三四三	六、三一五	九七二

即ち男五人に對し女六人の割合となつて、佛國と酷似するに至つた。

近代の歐洲各國は多少の差あるが、概して男子よりも女子の數多きを常とし、之に反して日本、米國及亞細亞方面は、男子多くして女子少なき事態にある。歐洲に於て、多少とも女子よりも男子の多き國は僅かにアイルランド自由國、ブルガリア、トルコ(歐洲の部)、エス

トニア等の數ケ國に過ぎない。獨・佛・英・伊の列强を始め、その他は悉く女子の超過せる國々なるが、大戰後は、特にその差甚しきを致した。斯く急激に結婚期、受胎期に屬する婦人の過剩する結果として、婦人の品格と價値を低下せしめ、風紀問題を生ずるに至つた。戰爭と出生率、戰爭と優生その他健康衞生上の問題がある。是等は一般に人口に及ぼす影響として取扱はれてゐる。斯の如く生物學的見地の研究範圍に屬するものは甚だ廣汎に亘つてゐる。

五、戰爭心理學

次は心理的方面にて、戰爭心理學と稱せらるゝ範圍も頗る廣汎である。フロイド、ゼイムス、トロッター、ジョンスその他戰爭心理の研究がある。是等は主として原始的本能と群居性より出發し、鬪爭心の由來より說明するのが、その研究態度であつた。

然るに現代は百尺竿頭一歩を進め、殆ど面目一新せる觀がある。そは飛行機、戰車、潛航艇等の發明と發達により、之に乘込む戰士の心理狀態が重視せらるゝに至つたからである。是等を操縱して戰ふ人々の心身の健全なるべきは、想像に餘りあることなるが、飛行機としてはヒマラヤ山頂と均しき最高度の空中より爆擊し、又戰鬪する場合あり、戰車としては崎嶇凸凹の複雜せる山野を跋跳し、耳を聾する許りに喧しき高音響の中にありて、機關銃を間斷なく射ち續ける。潛航艇は海中を潛行し、敵の艦船を沈沒せしむる役割を演ずることなれば、心身共に理想的の健全たるを要する。ボソニーの「今日の戰爭」には次の如く記してある。

「ヨーロッパの或る國が、その空軍の力を增さうと決心して、之れに必要な人員を徵集した處が、ヨーロッパ戰前の標準によつて、一年の兵役に耐へる程度の應募者は非常に多かつたが、その內わづかに千人に對して一人だけが、空軍に採用出來るものであつた。しかも採用された者の中、更に六%は訓練中に除外された。それでもなほ飛行士の中には、事故を起して死亡するものが少なくない。それによつて見れば、如何なる國に於ても全人口について言へば、千人の中に一人だけ、飛行に適する者があれば上乘である。そして戰車の運轉手に適するものに至つてはなほ更少ない。この兩種の武器に必要なる兵隊のタイプはほゞ同樣であつた、戰車隊に不適當な兵隊は、概して空軍にも適しない、訓練中の損失を計算すると、一臺の飛行機又は戰車に對して、二人の運轉手又は飛行士が必要である…

…。」（大内愛七氏譯、岩波書店）

人口千人の中に、僅かに一人の適格者ありとは、誠に驚くべき比率である。何故左樣に少數なるかと云ふに、飛行士や戰車運轉手は心理的能力の優秀を最大條件とするからである。更に同書より、次の一節を抄記して參考に資する。

「……飛行機乘は不斷の準備と特別の訓練と特別の節制とを必要とする職業である。それは神經と筋肉との完全なバランスを必要とする職業である。一萬八千乃至二萬フィートの高さでの戰鬪は、身體の全組織を苛烈な試煉に曝すものである。……夜襲は追跡と同樣に六ヶ敷い仕事であつて、たゞに精神上心理上の能力が優れてゐなければならないのみならず、智力も優れてゐなければならない。戰車の人員を得ることも亦、飛行機のそれに劣らず六ヶ敷い問題である。戰車は熱くて八釜しいために、最も逞ましい運轉手に對してすらも激しい神經衰弱を起させるから、餘程身體の强健で精神力の强い人でなければならないからである。……コンクリートの掩蔽壕の中にゐる時よりも、かういふ車輪の中にゐる時の方が、神經衰弱や頭痛のために逃げ出したくなる危險が多い。……ヨーロッパ大戰の時は、兵士の戰死は一年に十五%乃至二十%であつたが、現在では戰車及び飛行機の乘組員

の戰死は、二百%乃至三百%を下らないであらうと想像せられる。兵員補充の問題のみがこの點に關する問題ではなくして、この他なほ綱紀維持の問題が重要である。

近時の戰爭において、攻擊に向ふ人々にとつて精神教育が缺くべからざるものである、……昔は戰爭は少數の熱心なる選ばれたる人の仕事であつたが、今日總力戰の時代においては、近代の戰爭の要求を充すためには、全國民が一致協同することを要するのである」と。

支那事變以來、皇軍の連戰連勝を見慣れ聞き慣れした結果、無敵軍と尊信する餘り、將兵諸士の苦戰と辛酸とを輕視してはならない。惟ふに、今日皇軍の戰勝する所以は、永い歷史的傳統、强い不斷の訓練、深い精神教育の徹底せる所產であつて、出征に當りて俄かに一個の人生觀を與へたり、イデオロギーを吹き込むやうな輕率な措置に由つたものではない。

近代戰に於て勝利を獲るのは、國民精神の總動員、能率の總力戰の致せる所である。故に一人の飛行士、一人の戰車運轉手の戰死も、國寶の損失に均しい價値の消滅を意味する。實に千人に付一人といふ貴重な選手なることを銘記せねばならぬ。獨り飛行士、運轉手に限らず、凡そ戰線に出征し、生命を賭して戰ふ勇敢な將兵は、一人殘らず悉く身體强壯、精神健

全の壯者にて、一國の中堅層に屬する國寶であり、國粹であるので、一人の死傷と雖も多大な價値の損失を意味する。

總力戰に於ては人口千人に付一人の被選適格といふに反して、その大部分が適格者たるを要求される。卽ち六・七十歳以上の老年級及十五歳以下の幼少年級を除き、他の青壯年級は男女を問はず、全國民が總動員せらるゝ時代である。擧國一致一億一心とは卽ちそれであつて、苟も生を享くる限り、神經と筋肉との完全なるバランスを保ち、心身共に健全となり、心理上の優秀を持せねばならぬのである。

今次の歐洲大戰に於て佛蘭西の敗戰せる事由は、世上幾多の論議を經たるが、國民の心理と倫理が最も重視せられてゐる。佛蘭西人に比すれば、英國人の心臟は遙かに强く、神經亦太いと稱せらるゝも、獨逸軍のロンドン空爆の結果は神經衰弱者を增し、空爆の主要目的たる精神的に敵を疲らすことは、半ば達せられた觀がある。更に今後益〻連續空爆せらるゝ間には、彼等に幾多の異常症を招致し、精神上心理上の病者續出すべく、その恢復は容易ならざるに至るであらう。かく戰爭の心理的研究を要する範圍は誠に廣汎に亘るのである。

六、戰爭と戰費の膨脹

しかし戰時に於ける最大の關心事は經濟問題であつて、千百の論議も概ね玆に集中され、最後の解決は、經濟力と認める上に於て衆口一致してゐる。「近代戰は驚くべき巨額の戰費を要すると、その技術の進步せることにより大戰は到底起り得ない、萬一大戰となれば、勝敗の兩者共に崩壞する、將來の戰爭は人類の自殺を意味する」とて平和論を唱道したのは、ボーランド系の猶太人エアン・ブロッホ（イワン・シタニスラヴォヴィッチ）である。該書が今より四十餘年前一八九八年に刊行せられし當時、露帝ニコラス二世の注意を喚起し、遂に和蘭ヘーグに平和會議開催を唱道し、平和殿を建設する運びとなつたが、皮肉にもそれより數年の後、日露の開戰（一九〇四年）を見たのであつた。經濟上及技術上より見れば、國際大戰は滅亡といふ結論にも達するが、しかもそれは小說であつて事實でなく、現に戰爭は續出して止まない。見よ、第一次世界大戰に於て歐洲の交戰列强は各自の有する國富の數倍に該當する戰費を要した計算となつてゐる。彼のヤング案によれば、一九三〇年より一九八八年に至る五十八年間に於て、獨逸は二百七十六億四千一百萬ドルを英佛伊その他の聯合國側

に支拂ひ、聯合國側はそれを以て北米合衆國より融通して貰つた負債を返濟する計畫であり、斯くして合衆國が受取る額は二百十三億八百萬ドルと計算されたのであつた。しかし、獨逸は僅かにその一小部の外、支拂はぬも宜きことゝなり、各列强も亦、合衆國よりの負債をその儘支拂はずして今日に至つた。ヤング案を實現するには、獨逸國民は現代の終末頃まで約六十年の永き星霜に亘り、聯合國側のため奴隷生活を營まねばならぬ運命にあつた。獨逸がかゝる計畫を應諾せぬのは蓋し當然である。併し乍ら、之を拒否し得たのは獨逸國民の正義感と實力の致した所であることを銘記せねばならない。

近代戰は巨額の戰費を要するから、戰爭の休止又は軍備縮小に努力したかと云ふに、大戰後の世界列强は除外例なく、凡て軍事費豫算の膨脹を競うて來た。ワシントン會議及ロンドン會議に於て、海軍縮小なるもの一時行はれたが、之は英米兩國を五・五といふ同數位に置いて、日本を三に制限し、他日、英米兩國共同して一〇となり、以て日本の三を容易に潰滅し得るといふ魂膽に出でたので、英米合作の遠謀は當時既に計畫されてゐたのである。彼等の云ふ軍事費豫算の刪減、又は軍備縮小とは、實は日本の國防を制限し之を弱化する策謀に過ぎなかつた。この間、世界各國より敵視せられ、悲境に墜落せしめられた獨逸は、ナチスの勃興ありて再起の道拓かれ、他方伊太利はファシストの建設により、共に今日あるを致したのであるが、その間に處せる英米佛の陰謀惡策は、憎みても餘りあるもので、今やその嚴びしき天罰を受けつゝあるのである。

七、戰爭經濟學

戰爭經濟に關する著書、論文は、汗牛充棟啻ならざるも、その大部分は第一次世界大戰後の刊行にかゝり、交戰列强の實驗より得た所の論策にて、多くは當時の施設に據るものである。彼の世界大戰が劃期的となり、その間に得た實驗は今日を策するに役立つ所、素より少なしとせぬ。過去幾千年間の戰爭經濟策中にも、形式上に於て多少參考に資すべきものあるが、今や時勢は全く一變し去つた。歷史は肇國の初めより研究の要あるも、我等の實用に役立つ知識は、近代の變遷推移の經驗を重點とする。現在を招致した過去を輕視するのではないが、實際に適應する意味より言へば、萬端の環境を異にする今日の時勢に於ては、日進月歩の現代知識が最も有要であつて、遠き古代の出來事などは簡單に概括し去つて妨げない。日本ならば日露戰後、歐洲ならば世界大戰後の經過推移が重要の知識に屬する。特に戰爭經

濟の知識に於て然りと言へる。

單に貨幣價値の單位より見るも、その桁が全く違つて來た。日清戰爭當時の歳計豫算は漸く一億、日露戰爭當時は五億、今日は何十億、戰費に至つては早くも既に日露役の三十倍餘に上り、百二十億貯金とか、幾百億の戰時國債を算する時代である。眞個の國家總動員、總力戰、眞の一億一心一體が要求される時勢となつて來た。國内に於て氏族競爭を敢てした合戰時代の經驗や知識は、現代の科學戰と比較せられぬと同じ程度に、過去幾十百の戰爭經濟と今日のそれとは全く比較にならない。弓矢を用ゐた一騎打ちの合戰は、中世期に屬する。火藥による銃砲を使用したナポレオン戰爭も、歐洲全土を席捲したる點に於ては大戰であつて、各國に大影響を與へたが、第一次世界大戰はより一層深刻であつた。しかも刻下の歐洲大戰と支那事變とは、世界史的轉換を招致する劃期的大戰たるに於て、前の第一次世界大戰以上の意味があり、眞に千載一遇の機會となつてゐる。

敵の糧道を絶つには封鎖を以てし、海軍が、その主役を演ずるは、今昔とも同趣に出づるも、飛行機の發達により海軍の封鎖力を牽制するに至りて、格段の異變を生じて來た。戰爭に要する武器、空爆に要するガソリン、屑鐵を始め、幾多の資料にして自國に產せざれば、之が供給を他國に仰がざるを得ず、甲國にして之を禁輸すれば乙國に仰ぎ、乙國之を抑止すれば止むなく代用品を工夫せざるを得ない。凡そ戰時用諸資料の貿易を中止せしめ、以て敵を敗戰に導く戰術の形式は、今昔とも異なる所ないが、現代戰に於ては、それが國際關係に屬するがため、事は意外に複雜となり、結局經濟力が最後を決するが如き始末となるのである。

八、戰時經濟政策

戰線に於て、實際敵を打破する戰鬪員數と、之に要する運送及資材は、戰爭開始と共に必要不可缺のものなるが、これが供給には巨額の資金を要するは言ふを俟たぬ。そして戰線に於て要する資材及武器の製造は、銃後の勞働者に俟つのであるが、大戰中の米國の計算によれば、戰鬪員の需要に對し、銃後の勞働人口比率は一對十七と計算され、假りに百萬人の軍隊を戰線に送るとすれば、千七百萬の勞働人口を要すると言はれ、歐洲の標準に從へば、一對二十の比率にて、三百萬軍隊の維持には、少なくも銃後に五千四百萬の勞働人口を要すと云はれてゐる。この勞働人口の外、石油、鐵屑、ガソリン、各種飛行機各種重砲等々の製造

資料、衣食の代用品等に關する生産供給の問題等が數多ある。

夫等は直接戰鬪方面に屬するが、經濟政策としては、インフレーション、物價の管理、切符制に見る如き消費定量制、輸入及投資の管理、戰時公債の對策等を始め、現下の統制經濟に見る如き諸般の問題多々ありて、戰爭經濟は國民全體の日常生活の上に、直接の大影響を及ぼすことは既に世上周知の事實である。されればこそ、戰時の經濟策、特に戰債とその産業上及社會上に與ふる結果は、開戰と同時に愼重考慮される所以である。

「乏しきを憂へず、その均しからんことを欲す」といふ要望は、統制經濟時代に於て特に注意される。その盛行底止する所を知らざる闇取引の經濟事犯を始め、贅澤品の賣買禁止、さては國民服の制定、物價公定等に至るまで、朝夕我等の耳目に觸るゝ生活狀態に關する法規、取締、管理等の强調は、凡て戰爭經濟の範圍に屬するものにて、戰爭の科學的研究のうち最も主要の位地にある。

歐洲に於ては第十七世紀以來、幾多の戰爭を閲みし、就中英・佛・獨の三國に於て經驗する所多きを以て、歷史的教訓に顧みる所多々あるも、その主なるものは一七九三年より一八一五年に至るナポレオン戰爭と一八七〇年の獨佛戰爭時代の經驗が、參考に値ひするに止まり、之とても第一次世界大戰とは比較すべくもない。然るに日本に於ては日清・日露の二大戰役を閲したるも共に短期戰にて戰費も外債に依る所多かりしが、今次は一切內國債に限られ、しかも蔣政權を飽く迄援助する英米佛ソの四ケ國と戰つてゐるのである。最近の英米兩國は佛ソと反對に、一層露骨に敵性を發揮する所あり、日露戰役當時とは全然その趣を異にしてゐる。又歐米各國は第一次世界大戰の際、經濟方面に關する幾多の經驗を有せるも、日本に於ては今回が皮切りであれば、凸凹相容れざる政策上の缺陷あるも、亦止むを得ない事情として諒せられる。

英米兩國は疾くより日本の經濟力を蔑視し、事變を長期戰に陷らしめて、直接間接經濟的壓迫手段によりて國力を疲弊せしめ、その危機に乘じて、支那攻略の策謀に出でたのであるが、今日まで既に三ケ年餘を閲して、自給自足以て之に堪へたる事實は、彼等には奇蹟とも見られ、その底力の强きに驚畏する事態にある。最近英米が一層極東政策に乘出し、益々挑戰態度を强化し來り、結局は太平洋戰を開くであらうが、之が日本の南進を餘儀なくして、その機會を促進せしめ、却て皇國の勢力を擴大し、扶植せしむる因緣を造るに均しき趣きあるも、油斷は大敵、徒らに大言壯語の樂觀を容さぬ。經濟戰はこれからの談で、筆者は、ま

だ〳〵國民の緊張が足りないと思ふてゐる。

九、戰爭の人的損失

曾て獨逸のモルトケ將軍は「永久の平和とは夢である。戰爭は神によりて定められたる無限の秩序の一部である」と云ひ、又他の者は「戰爭は生存競爭適者生存の一部である、事物の進化する上に於て、戰爭は何處にも又何時でもあるべきものだ」と言つた。しかもその規模の大なる點に於て、一九一四年—一八年の第一次世界大戰に比較せらるべきものは、百數十年前のナポレオン・ボナパートの大戰爭であるが、現下の支那事變と歐洲大戰とは、今後の發展によりてそれと相匹敵し、若くはそれ以上の意義ある戰爭と言へる。

近代の戰爭は甲乙兩國の間に限定されず、動もすれば世界戰に延長する危險性あるを特徵とする。もし現下の戰爭にして世界戰に進むことあらば、第一次世界大戰に劣らず政治、經濟及文化上に及ぼす影響の多大なることは想像に餘りある。玆に、その一例として戰死傷者數を擧げ、その一端を察する料に供したい。

左表は第一次世界大戰當時の各交戰國の戰死傷者數に就き、北米合衆國軍部に於て、一九二四年二月二十五日その調査に着手し、一九二八年六月三十日まで四ヶ年半の日子を費して完成したる概括にて、この種の調査のうち最も正確にして信據に値ひする數字である。

（備考）、殺害及死亡とは戰死者にて、總ての原因による死亡を計上してある。英佛兩國の分は、兩政府當局の調査に係り、北米合衆國の分は陸軍と協力せる海軍をも含み、尙ほ同國の負傷中には、負傷後死亡せる一萬四千五百人を含む。又佛國に於て陸軍と協力せる米國の海軍に屬する分は之を除外した。左に米國陸軍のみの損失を擧げて參考に供する。

動員總數四、〇五七、一〇一人、殺害及死亡數一一九、九五六人、負傷數一九三、六六三人（負傷後に死亡せる一二、九四二人を除けば一八二、六七四人となる）俘虜四、四一三人（行方不明を除ける數）死傷その他計三一八、〇四二人にて、動員總數に對する割合は七・〇%となる。

かくの如く、聯合國側の動員總數四千二百萬、損失二千二百萬に上りて、五割二分餘の比率を示せるが、露・佛・羅三ヶ國の損失は最も多く、七割以上に達した。中歐同盟國側の動員總數は二千二百萬、損失千五百萬にて、六割七分といふ多大の比率に上つた。その兩者を合せて動員總數六千五百萬、損失三千七百萬人を算し、その比率は五割七分となつてゐる。

聯合國側

	動員兵力總數	殺害及死亡	負傷	俘虜及行方不明	死傷その他 計	動員總數に對する死傷割合
露西亞	一三、〇〇〇、〇〇〇	一、七〇〇、〇〇〇	四、九五〇、〇〇〇	二、五〇〇、〇〇〇	九、一五〇、〇〇〇	七六・三
佛蘭西	八、四一〇、〇〇〇	一、三五七、八〇〇	四、二六六、〇〇〇	五三七、〇〇〇	六、一六〇、八〇〇	七三・三
英吉利	八、九〇四、四六七	九〇八、三七一	二、〇九〇、二二二	一、九一、六五二	三、一九〇、二三五	三五・八
伊太利	五、六一五、〇〇〇	六五〇、〇〇〇	九四七、〇〇〇	六〇〇、〇〇〇	二、一九七、〇〇〇	三九・一
北米合衆國	四、三五五、〇〇〇	一二六、〇〇〇	二三四、三〇〇	四、五〇〇	三五〇、三〇〇	八・〇
日本	八〇〇、〇〇〇	三〇〇	九〇七	三	一、二一〇	・二
羅馬尼	七五〇、〇〇〇	三三五、七〇六	一一〇、〇〇〇	八〇、〇〇〇	五三五、七〇六	七一・四
セルビア	七〇七、三四三	四五、〇〇〇	一三三、一四八	一五三、九五八	三三一、一〇六	四六・八
白耳義	二六七、〇〇〇	一三、七一六	四四、六八六	三四、六五九	九三、〇六一	三四・九
希臘	二三〇、〇〇〇	五、〇〇〇	二一、〇〇〇	一、〇〇〇	二七、〇〇〇	一一・七
葡萄牙	一〇〇、〇〇〇	七、二三一	一三、七五一	一二、三一八	三三、二九一	三三・三
モンテネグロ	五〇、〇〇〇	三、〇〇〇	一〇、〇〇〇	七、〇〇〇	二〇、〇〇〇	四〇・〇
計	四二、一八八、八一〇	五、一五二、一一五	一二、八三一、〇〇四	四、一二一、〇九〇	二二、〇八九、七〇九	五二・三

同盟國側

	獨逸	墺匈	佛國	英國	露國	伊太利
獨逸	二、〇〇〇、〇〇〇	一、七七三、七〇〇	四、二六、〇五八	一、一五三、八〇〇	七、一四二、五五八	六四・九
墺及匈國	七、八〇〇、〇〇〇	一、二〇〇、〇〇〇	三、六二〇、〇〇〇	二、二〇〇、〇〇〇	七、〇二〇、〇〇〇	九〇・〇
土耳古	二、八五〇、〇〇〇	三三五、〇〇〇	四〇〇、〇〇〇	二五〇、〇〇〇	九七五、〇〇〇	三四・二
ブルガリヤ	一、二〇〇、〇〇〇	八七、五〇〇	一五二、三九〇	二七、〇二九	二六六、九一九	二二・二
計	三二、八五〇、〇〇〇	三、三八六、二〇〇	八、三八八、四四八	三、六二九、八二九	一五、四〇四、四七七	六七・四
總計	六五、〇三八、八一〇	八、五三八、三一五	二一、二二九、四五二	七、七五〇、九一九	三七、四九四、一八六	五七・六

又過去三百年の間に、歐洲主要國に於て戰時動員せる總數と、戰死傷の損失數との比率は次の如く計上されてゐる。（ビトリム・ソローキン著社會文化動學第三卷參照）

	獨逸	墺匈	英國	露國	伊太利
第十七世紀	三・五%	二二・三%	一三・一%	一〇・五%	五・一%	三・三%
第十八世紀	一九・〇	一六・五	一二・六	一二・三	一五・〇	七・三
第十九世紀	一五・一	一一・一	二二・五	八・三	一二・二	七・六

（備考）第十七世紀の獨逸の比率數は、五十年間の事實なるが、他は凡て百年間の事實である。

第十五・十六の兩世紀に於ける歐洲主要國の戰爭による損失比率は、平均五分七厘乃至五

分九厘であつたが、第十七世紀以來平均一割五分强を示すに至つた。然るに第二十世紀、卽ち現代初期に勃發せる第一次世界大戰は、叙上の如く多きは九割（墺匈）に上り、總平均にて五割七分六厘を示してゐる。若しそれ右大戰後に起つた露西亞—波蘭戰（一九一九年—一九二〇年）土耳古—希臘戰（一九二一—一九二二）モロッコのリッフ地方戰（一九二三—一九二六）を始め、伊太利—エチオピア戰（一九三五—一九三六）の外、滿洲事變及上海事變を加へ、更に目下繼續中の支那事變並に昨秋來の歐洲大戰等に於ける事實を加へて之を計上すれば、その損失は驚くべき數となり、現世紀の上半期は當に「世界總力戰時代」として、歴史上その類例を絶するものとならう。

一〇、文明の進歩と戰爭

現代文明の建設的構成は、偉大なる進歩を示してゐるが、同時に破壞的勢力も亦偉大なる發展を示して來たことは注意すべき現象である。

惟ふに戰爭は文明の進歩發達に伴ひ益々增長する運にある。試みに見よ、未開原始社會、卽ち蠻人の棲息する地域にて、酋長の統治下に蠢動する如き部落には、曾て戰爭らしき戰爭は起つてゐない。甲地方が政治組織を構成する段階に進み、乙地方に於ても、またそれと同樣の組織構成するとも、兩治下にして人口の增加に伴ふ生活資料充足する所あれば、經濟的理由に基く紛議は生じない。假令政治的支配の慾望による競爭生ずるとも、交通不便なれば僅かに隣接の地方に限られ小紛擾に止まる。蓋し人間の慾望は社會の進歩に伴うて發達するを原則とする。山野に獵し、河川に漁し、果實を採取して飢渴を充たし、穴居雨露を凌けば以て足るの簡易生活を營む時代は、集團的生存競爭に死を賭するの要は少ない。

文明開化して人口增殖し、產業の進歩するとともに、政治組織の要起りて國家の建設となり、甲乙兩國にして、互に政治經濟宗教その他の相異と利害の衝突あれば、氏族・人種又は國家の集團的競爭や紛議を釀成する。そこに外交的妥協あれば現狀維持の平和持續するも、もし集團の盛衰興廢を招來する如きものあれば、必ず戰ふのは自然の勢ひである。往時は王位繼承の黨派、宗教信仰の異同、氏族の政權爭奪等に基く戰爭が多く、しかもそれらは國內に限り、その規模の大小は、利害衝突を感ずる集團の量的關係に比例したが、時勢は疾く既に一變し去つた。

又强國には戰爭の度數多いが、弱國にはそれが少ない。古代の希臘・羅馬・近代の英・佛・獨

等はその適例である。强國とは他の强國との制覇戰に於て勝利を博し、又は競爭國と對峙する同盟を造り、その勢力を持續して國威を發揚したる國である。その多くは弱肉强食によつて獲たる位地なれば、戰爭する度數も自から多きを致すのである。之に反して弱國は敗戰後滅亡し、又は衰頽して第二位、第三位の格に低下し去り、列强と伍し得ないから、自ら戰爭の度數も少ない。或意味に於て古來國の强弱は、概ね戰爭の度數に比例してゐるとも見られる。中には北米合衆國の如く、雜多移植民人口を以て構成され、幸にも自然資源の豐富なるものありて機械文明の發達を促進强化した特徵あるも、しかも尙ほ革命戰爭を起して獨立し、南北戰爭によりて中央集權を實現し、西班牙と戰つてフィリッピンを獲得し、第一次世界大戰當時は、聯合國側に參加して佛國に出兵し、今次は英國を援助して獨伊に對抗し、蔣政權を援助して日本を壓迫し、更に太平洋戰を招致する策謀に腐心する等に徵すれば、米國の强盛もまた戰爭の影響による所多いのであつて、除外例とはならない。

古來敗戰して最早や再興の機なく、滅亡し去れる國の文化は、戰勝國のそれに比して必ずしも低級なるものでない。否な古今東西を通じて戰勝國の文化は、敗戰國のそれに比して劣る場合が寧ろ多きを常とする。戰爭は舊文化を潰滅して新文化を創造し、或は代置し或は利用する。戰勝した古代ローマの文化は、希臘の文化より高かつたのでない、西ローマを亡ぼしたゲルマン人の文化も、ローマに優つてゐたのでない。支那は古來南北の爭ひを以て一貫し來れるが、南方敗戰民族文化の進步は、北方の戰勝民族の及ぶ所でなかつた。かく戰爭の勝敗と文化の發展とは必ずしも合致してゐない。

戰勝の榮冠は强き鬪爭心と、組織的破壞作用と、勇猛果敢の攻擊力とを具ふる民族の手に歸するを原則とする。之に反して敗戰は、假令燦然たる文化輝くとも、國內に政黨政派分立するとか、中堅層の意見區々として一致せぬとか、その集團の全體的協力なき所は必ず敵愾心弱く、攻擊力を缺く嫌ひあり、特に國家體制が脆弱であることを證する。國民各自が己が安佚を貪ぼりて國防を怠り、他の破壞力を防止する準備少く、政治組織が弱體化して居れば敗戰は結局免れない數である。今次の歐洲戰に於て佛蘭西・白耳義・和蘭を始め敗戰の事情は多々あるが如きも、古來の常則に支配されたと云へば以て足る。治に居て亂を忘れ、他力を本願として獨善主義に始終する民族は、何時かは衰亡を免れないのである。

戰爭の頻繁は文明の進步に比例するとせば、今後益々戰爭勃發の將來性が問題となる。從來の歷史に徵すれば、必ずしもそれが永久の將來性を示唆するものでない。上古には掠奪結

婚の名殘とも見るべき、他民族の婦人を掠奪するために戰爭となつたこともあるが、疾く既にその跡を絶つてゐる。又古來王位繼承を繞り、兄弟各徒黨を結びて戰爭せる例少なからぬが、之は封建時代の御家騷動と同型に屬し、專制君主政治の體制革まりて以來、殆どその跡を印しない。歐洲に於ては宗教信仰の異同に基ける戰爭多く、彼の十字軍を始め、近代の羅馬加特利教と新教との衝突より起れる戰爭も永續した。しかも斯の如きは永き歴史的事情の致す所であつて、大體歐洲のみに限られたとも云へる。中世期以來の歐洲諸國は、封建制度の下に地方的割據となりて分權し、中央集權の國家らしき國家はなかつた。その間全歐洲を擧げて統一的に支配せるは、獨り宗教機關たる寺院であつて、その支配權は之に君臨せる羅馬法王の掌裡に歸し、寺院の權勢は群小分權の政治組織を凌駕する事態となつた。爲めに一切社會文化の中樞は、この宗教機關内に織り込まれ、之が中心となつて當時の社會が維持せられたのである。

然るに一方宗教改革運動起り、他方統一せる新國家起りて有力の君主が政權を握るに當り、從來宗教的羅馬法王の統治下に屬せる社會機關を漸次政治的君主の掌裡に歸せしめんとする繩張り、即ち國家と寺院、君主と羅馬法王との勢力範圍の爭ひとなつた。歐洲近代の各國は、この戰爭のため二百年餘を費せるが、國家側の帝王勝ち、寺院側の法王敗れて、爾後その跡を絶つたのである。

斯の如く、曾て戰爭の原因となれるものも、今や既に消滅し去りて、近時は政治的、經濟的、社會的のものが主なる要素となつて來た。夫等の要素も往時の王位繼承や宗教關係に依る衝突事情の跡を絶てるが如く、相互に理解し妥協し調和するに至らば、戰爭の機會も自ら減少することであらう。

一一、戰爭勃發の原因

何故に戰爭は起るか、その原因に就て研究せる文獻は素より一にして足らない。最近では米國人テル・ターナー著『戰爭の原因と新革命』(一九二七年刊)あり、之は通俗本にて、第十六世紀末に於ける英西間のアルマダ戰(一五八八年)を始め、現代モロッコのリッフ戰(一九二三—二六年)に至るまで、六十有餘の主要な近代戰爭の經過を叙し、最後にその原因を次の如く概括してゐる。

(一)經濟的原因　としては、領土、植民地、貿易、陸路、海路、境界、島嶼、港、都市、

鑛山、產業、租稅、支拂金、獨占等の爭ひに因るもの。

(二)王朝的原因　としては、世襲、神權、系譜、繼承權、長子相續、限定選擧等の爭ひに因るもの。

(三)民族的原因　としては、愛國心、人種的自尊、國民的自尊、猜忌嫉妬、傳統、民衆の精神等。

(四)宗教的原因　としては、獻身勤行、禮拜形式の相違、狂的迷信、固陋頑迷、異教徒迫害、科學の興隆、自由主義、殉教の志望等。

(五)感傷的原因　としては、空想、希望、正義感、解放要求、同情、仲裁干涉の誘惑等。

右の分類による王朝的及宗教的原因は、前述の如く既に消失し、近時は經濟的・民族的を主とするが、感傷的要因（昨今に於ける北米合衆國の態度は最好適例）も中々輕視されない事態にある。

佛國人エーヴ・グヨウの著に『戰爭の原因及結果』（一九一六年刊）がある。彼は曾て國務大臣たり、「經濟雜誌」の發行者たる經歷を有し、第一次世界大戰中、刊行せられてゐる。本書は戰爭の政治的原因・經濟的原因・歷史的原因・墺匈王國戰の歷史的原因及結果の五部

六十四章より成り、主として世界大戰に至るまでの史實と統計とにより、該大戰を招致せる事情を究めたものである。かく近代戰爭の原因を政治的・經濟的・歷史的の三點に分類することは一般に合致する處であるが、之と同時に、現代戰には次の如き新見解が擡頭し、それが力說せらるゝに至つた。卽ち文明の矛盾衝突によるといふことは、第一次世界大戰當時より熾に唱道せられたものである。

(イ)人間の政治は武力の强制によつて得られ、且つ支持されたとするもの、卽ち軍國主義

(ロ)人間の政治は文明人の法律によりて得られ、且つ支持されたとするもの、卽ち人道主義

この兩者衝突に因るとて聯合國側、主として英米佛の三國は人道主義を取るに對し、中央同盟側の獨逸は軍國主義を取る。第一次世界大戰の一因は、この兩文明の衝突なりと見るのである。白耳義のレオン・アンネビックはその著『英國の經濟的帝國主義』に次の如く論じてゐる。「攻擊的にして且つ秩序的なる獨逸は、經濟戰線に於て參謀本部の原則を適用し、以てその貿易と產業を增長せしめた。斯の如きは卽ち軍國的帝國主義といふべきものである」と。前揭のエーヴ・グヨウも亦、同系の思想にてその著書に次の如く述べてゐる。

『帝國主義とは經濟的なると否とを問はず、唯武力に賴るものである。獨逸帝國の經濟政策なるものは、國家が人民に貿易を强ゆる仕組の遺物である。「經濟的帝國主義」と云ふ言明には名辭上の矛盾がある。何故ならば、凡そ經濟的行動とは生產又は交易によつて獲得するを意味するに拘らず、帝國主義は交易を以てせず、一に武力によつて獲得するからである。

生產的文明は契約の自由に基くに反して、軍國的文明は自由の制限を建前とする。生產的文明の動機力は經濟的競爭であるに反して、軍國的文明のそれは政治的對抗である。

この兩文明の最も特徵ある型は、英獨の二國に於て示されてゐる。それ故英國の狂氣じみた嫉視は獨逸に向つて表示された。現下の戰爭（第一次世界大戰を指す）は、それ等兩文明の衝突である、この戰爭は生產的文明が軍國的文明を敗北せしめてのみ終局を告ぐるであらう』と。

右の如き言論は第一次世界大戰當時、英米佛側に於て屢々唱道されたのであるが、今日尙ほ依然たるものがある。併しながら英佛を始め、和蘭・西班牙・葡萄牙等の近代歐洲が東西南北に數多の植民地を獲得し、又競爭國を打倒したのは、斷じて生產的ではなく、凡て軍國的であつたことを忘却してはならない。彼等の言論は自家撞着を免れぬものであつて、歷史は之を證明して餘りある。

一二、持てる國と持たぬ國の衝突

今次の歐洲大戰開始前後に於て屢々見聞する所は、全體主義國家群と自由民主々義國家群との戰爭なりといふことである。從來流行した軍國主義の名辭に代つたのは、この全體主義なる名辭で、英米佛の政治家及論客が好んで使用する所である。卽ち個人主義・民主々義・世界主義を奉ずる英米佛は、この主義のために戰はねばならぬと云ふのである。しかも是等の主義思想は由來、猶太敎と猶太民族の感化影響に基因し、事實は一民族・一國家の專制獨占、卽ち世界征服を期待するものである。之にも增して重視せらるゝは持てる國と持たぬ國の衝突といふことである。

「ハヴス」と「ハヴナッツ」なる用語は第一次大戰後幾に流行し、生活資源たる原料の交易、人口の密度と食糧關係より立論して戰爭問題に及ぶ場合は、必ず「持たぬ國」たる日本と獨逸と伊太利の三國を擧げて非難し、「持てる國」たる英米佛の優越を誇り、現狀維持を主

張するのが彼等の常である。特に日本に於ては過去七十年來、英米依存主義に魅せられ、中等教育以上は全國の教育機關を擧げて「英語」を第一外國語として教授する關係上、英米兩國の思想的影響の多大であることは言ふ迄もない。支那事變以來多少の變調を呈し、最近漸く獨伊と同盟を結ぶに至りて、對英米觀に幾分異狀を來せるも、明治以來の惰性と依然英語教授の隆盛なる結果として、その影響は容易に脫却し得ない事態にある。

その一例として人口問題を擧示しよう。英國のカール・サウンダー、クロッカー及米國のワーレン・トムソン等は、移住によりて人口問題を解決するの不可能を主張する人々である。卽ちサウンダーは「政治的病弊は政治的治療に待つべし」と論じ、クロッカーは『日本の人口問題、將來の危機』(一九三一年刊)を著はし、「移民は過剩人口解決の方法として無效のものである」と云ひ、トムソンは『世界人口の危險點』(一九三〇年刊)を著はし、「日本その他の國に於て、若し出生制限の實施が行はれないとすれば、移植民の擴大によつて人口の壓力問題を解決し得られるものでない」と斷じてゐる。人口又は移民問題を議する英米の學者にして、之と見地を異にするものなきにあらざるも、苟も競爭國たる日獨伊に關する場合は、何れも出生制限の奬勵に一致してゐる。この種の意見は必ずしも宣傳用のみでなく、相當の根據もある。故に批判力ある讀者ならば適宜之を評價し得るが、歐米崇拜に永く魅せられたインテリ級は、唯だ在るが儘に受け入れて之に贊同する傾向あり、自ら出生制限に關する書類・方法論等盛を致し、使用器具藥品の販賣奬勵も一時大に流行したのであつた。之が直接及間接に日本の人口出生率に影響なかりしとは、何人と雖も之を斷定し得ない。しかも今や如何と見る、支那事變以來の人口問題は從來とその趣を異にし、「產めよ殖やせよ」の叫聲高まり、多子家族の表彰、多產奬勵保護策等行はれ、如今只管人口增殖政策に腐心する時勢となつた。

要するに、「持てる國」は、「持たぬ國」の人口增殖して、自國の領域內に移住されることを好まない。卽ち己が勢力範圍が侵害される結果を恐れてゐる。彼等は持たぬ民族共が太陽の光線少なき小地域に蠢動群居するを希望するのである。之がため白人濠洲主義を唱道して疾く閉鎖した、南阿聯邦も疾くより來住移民を禁止してゐる。米國もまた大戰後、移民の制限と禁止とによりて閉鎖した。單にカリホルニヤの一洲內に、日本の本土が優に吸ひ込まれて、尙ほ餘りある廣さを有してすら然りである。獨りこの人口問題に限らず、原料品の交易問題もまた同樣である。蘭印及佛印は日本國民の生活上及軍事關係の物資豐富なるものあれ

ば、日本は之と大に交易を欲するに拘らず、英米兩國は現に之が獨占に狂奔して、日本への販賣を妨害して排日の氣運を高めつゝある、この眼前の事實を如何に見るべきぞ。英米兩國人は、口に高尚な理想を說き、筆に巧妙な說を書くが、事實は世界史上類例なき僞善國である。他國に對する場合は、凡ゆる宣傳戰によつて之を脆弱ならしめ、他の必要とする物資を獨占して、その貿易を禁止するのみならず、他の主權國に屬する地域にもまた之を應用してその通商を妨害して經濟的壓迫を强化する。これ旣に宣戰なき交戰國であるから、その覺悟を以て對抗する外なきに至らしめる。近代の戰爭は斯かる經濟的壓迫に反抗して起るのが多い。英米の如く學者や宗敎家まで、政治家に阿ねりて宣傳戰に參加する時代なれば、學校の外國語敎育上及敎會の傳道上に於ても、その指導を誤らざるやう注意を要する。現に宗敎界の內外有力者級にて、旣に法に問はれ檢束せられたるものある事實に徵して、之を諒知すべきである。

一三、世界大戰の色彩

戰爭の多くは甲乙兩國間の衝突に屬し、世界大戰に延長することは稀有であつて、現代の初期に於て始めて之を見たのである。古代マケドニアのアレキサンダーの東亞細亞に及べる遠征、蒙古大軍の歐洲侵略戰は現にその名殘をハンガリーに止め、又ナポレオン大帝の歐洲全土を席捲した攻略は、その最大のものであつた。歐洲と亞細亞兩族の衝突は古來珍しからず、又埃及を中心とせる阿弗利加と亞細亞民族並に古代ローマ時代に於ける歐洲と阿弗利加の衝突等あつたが、何れも地中海を中心とせる沿岸諸國の關係に止まつた。

然るに近時世界大戰たるべき危險性を示すに至れるは、(一)阿弗利加大陸が擧げて歐洲各國に分割されたこと、(二)英・佛・和・西・葡等の植民地が東南の太平洋其他に普及せること、(三)南米大陸諸國に於て歐米の勢力が衝突すること、(四)北米合衆國が半世紀以來、異常の進步發達を遂げ、世界一の强國を以て任ずるに至つたこと等より、甲乙兩國間の利害關係が、直ちに國際間に影響するからである。之と同時に飛行機・軍艦等の精銳なる武器が發達し、他方電信・電話を始め、通信及交通機關の進步により地球上の距離が縮小せられ、各國の出來事は卽日全世界に報道せらるゝより、自ら神經過敏を致し、それが悉く國際間に影響して、世界的に普及擴布する時代となつたからである。

世界大戰を再び繰返すことは、人類文化の破滅を招來する虞がある。されば現下の趨勢た

る獨伊樞軸に據る歐洲の經濟共榮圈、北米合衆國を中心とする南北兩米の共榮圈、大露西亞を中心とするソ聯邦の共榮圈、及日滿支蒙より南太平洋を包括する新東亞共榮圈の四大ブロックの成立を以て、世界の新秩序とする點に就き、相互に理解し妥協する所あれば、始めて世界の平和は招來するのである。之を實現するには、英國の覺醒を先決問題とする。しかも依然として覺醒する所なければ、之を清算することが急務である。而して、この急務を妨害し、又は遲延せしむる米國の援英政策と援蔣行爲との中止が最も要望される。米國現下の對外政策の繼續こそは、世界平和の招來を妨ぐる唯一の動力である。その繼續は人類の敵となり、世界大戰に至らしむる最大原因となるので、その責任は未來永劫、問はるべきものである。もし米國當局にして覺醒する所あり、援英・援蔣行爲を斷然中止し、直接間接戰爭に參加するなくば、米國が將來一層の盛運に向ふは必然の數である。

一四、今次大戰の由來

第一次世界大戰の結果は、十數箇の列强が協力して獨逸といふ一國を壓迫し、墺國を分裂せしめ、民族自決主義によりて小國を新設し、四方より獨逸包圍陣を張り、窮地に陷らしめた。之に反して英國は最大利益の獲得に成功し、先づ國際聯盟といふ機關を構成し、各自治領に對して一國一票の權を賦與し、之を自國の頤使下に置きて多數決を賴りとした。佛國また包圍陣たる小協商國と金權的同盟を結びて英國と協力した。斯かる組織によつて英佛兩國の永久的安定の具と爲したのは、餘りにも利己的で陰險極まるものであつた。果然看板に僞りあり、實質的に無力なるがため國際聯盟も遂に形式に流れ、大戰後の新秩序建設に何等貢獻し得なかつた。畢竟、世界を擧げて猶太的なる英佛兩國の頤使下に置かんと計畫したからである。然るに今次の獨伊樞軸は、歐洲大陸より英國の干涉と係累を滅却し、歐洲大陸自體を經濟共榮圈に建設せんとするのである。既に日獨伊三國同盟に參加したるものは、ハンガリー、ルーマニア及スロヴァキアの三ケ國を始め更にバルカン全面に及ぶ形勢を示せるが愈々歐洲全土の共同一致を實現すれば、假令英米兩國が共同戰線を張るとも、之を打破する可能性がないから、玆に平和來りて歐洲は新秩序の建設に邁進し、英國といふ暴君のため數百年來、苦惱せしめられた厄拂ひをなす段階に入る、洵にこれ祝福すべきことである。

東亞及南洋方面の白人禍も、數百年來の歷史的事實であるが、將來日・滿・支・蒙の協同體と南太平洋を包括する大東亞の新共榮圈を形造り、之を東亞人の東亞とすれば、玆にも平

和が招來する。歐洲大陸と亞細亞大陸とに共通する大敵性は英國である。さればこそ歐洲大戰も將た又支那事變も、英國勢力の打倒といふ點に於て相一致するのである。

曩にソ聯首相兼外相たるモロトフの伯林訪問となり、ヒトラー總統と會見の結果は、獨伊樞軸に有利なりしと云はれ、我が日本との關係もまた漸次順境に進捗する氣運にある。もしソ聯にして日獨伊三國同盟に對し、嚴正中立の態度を持するとせば、殘る所は唯一の米國のみである。（註、昭和十六年四月十三日、日ソ中立條約成立、同月二十五日御批准あり同日より効力發生した。校正の際、追補）

惟ふに今日の米國は英國に對して軍艦、飛行機その他の物資を供給して援助し、蔣政權に對してもクレヂット及軍需品を供給して援助する所あるが、急速に參戰するや否やは依然疑問である。そは歐洲に出兵するも上陸して行進すべき基點なく、空爆下にある英國に上陸するも手の施すべきものなく、出兵の時機は既に去つた觀がある。之に反して極東に向ひ我日本と海戰を交ゆる時機は、未だ尙早に屬する。香港・新嘉坡方面に於て英國と共同戰線を張れば、相當戰ふべき機會あらんも、之は却て日本勢力の南進を促がす契機を造るものにて、他日海軍大擴張計畫完成の日を待つ要ありとの意見も行はれてゐる。

兎角する間に、歐洲の獨伊樞軸の活躍は漸次盛大となり、三國同盟への協力も增加してその基礎は益々鞏固を致す、他方、日本の計畫する東亞共榮圈の建設も漸次進捗することなれば、米國對極東戰の尙早觀も、一變して或は立遲れとなるなきを保せぬ。東京・伯林・羅馬の樞軸が協力して、互に平和の建設に邁進する際、如何に感傷的な米國なりとて、突如宣戰を敢てする如き愚を學ぶまい。斯く見來れば、歐洲及東亞の二方面に於て、米國の態度を警戒すべきは當然のことなるも、徒らに神經を尖らす必要はなからう。勿論最惡の場合を豫想して常住これが準備を怠らぬことは肝腎である。

一五、太陽熱と景氣變動

周知の如く商業界には、好況と不況との動搖がある。經濟學者はこの律動現象を、循環運動として觀察してゐる。所謂景氣の變動にて、一般にこれを繁昌期、恐慌期、沈滯期及恢復期に區分するを常とする。この景氣變動の研究に就ては、歐米諸國にも幾多の施設あり、之に關する文獻も既に多大に上つてゐる。

景氣變動を研究し始めた當時、種々の所說行はれた中に、氣象學上よりこれが解說を試み

た一派があつた。英國のスタンレイ・ゼボンの如きは、その一人である。彼に『太陽熱と商業活動』(一九一〇年刊)と題する著あり、主として商業活動及失業の變動原因として、太陽熱の變化との關係を研究したものである。即ち農産物收穫と氣候の關係、收穫と商業との關係、更に太陽面黑點、紅焰、氣溫、北米合衆國の羊毛、世界の羊毛、鐵道の收入、世界穀物の收穫、世界棉花の收穫等の相互關係を見るに統計圖表を以てし、氣候と太陽熱との關係より、景氣變動の原因を觀察したのである。彼の使用せる研究資料は、第十九世紀後半より第二十世紀初頭のものにて、主として農産物收穫の高低を重視したるため、太陽熱と氣象關係が割合に著しく見えたやうな事情があり、爲めに世の耳目を惹く所あつた。

これと同時に、英國には、約十年目毎に商業景氣の變動ありとの說が行はれた。例せば一八七〇年以降一九二三年まで四十三年間に亙る銀行平均割引步合、ロンドン銀行家手形交換高、一人當り貿易輸出入額、勞働組合員の失業率、物價指數、賃銀指數、貧民救助費の割合、婚姻率、一人當り煙草消費高、等々に關する統計を列擧し、對照し來れば、各項との間、時に一・二年の差異なきにあらざるも、全體に於てその高低曲線に同一傾向を示すものあるより、それが唱道されたのであつた。しかもそれは英國獨自の經濟及社會事情より來れる現象であつて直ちにこれを世界各國に適用し得るものでない。そは世界中、何れの國と雖も英國と全然同一の事態に置かれてゐるものはないからである。各國とも景氣の變動あることは何人もこれを認むるも、その變動の早晩、期間の長短、特に經濟事情と社會現象の相互關係の如きは、各國ともそれ〴〵相異あるから、全然同一といふことは到底あり得ないのである。この一事に徵するも、凡ての制度、文物、思想等の盲目的輸入、無批判的模倣、迷信的崇拜の如何に愚なるものである乎が明かである。

戰爭研究の中途に於て、右景氣變動の一節を挿入したため、或は不可解に感ぜらるゝ向もあらんが、實は戰爭論中にも、またこれに類似する所說あることを示す趣意に出でたのである。戰爭の原因に關する議論の如きは多岐に亘り、時所位によりて異なれば、各國それ〴〵の特殊事情より生ずる。これを擧げて同一架上に陳列する如きは、統一病者の夢想に過ぎないものである。

一六、太陽面の黑點と和戰

歷史上、曾て永久の平和もなければ永久の戰爭もなかつた。唯だ戰爭なき時は平時と呼ば

れ、戰爭ある時は戰時と稱されるが、戰爭終止の後には平和來り、平和破れて又戰爭來るので、相互に交代し循環するのが國際生活の常である。それに對し一定の時間的理由を附したものに、獨逸の學者ケイ・メウエスがある。彼は『國際生活の和戰期と次の世界戰爭の豫告』(初版一八九六年刊、再版一九二二年刊)を著はした。筆者は本書の註文を發したのであるが、本稿起草の當日まで之を入手する運びに至らぬため、ソローキン著『社會文化動學』に引證せるものを借用して、その一端を推するに止めた。メウエスの所說は天體物理學といふよりも寧ろ星占學的のもので、その要旨は次の如し。

戰爭と平和(科學及技術の開花)の時期といふのは、主として木星、土星、天王星なる三遊星の太陽に對する位置の關係から影響される。地球の乾濕及豐凶もこの位置に關係するのである。

三遊星の回轉によりて——氣候的及同影響により太陽と太陽面の黑點は、決定的作用を爲す——人間の行動及社會事件をも定める。

メウエスによれば、木星・土星及天王星の三遊星は六七五・五年毎に太陽に對し同位置に復歸することになる。この時期を百十一年又は百十二年と六期に區分する。この百十一年又は

百十二年間は、戰爭の二期と平和の二期とに分つ、その各一時期を平均すれば二十七・八年となる。かくてメウエスは、西暦紀元前二千四百年より紀元後二千百年に至る四千五百年間の表を作つた。その內の數節を例示して一斑を察する資に供する。

西暦

百十一年間	(イ)戰爭	二九〇—三一八	デオクレチヤヌス、マクシミリヤヌス、コンスタンチヌス其他の戰爭
	(ロ)平和	三一八—三四六	基督教採用、ニケーマ宗教會議、基督教會の組織
	(ハ)戰爭	四四六—三八〇	民族の大移動、フン族の侵入、アドリアノープル其他の戰爭
	(ニ)平和	三八〇—四〇一	テオドシウス大帝、サンバオロ、ヴァルガタ、オーガスチン等
百十一年間	(イ)戰爭	四〇一—四二九	ゲルマン民族の戰爭、アラリック、アタオルフ、ラダガイス、ワリヤ其他戰爭
	(ロ)平和	四二九—四五〇	ゲルマン國の組織、ローマ法王レオ一世
	(ハ)戰爭	四五〇—四八六	アッチラ死し、フン王國瓦解、ヴァンダル伊太利に寇す
	(ニ)平和	四八六—五一二	フランク基督教に改宗

更に近代に關する例を示せば次の如し。

百十一年間

(イ)戰爭	一七三七—一七六五	フリードッヒ二世、シレジアン戰
(ロ)平和	一七六五—一七九三	獨逸文學の第二期花開
(ハ)戰爭	一七九三—一八二一	ナポレオン戰爭
(ニ)平和	一八二一—一八四八	技術及科學、ショーペンハウエル、マイエル等々

百十一年間

(イ)戰爭	一八四八—一八七六	プロシア及獨逸戰爭
(ロ)平和	一八七六—一九〇四	科學及技術の開花期
(ハ)戰爭	一九〇四—一九三二	世界大戰
(ニ)平和	一九三二—一九六〇	平和、內的發達進步（筆者註　西班牙內亂、伊エ戰爭、支那事變、歐洲大戰等々あり

百十一年間

(イ)戰爭	一九六〇—一九八八	戰爭
(ロ)平和	一九八八—二〇一六	平和
(ハ)戰爭	二〇一六—二〇四四	戰爭
(ニ)平和	二〇四四—二〇七二	平和

備考——メウエスの著書初版は一八九六年に刊行されたが、彼の第一次世界大戰は正しく豫言適中の趣きある。然も一九三二年—一九六〇年の昨今を平和期とせるは、聊か脫線した觀がある。

斯くて永久に地球は太陽の周圍を廻り、そして人類はこの地球上に生活して活動する。大戰爭は常に大乾燥期、卽ち地下水の低準になつた時に起り、これに反して技術、科學、商工業及文化の大に開發せらるゝのは、一般地下水が高準に向つた時である。

今その最高と最低の時期を見るに次の如し。

○最高期。西暦一四八七—一五一八年。この時期はミケランゼロ、ラファエル、レオナルド・ダ・ヴィンチ、アルブレヒト・ドューレル、コロンブス、ヴァスコ・ダ・ガマ、ビー・デアヅ、マルチン・ルーテル、亞米利加の發見、文藝復興、宗教改革。

×最低期。一五一八—一五四四年。戰爭期間にて農民の戰爭、チヤーレス五世、フランソア一世、宗教戰爭等々。

○最高期。一五四四—一五七六年。宗教運動の强化擴大。

×最低期。一五七六—一五九八年。オランダの戰爭及紛糾があつた。

○最高期。一五九八—一六二五年。ガリレオ、ケラー、デカルト、ベイコン、シェクスピア、タイコ・デ・ブラーヘ等が出現した。

×最低期。一六二五―一六五四年。三十年戰爭に苦しめられた。

○最高期。一六五四―一六八二年。ブランデンブルグの進歩の時代、ライブニッツ、アイザック・ニュトン、ヘイゲンス、ボーイル、シュタール等出現し、技術、科學、文學の發達した時代であつた。ルイ十四世治下の初期。

×最低期。一六八二―一七一〇年。西班牙王位繼承の大戰。ロシア、スエデン、ポーランド等の北部戰爭、土耳古戰爭等。

○最高期。一七一〇―一七三七年。ヴォールテア、ダビッド・ヒューム、ヲルフ、フリードリッヒ・ウヰルヘルム第一世起り、開花の期であつた。

×最低期。一七三七―一七六五年フリードリッヒ大帝のシレジア戰。

○最高期。一七六五―一七九三年。ゲーテ、シルレル、ヘルデル、ウヰーランド、カント、ラボアシール、ブラック、プリーストリイ、カベンデッシュ、ベルトーレット、ディトン、リヒテル、ユーレル、ラグランヂ、ラプラシ、蒸汽機關の發明があつた。尙ほ前揭の一七九三年以降を高低の時期別により再示すれば、次の如くなるといふのである。

×最低期　一七九三―一八二一年　戰爭

○最高期　一八二一―一八四八年　平和

×最低期　一八四八―一八七六年　戰爭

○最高期　一八七六―一九〇四年　平和

×最低期　一九〇四―一九三二年　戰爭

○最高期　一九三二―一九六〇年　平和

叙上の如くメウエスの引證事項は、主として中央歐洲とフランスに重點を置いたものであることを知らねばならぬ。又現代一九〇四―一九三二年の戰爭期は、彼の世界大戰を包括する大戰勃發の豫言に均しいが、一九三七年來の日支事變、一九四〇年來の歐洲大戰と今や將に來らんとする第二次世界大戰の氣運は、平和期とは見做し難い。筆者は今より十年前（昭和六年六月、西暦一九三一年）「日本帝國眞個の國難は、一九四五年乃至五〇年（昭和二十年―二十五年）を中心とす」、と警告したことがある。そして現下の戰局の發展に最大重要の役割を占め得る米國海軍の完成期は、一九四五年頃と傳へらるゝが、その參戰は或は來年かと推定する向もある。何れにしても昭和二十五年頃までは、國際の平和は容易に期待し難く、大に緊張を要する時なれば、これを平和期とは稱し難い。

一七、一種の占星學的見解

然しメウエスが過去現在及將來に亙り、四千五百年間の史實と豫想とを表示したる努力は洵に多とすべきものであり、その見解は中歐及南歐の一部地域に該當する所あるが、その他の諸國には適用し難しとするも、一種の星占學的見解として參考に資せられる。しかしながら果して天文學的變化が原因ならば、各國共通に同一又は近似の影響を與ふべき筈なるに、その然らざるは未だ妥當適正の解釋とは云ひ難い。試みに我國史に徴するに、戰爭內亂の頻出は源平時代より德川氏初期までを最とし、近代に於ては日淸・日露兩戰と現在の支那事變であるが、彼の區分せる百十一年間の和戰時期別に該當しない。又、支那四千年史に徴するも、歷代の易姓革命を中心として、その直前直後が戰爭多きを常とし、平和期は新陳代謝の易姓革命事變鎭定して天下の治まりたる後、持續する事實を示してゐる。歐洲各國の戰爭も中世期は宗敎の名により、近代は歷史的經濟的事情に因るが多く、彼の唱道にかゝる天文學的變化と一致しない點がある。これを要するに戰爭は各國ともそれ〴〵の特殊事情に基くものにて、各相異と見るが寧ろ妥當であらう。隨つて戰爭始終の豫測や見透しも、國際情勢の

推移、各交戰國の戰鬪力を始め、攻守同盟等の各方面に亙る精確な知識を以て判斷せねばならないので、事は甚だ容易でない。

戰爭の開始と終止とは、各國とも區々にして、そこに一定せる型式がない。古來の各戰爭を綜合して、始終の年月を平均し、その頻出數の歸する所を示すとも、そは單なる抽象に屬するから、それによつて各戰爭を律し得ないと同樣に、第一次世界大戰の結果を見て、今次の東西二大戰を豫測すべきでない。假りに豫測したりとて、一の氣休めに過ぎない。內外萬般の情勢が、旣に相異するからである。戰爭と文化との相互關係の如きも亦、同樣の觀ありて、歷史は文武の兩立並行の法則を敎訓する。これに就て、ソローキンは大略次の如く說明してゐる。

「紀元前第四世紀及五世紀に於けるギリシヤの戰爭は最高度に發展したが、同期間に於けるギリシヤ領土の膨脹・發展・文化及その影響も最高度に達してゐた。紀元前第三世紀及第一世紀のローマ史にも同樣の時代があつた。近代歐洲諸國を見るに、オランダの軍勢力は十七世紀及十六世紀に於て最高度に達し、スペイン亦これと同樣であつた。尙ほ兩國の史上に於て權力强く影響も多く、その文化の頂點に達したのも亦同じ時期であつた。然る

に兩國の勢力は第十九世紀及現代の二十世紀に入りて著しく衰頽し、遂に大强國より二等又は三等國に低落し去つた。彼等が曾て軍國を以て鳴つた時代に占めたる位置は他の强國に取つて代られ、歐洲文化の中心から失脚したのである。ハプスブルグ王朝のオーストリアが第十七、十八及十六世紀に亙りて軍勢力の第一位を占めた時期は、同國の國際的及文化的勢力の頂點に達した時であつたが、十九世紀に入るや軍事及文化の勢力は、既に落ち目になつてゐた。然るに獨逸の歴史はこれと反對に、その文化的・經濟的・政治的及國際的發展は、第十六世紀より現代に亙りて着々歩を進め、特に十八世紀及十九世紀に於けるその權力と影響は、實に重要のものとなつた。これは主として同國の軍勢力が十七世紀より二十世紀にかけて擴張されたためである。フランスは第十七・十八及十九世紀に亙り軍事と同じく文化に於ても偉大なる勢力と影響を持し、過去三百年の同國史は、戰鬪力に於ても最頂點にあつた。ロシアはペーター大帝以來（第十七世紀末期より十八世紀の初期）國際的勢力となりて大國に進み、十七・十八・十九の三世紀は最大の軍勢力を有し、同時に文化の中心地となつた。ポーランドは第十七世紀に於てその軍勢力は頂點に達したが、十八世紀に入りて衰頽するに至つた。」（同氏著社會文化動學參照）

以上は歐洲列强の文化隆盛期は、その軍勢力が頂點に達せると同時期であつたことを例證したので、歴史を知るものゝ皆首肯する所であらう。國家も個人と同じく、幼少成育期、青壯活躍期、老衰退化期の別あるが如く、活躍期にある國家は、宛も青壯年級の如く、心的にも物的にも健全にして元氣旺盛、鬪爭心も强く、滿を持して張り切つた勢力を有するのである。近代歐洲の盛衰史は之を敎へて餘師ある。特に現下の如く國際情勢複雜となり、宗敎傳道も政治の目的に供せられ、凡ゆる宣傳戰によつて敵性を脆弱ならしむる時代に於て、我等は重點を高度國防國家の建設に置き國民の總力を擧げて、これに集中するの緊急なるを認めねばならぬ。

一八、戰爭の機械化とその將來

近代戰が世界戰に進む事由及總動員數と戰死傷損害の割合が、累進的傾向を示すこと等は既述を經たが、更に見逃すべからざる一事は、今や科學戰と呼ばれ、機械化部隊の異常なる發達を示すに至つたことである。即ち高度の上空より飛行機により敵の重要機關を空爆破壞すること、長距離砲により遠方の敵陣地を潰滅すること、潛水艇により海底に潛伏しながら

敵の艦船を擊沈すること等は、一に巧妙なる機械裝置を藉りて、敵の戰鬪力を弱めんとするものなれば、之によりて蒙れる人類の慘狀を直接目擊する如きことがないから、益〻冷靜な理性作用が働き、所謂情味の交渉に乏しい。而も戰爭の直接目的は敵の抵抗力を弱むるにあれば、之が目的の遂行は絶對的にして、戰爭の最高道義である。この最高道義は、近代戰に於ては優秀精鋭の武器によりて達せらるゝこととなつた。故に戰爭が機械化するに比例して理性的作用が發動し、破壞の偉力を發揮すること益〻甚大となるのである。敵性國に對する敵愾心、憎惡心等は戰爭の機械化に比例して向上する趣きあるも、往昔の如き個人に對する殘虐性は滅却し、集團的潰滅を期するに至れるを以て、戰爭の最高道義は益〻强く發揮せられ、萬一にも負け惜みに抵抗する如きことあれば、無慘の運命を招致するに至るのである。

産業に科學を應用することによりて發明發見が重んぜられ、これがため人類の生活狀態は高まり、物的心的の享樂も向上した。通信交通機關の發達が如何に人類の生活を豐富ならしめたかは筆紙に盡し難い。然るに破壞作用の偉大なる戰爭は、より一層科學的に進められ、科學知識の適用によりて、それが無限に增長された。戰爭は恐るべき破壞力であれば、交戰國民は互に多大の苦難を嘗め、敵性國に對する猜疑、憎惡を高むるが、必ずしも國民の倫理標準を低下するものではない。

もし倫理道德を低下する場合ありとすれば、その戰勝に乘じて飽くを知らず、凡ゆる機會を利用して他國に挑戰し、侵略以て領土擴張に專念し、他國を滅亡せしめて、これを搾取するを能とする如き場合である。古代ローマ・近代のオランダ・スペイン・ポルチュガル・フランス及イギリスの如きはその適例と云へる。是等は競爭國又は異民族國家を破壞し、その財物資源を搾取して、一に自國民の繁昌と隆盛とに資し、他民族との共存共榮を顧みざりしものにて、市井に於ける强盜殺人の行爲と何等異なる所がない。叙上近代の歐洲列强は、戰爭によりて富强國となれるが、道德的には疾く低下し去つた國々である。彼等の云ふ强者の權利は、事實强盜殺人の仁義に過ぎない觀がある。就中その極端なるものを英國とする。

近代に於て、暴虐を極め盡した英國を打倒することは、世界人類の道德進步の點より見るも實に緊急の業にて、之がために日獨伊三國が協力することは洵に天の配劑とも云へる。過去三百餘年に亙りて詐僞狡獪及術策の限りを盡して膨脹し、唯我獨尊に慣れたる僞善國なれば、長期に亙りて之を膺懲するの覺悟を要する。素より容易の業でないが、敗色既に現然たれば、油斷なく之が退治に邁進せねばならないのである。（昭和一六・二月）

二、全體主義國家觀の檢討

昭和十三年の帝國議會に於て、論議の中心となれる問題は、電力國家管理案と國家總動員案の二者である。何故政府は摩擦相剋を覺悟の前で、極力その原案を通過せしめんとしたの乎。何故議會は多大の修正を加へ、又は之を阻止せんとしたの乎。又、何故官僚獨善と官吏制度改革論が火花を散らしたの乎。更に何故既成政黨解消や、一國一黨主義が唱道されたの乎。

今次の議政壇上に現はれたる思潮は、特に新奇のものなく、滿洲事變前後よりの繼續、又は繰返しである。しかも世界大戰後擡頭せる全體主義と、自由主義との相剋、資本主義の是正と社會主義思想の横溢を看過し得ない。

一、全體主義とは何か

茲に云ふ全體主義とは Totalitarianism の譯にして、「政府が一切合切の社會關係を統制する政治」の意を含み、さうする國を全體主義の國家 Totalitarian State と云ひ、彼の自由放任主義の國家と相對峙する政治形態を呼ぶ。この語が著作上に使用され始めたのは、恐らく一九三四年以後に屬するが如く、その以前の出版にかゝる辭書及著作類には一寸見當らない。兎に角、ナチスのヒットラーが獨逸首相に任じられた前後と思ふ。この Total の語は總計・總體・全體・全部等の意義にて、之に對する語は「個々」である。而して現在のソヴェート露西亞、ファシスト伊太利及ナチス獨逸の政治形態は、この全體主義國家の標本と云はれてゐる。

「國家は啻に法律上に於ける主權たるのみならず、教育・宗教・藝術の如き社會文化並に資本・勞働等、全國民經濟生活の各部面を管理する職能を有する」との主義に立脚して、之を實施するのが全體主義國家である。「露西亞の共產主義政治も、國家の概念に於ては獨伊の兩國と大差がない。勿論、露國は勞働階級の利益の爲め獨裁制を採り、ファシズムは（公然聲明しないが）資本主義獨裁制を採るの相違あるも、國家概念に於ては相酷似する。兩者は共に反對黨派を芟除し、議會制度を事實上排斥してゐる。」（セリグマン編輯、社會科學百科字典（一九三四年十一月刊）ヂョヴジ・セビン所說參照）

「ファシズムと共産主義との方法には、相類似するものあるも、兩運動の政策上に横はる目的には根本の相違がある。ファシズムは概念を輝かしめる手段として「國民」を强調するに對し、共産主義は新社會の實體として「無産級」を力説する。ファシズムの工作は、各個人と國家との關係を密接にし、「國家以外には何もない、國家以上のものは何もない、國家を離れては更に何もない、總ては國家の内にあり、總ては國家のためにある」と云ふのが、ファシストの全體主義である。マルクス主義者は國家の理想化を、唯だ一時的性質として限定し、レイニンも國家は將來に於て消滅すべしと唱道したが、ボルシェヰスト露西亞と、ナチ獨逸とファシスト伊太利とは、一樣に全體主義として聯想される。尙ほ又ファシズムと共産主義との間には、既定神學に代置するため企畫せる新らしき信條及教理を「教會」の機構形式に要約したる點に於て、共に精神的親和がある」と、（「計畫社會」（一九三七年刊）發行、ヒンドレイ・マッケンヂイ所說參照）

又ウヰリアム・チェンバーレンは、「集産主義（コレクティビズム）」（虛僞のユートピア）と題する新著（一九三七年刊）に於て、ソ聯の共産主義・獨逸のナチズム及伊太利のファシズムを一括し、之を同架して各方面より論議してゐる。是等は自由民主主義國人の所見なるが、現在の全體主義國家の標本として、露・獨・伊の三國を擧示することは、既に學界の常識となつてゐる。

二、全體主義國家の沿革

數多き論議の中に就て、所說明晰且つ精細なるは、社會學者ピトリム・ソローキン博士の見で、新著「社會及文化動學」（一九三七年刊）第三卷第十七章、「分量的に見たる社會關係」の波動は卽ちそれで、大版三十五頁に亙る長篇なれば、左にその史的觀察の一節を紹介するに止める。

絕對的の全體主義は、或集團（國家）及その政府が、所屬員（國民）の總ての行動を統制管理するに反し、絕對的自由放任主義は、集團として何物をも管理せず、その政府の統治機能の缺乏、卽ち無政府狀態を指す。しかも實際の事實として、絕對全體又は絕對放任に出づるが如き社會集團は、未だ曾てなかつた。唯だ或社會が全部統制に近きものあるに對し、他は自由放任、又は無政府型に近いと云ふに過ぎない。同一集團にても、時代によりてその趣きが相違する。或時代に於ける社會關係の網狀組織は、全體主義に傾注して、その政府の管理統制の機能が增加し擴大する。が他の時代には不干涉、自由放任の無政府型に傾注して、

その政府の統制、管理の施設が減退する。この場合、各自は自ら好む所に從つて措置する自由と選擇を行ふことになる。(例せば國家から寺院へ、又寺院から學校へといふ如く、その管理の異なる社會集團の政治に移つて行く)

全體主義型の國家組織は、近代に產出せる新現象でなく、既に遠き過去に於て數多の事例があつた。卽ち古代埃及の國家組織特にトレミイ時代、インカ帝政時代の古代ペルーの國家組織、古代メキシコ、古代支那特に「宋」時代、德川時代の日本、古代希臘のスパルタ、リパラその他、古代羅馬特にデオクレチアン以後、古代ビザンチン等々のそれを始め、古代印度・古代ペルシアより、延ひて歐洲中世期の國家組織中にも、今日の共產主義者・ファシスト・ナチスの體系に均しき全體主義國家があつた。否な太古の原始種族間にも、或者は自由放任型に類し、或者は全體主義型に近き制度があつたのである。

叙上、全體主義國家に於ける政府の統制及管理は、廣汎の範圍に亙り、人民生活の大部分を包括してゐた。政府は生產・分配・消費等、殆ど經濟生活の全部を管理したのみならず、家族及結婚關係より宗敎・敎育・娛樂・軍事・その他の行動及關係を統制したのであるが、その本質は、今日のソヴェート露西亞・ファシスト伊太利・ナチス獨逸の全體主義國家體系と格段相違するものでなかつたのである。

かゝる國家に於ては、總て各自の行動と關係の樣式が規定せられ、それが全人民に對して指定命令されるのである。或人が一定作業に就けば、それが何處で何を、何時に働くか、何處に生活し、何を食ひ、何を着、何を用ひるか、更に又、何を考へ、何を云はんとするか、何を學ぶ乎まで定まる。又、結婚すれば、誰と何歲で何處で擧式するか、兒女は幾人まで產めるといふ如きことまで定まる。畢竟、各個人は全然國家の網狀組織內に織込まれて行動するのである。外見上、彼の自由は殆どなく、彼は政府によりて踊らされる一種の人形であつた。卽ち政府は總て人民を動かす發動機にて、中樞機關となつてゐた。夫等古代の國家組織は、現代の社會主義者、共產主義者その他、全體主義國家の理想を實現したのであつたといへる。

三、近代西歐に於ける消長

現代の國家と雖も、殆ど大部分は各時代によりて自由放任と全體主義との間に、浮沈循環した歷史を有してゐる。同一の國家が間斷なく、同一の方向へ一本調子で躍進するが如き例

は稀有であつて、唯だ波動の長短を示すに過ぎない。中世期封建制度の破壞と共に、「民族國家」の生ずる過程として、第十七・八世紀には「警察國家（ポリツアイスタート）」なる專制政治が行はれた。ルイ十四世の佛國・フレデリック大王の普魯西・マリア・テレサの墺地利等々は、それであつた。それらは全體主義にて、一般人民の個々の經濟・宗教・道德・教育・休養等々、諸般の分野に亙りて、統制管理する權能を揮つた時代である。

第十八世紀末期より反動の氣運起り、爾來漸次自由放任の傾向を來し、自由主義・個人主義・契約主義等に傾注するに至つた。そして第十九世紀は、その最頂點の全盛期であつたのである。こゝに、言論・信教・出版・集會・教育・婚姻等々の自由を始め、經濟的行動の自由・交通の自由等が要求された。即ち第十九世紀前半期の歐洲國民は、擧げて各自の幸福と自由の要求に沒頭し、自由選擇・自由契約の實現と共に、政府の權限・統制及干涉の減縮を圖り、遂に民主々義・自治自由主義・立憲政治・契約關係峻烈なる個人主義・私有財產・私營事業・私的創設・機會均等・自由結社等の全盛を招來し、自由貿易・自治生活及自由哲學が流行したのである。

然るに第十九世紀後半期より、更に之に對する反動勃興し、國家の管理統制を漸次要求する氣運を生じた。自由主義國家の間にも先づ勞働・產業關係は法律を以て規定することゝなり、兒童・少年及婦人の勞働保護・最低賃銀の設定・疾病の社會保險・養老年金等々を始め商業上の規定・雇傭關係の規定・兵役の義務・家族關係即ち婚姻・出生・離婚等より公衆の健康・療養・衞生施設等々に至るまで、政府の統制管理が擴大さるゝに至つたのである。

現代特に、第一次世界大戰後、過去二十餘年間の情勢は、全體主義傾向の旺盛を告げ、就中露・伊・獨の三國は最高度の統制原則を確立して、世界の視聽を集中せしめた。否な英米とても程度の問題に止まり、全體主義の傾向は徐々として漸進を示してゐる。歐米諸國を擧げて一架同列を容さぬが、問題は程度の厚薄である。全體主義の興隆はその好むと好まざるとに拘らず、我等はその大勢下に棲息してゐる。今や政府は政治の中樞機關、發動機となりて一切を統制管理せんとする時代となり、議會制度は英米佛の三國を外にすれば全く有名無實となつた觀がある。

四、近代日本に於ける消長

顧つて我が日本の事態を顧みるに、足利の戰國時代は、比較的自由競爭の旺盛なる時期な

りしが、分權又分權の亂脈を極め、織豐氏によりて漸くその統一を見た。繼承せる德川時代の政治は「警察國家」に類し、全體主義の徹底を示すものがあつた。

明治維新の元年は、西曆一八六八年に該當し、即ち第十九世紀の後半期である。廣く知識を世界に求め、海外の文物制度を輸入するに當り、主として英・米・佛に範を取つたが、それ等は十八世紀後半期より十九世紀前半期中に產出せる自由主義・個人主義・功利主義・代議政治・自由貿易等々の思想にて、しかも最頂點に達せる時代であつたから、明治時代の我が文物制度は自らその色彩を帶びてゐた。幾多官民の施設に成る教育機關は、一に英語を主としたるを以て、自ら英米の思潮が、當時の知識階級を風靡したのであつた。學說と云へばスペンサー、ミル、ベンザム、政治と云へばグラッドストン、ヂスレイリを稱し、その感化影響たる、洵に深甚なるものがあつた。議會制度の如きも英國流を以て師表とし、獨逸流は未成品として輕視された。板垣退助が岐阜に於て刺客に襲擊された際、「板垣死すとも自由は死せず」と叫んだ警語は、當時の民間志士を興奮せしめたものであつた。この英米佛一流の自由主義に對し、幾分牽制の役割を演じたるは、獨逸學系に據る極少數の學者と官僚の一部に過ぎなかつたのである。

憲法發布以來玆に五十年、昭和十三年二月十一日の紀元節を期して記念祭を開催する運に至つた。この間政府と議會・官僚と政黨との爭議は幾變遷を經て、幾消長を見た。世界大戰後はソヴェート露西亞、共產主義侵入し、一時危殆を叫ばれたるが、滿洲事變發生前後より形勢一變し、赤化思想減退と同時に從來の英・米・佛の思潮も漸減の一方を辿り、伊・獨のファショ思潮これに代りて益々旺盛となり、今や全體主義の橫溢を見るに至つた。即ち自由主義は、明治より大正時代にかけて隆盛を極め、昭和時代は全體主義の興隆を示したのである。彼の五・一五事件、二・二六事件の思想的背景、幾多產業統制法を始め、今次議會に提出された電力國家管理法案・國家總動員法案・厚生省の新設・職業紹介國營法案の可決・斷種法の計畫、產兒制限運動の制裁等々は、能く現下の趨勢を示して餘りある。

五、全體主義の興隆事情

東西を問はず、古代の國家は規模小にして、幾多種族の離合背反常なかりしと、傳統と地域の關係ありて、自ら人口少數の集團なれば、治者と被治者との關係は比較的親近であり、隨つて萬事に干涉し、之を管理し、統制し易き事情があつた。又宗教關係より政教一致、所

謂神政府の趣きを示し、「タブー」の習俗あり、種族階級感の嚴たるあり、故に治者の權力强大にして神聖視されてゐた。一言すれば、當時は集團の維持保存上、統制を要するに必至の事情が、全體主義國家を多からしめたのであつた。

歐洲中世期の政治は封建制なれば、政治的競爭は平靜なるも、宗教の勢力强くして、羅馬法王は最高權威を有した。産業は一定地域を限定せる農業を本位とし、「暗黑時代」と稱せられし如き沈睡期であつた。卽ち未だ民族國家發生の運に至らず、小集團に分裂した一種の鎖國時代なれば、都市人口の如きも少數に止まり、比較的平和が保たれてゐたのである。鎖國時代の常として自ら人口・經濟・社會の政策は消極を旨とし、質素勤儉縮小の消極的統制方針を取つた。故に生産・分配・消費より職業・企業等は自然之を抑止し統制して、現狀の維持調整に沒頭した。卽ち當時は消極的に統制するが必至の勢であつたのである。德川時代の日本もそれで、日常衣食住の細末まで規定されてゐた。

然るに近代歐洲は先づ文藝復興に始まり、宗教改革・政治革命・産業革命等を經て消極的なる中世主義（ノスタルジズム）を破壞打倒するに熱狂した。近代主義（モダーニズム）とは卽ちそれで、一に舊弊を打破し、以て庶政の革新を主としたのである。斯くて從來の束縛・干涉・管理・慣例・規定の峻嚴なる桎梏より脫して、自己實現を期せんとする所より、所謂自由主義・個人主義が發達した。幾多の志士がこの自由を獲得するために、血を流し骨を碎ける史實は、決して輕視するを許さぬ。しかも時を經るに從ひ、自由主義も亦幾多の弊害を生じ、社會の正義を亂すものあるに至つた。

世界大戰後に於て露伊獨の三國が全體主義國家に進展したる事情は、各々その趣きを異にするが、(一)第十九世紀に於ける自由競爭の結果、資本主義の發達を來せしが、之が反動として社會主義勃興し、爲に國內は資本、勞働の兩階級、卽ち有産者と無産者との鬪爭相剋を現じたれば、之を矯正するの必要に迫られたこと。(二)大戰のため一般に歐洲の國力は疲弊したるが、しかも持てる國は益〻持ち、持たぬ國はその持てる物をも奪はるゝ如き、自由民主國側の橫暴を憤り、國內一致協力してその國運挽回を圖る愛國運動の必要を生じた。要は自由主義より來れる階級競爭の是正・社會主義の實現・國際經濟競爭の受難・軍備擴張競爭等が主因を爲してゐる。

先づ露國は、突飛なる共産主義を實現し、之を宗教化して世界革命を企圖し、世界赤化の運動を爲すに當り極端の全體主義國家組織を造つた。その新憲法は經濟生活は勿論、家族關

係の結婚・離婚・出産等の社會關係を規定してゐる。又伊・獨兩國は大戰の結果困憊を極め、更に露國より赤化の脅威を受けた。玆にムッソリーニ、ヒットラーの二英雄起りて國家の恢復を圖り、積極的全體主義の國家を現じて、今日に至つたのである。我が日本が獨伊兩國と防共協定を結び、近年來産業統制・思想統制が叫ばれ、現に電力國家管理・國家總動員を云々するのも、その趣旨は同義に出づると見ねばならぬ。

六、全體及自由の長短

絶對の全體主義國家は、事實上存在稀有なるが、先づ之に近きものは、國家資本主義のソヴェート露西亞一國のみである。こゝには私有財産なく、國民の生活は刑務所に於ける囚徒と酷似する。獨伊兩國は獨占資本主義にて勞働者の自由なしと稱せらるゝも、露國のそれとは同視するを許さぬ。從來、獨伊の國情は自由主義國人のため、惡宣傳せられたるものが多いことを注意せねばならぬ。

絶對の全體主義の存在が稀有なるが如く、絶對の自由放任・個人主義の國家も亦存在しない。蓋し絶對の自由放任は、無政府主義に外ならない。純然たる個人主義者（スチルネル及ニイチェ流の）自由人道主義者、及自由民主々義者の奉ずる「人民のために、人民によつて造られた、人民の政府」も現實には存在してゐない。

惟ふに全體主義國家の盛況とは、國家の權力を高度に發揮し政治・經濟・社會及文化の全部面に政府の統制を增大する社會化强調の傾向を指し、之に反して自由主義國家の盛況とは個性を尊重し、自治を奬勵し、成るべく政府の統制力を制限する個人化强調の傾向を云ふので、唯だ統制の高低、厚薄の程度問題に止まる。その何れか一方の極端に偏傾するは、既に病的であり、兩者の協調を保持する處に健全性がある。露國が唯物的機械的社會觀に墮し、全然個人を無視して網狀組織の一細胞となし、神の代りに機械を崇拜する如き極端の物質主義は、人間本來の性質と相容れないものである。

全體主義國家の長所は、非常時、特に戰時體制下に國民精神の總動員を行ひ、愛國心を鼓舞し、歩武堂々擧國一丸とならしむるを以て、現下の如き軍擴時代、國際競爭熾烈なる時代に於ては妥當の方針として歡迎せらるゝものがある。その短所は官僚獨善に陷り、官治統制を擴大する結果、民營事業を疲弊せしめ、國民の獨創性・發明心・企業心・冒險心・勇猛心等を挫折し、唯だ上部の命令によりてのみ動くに至る。かく受動的態度に出づれば、人間は

既に一種の傀儡化し、沈默、憂鬱、陰慘の雰圍氣を以て充たされ、獨り得意なるは官公吏階級、即ち官僚の一部者に止まる。凡そ世に國民個々の機能發揮を妨害し阻止する統制ほど甚しき惡政はない。露西亞はその好適例である。

之に反して自由個人主義國家の長所は、經濟及社會關係はそれ〴〵の專門團體に統制せしめ、政府は直接之に與からず、個人の自由選擇に委する點にある。例せば、實業は實業組合に、宗教は寺院に自治統制せしめる。佛國には文學、美術、音樂等の各方面に權威ある獨立自治の集團あり、褒貶賞罰もこの自治團體に委し、警察力を以て文化事業を左右する如きことがない。全體主義國家の官僚が一切合切、特に文化の總統制に熱狂するが如きことなきためこゝに個性の發展が見られる。文學・藝術・發明・獨創等は本來個人的のものである。

而もその短所は、統一聯絡なき放縱に流れ、個人主義は利己主義に墮して、社會生活上缺くべからざる共同一致・相互扶助・犧牲・義俠等の公共心を減じ、道德を低下せしむるものがある。資本主義制は自由競爭の產物なるが、之によりて勞働者を賃銀奴隸化せしめ、貧富の懸隔を擴大して、遂に社會主義・共產主義を絕叫せしむるに至つた。

聊か卑近の嫌ひはあるが、自由主義の英國に於て從來、性病の如き談は、紳士淑女が口頭に上すを恥ぢ、各自の愼獨心に訴へ、之を放任する習ひであつた。ために花柳病統計の如きは公示されぬが、事實その害毒は甚しきものがある。之に反して全體主義國は、公然その豫防法を規定し、屢々之が撲滅を絕叫するが、未だその減退せる事實を聞かぬ。又、英國に於て假りに醜態者ありとすれば、不淨場への出入と同視して、之を見向かぬことを禮とする。之に反して全體主義國の人々は窃かに之を熟視したる後、規定を楯に恫喝脅迫するが如きもの少なからぬ。これは抑々何を示唆するか。

畢竟、この兩主義は各長短ありて、絕對的のものでない。全體主義の短所は、即ち自由主義の長所とする所であり、自由主義の短所は、即ち全體主義の長所とする所である。されば こそ絕對全體と絕對自由放任は事實として存しない。もし極端に社會化すれば、必ず個人化の反動生じ、之に反して極端に個人化すれば、また必ず社會化の反動生ずることは、人性必至の勢ひにて、同一國家の歷史に於ても、長き時代にその盛衰消長の波動を示す所以こゝにある。總て制度よりも人間の問題だ。我等は兩者の長所を採りて短所を棄て、以て之が協調を圖らねばならぬ。

七、反動と協調の波動

我邦は曾て英米佛の自由主義に風靡され、之に隨喜し、之に沒頭したる長き經驗を有するが、近來漸くその個人化勢力の短所を知りて露獨伊の渇仰に轉向し、全體主義の全盛を夢想して社會化勢力の長所のみを讃美する傾向が多い。而も制度は死物にして、之を活用するは人間であり、問題は人間の頭腦如何である。

先づ以て心得べきは、各國共それ〴〵特殊事情あり、獨自の歴史あり固有の文化あり、特異の民族性あるものなれば、世界の大勢に乘ずると同時に、自主を重ぜねばならぬことである。帝國議會に於ける論議を見るに、政府側には獨伊の全體主義の口吻多く、議員側には英米自由主義の傳統殘存してゐる。即ち前者は社會主義の色彩濃く、後者は自由主義の趣きが多い。議會の性質と政黨の立場上、かゝる光景を呈するのであらうが、第三者として公平に之を觀察すれば、政黨は今や政府に引ずられ行く事態にあり、最早毒にも藥にもならぬ存在に見える。獨伊兩國が議會を閉鎖したのは、政府の政策遂行上、妨害物と認めたからであつた。今日一國一黨・政黨解消等の聲ある、蓋し偶然でない。

しかも現下の情勢は、皇國將來性の洋々たる多望を示唆してゐる。政府が全體主義を强調するに對して、政黨が自由主義を以て應ずる所あるは、兩者の長所を助成せしむるに役立つてゐる。獨伊兩國の如く、議會を閉鎖して獨裁制に出づれば、過度の統制が徹底せらるゝ虞がある。議會は官僚獨善の謬見を排斥し、不公平を極むる官吏制度を改革し、官治統制の害毒を指摘すると同時に、一方自治統制、民營事業の長所を閑却してゐない。能く論議を重ねて互に協調する所あらば、その短所を避けられる。皇國は實に世界各國の長所美點を攝取し、之を自由選擇し得る現狀にある。敢て民主々義國の所謂議會政治、政黨政治によりて左右せらるゝ要もなく、又議會の存在を忌避して之を閉鎖し、獨裁制を實現する如き必要もない。光輝ある　天皇政治國として、日本獨自の運用を爲し得る幸運にある。曾て迷信措かざりし自由主義の偶像も、今や之を排斥して惜まれざるが如く、昨今流行の最中にある全體主義の神話も亦、反動を招くの時機來らずとは、誰か之を斷言し得るぞ。見よ、歴史は繰返す。

（昭和一三・二・七）

三、國防國家の倫理性

國防國家とは、國際競爭の激甚を極むる今日の情勢に於て、先づ國防の充實を重點とし、國民の總力を動員してこれが完遂を期し、以て國民生活の安定を謀る、卽ち國防不備の國家は敗戰衰頽の虞あるから、國民の全力を傾けて國防充實の國家を建設することと解する。國防あつて國民の生活が安定されると同時に、生活の安定あつて國防も亦完遂されるものであるが、時と場合によりて、ナチス獨逸の企圖せる如く、國民の生活を最低限度に切り下げ、その餘裕を國防に傾注する要がある。現下の我が國情は之を要求してゐることは、事變以來の幾多政策に徵して推知される。

一、思想體系の三本位

先づ現存する政治・經濟・法理及倫理等の思想體系を見るに、左の三本位に區別される。

(一)個人本位は自由・放任・個人・民主及無政府等の主義を始め、享樂・利己及功利主義

等々を含む。これらは多少名稱を異にするも、古今東西を通じて最も廣く行はれてゐる。近代に入り、この種の唱道が、英・佛の學界に盛行するに至つたのは、西歐の中世期に於ける基督敎の感化影響を要因とする。その贖罪救濟及靈魂不滅說等は、神と個人との關係に由來し、該敎徒の奉ずる、「神の前に於て萬民平等なり」との敎理は、個性の人格を認め之を向上するに與つて力あつた。次に近代初期以來勃興せる專制君主が、神權說を奉じて世襲說を主張し、秕政以て人民を壓抑搾取すること甚しきより、英佛兩國民は先づ政治革命を起し、人民各自の自由平等博愛を標榜して帝王を處刑し、特權階級たる王族貴族大地主等を退け、更に之を經濟及社會の各方面に實現する氣運を生じたのである。故に近代の英佛及米國の思想を憧憬讃美する限り、個人本位の思想系統たるを免れない。

(二)國家本位の思想は、西歐に於ては獨逸を以て最とする。英佛には君主と人民との係爭多く、その憲法史は王權の縮小と民權の擴張を示し、究極は革命手段に訴ふるを常とした。故に議會政治の性格は徹底民主々義である。之に反して、獨逸は古來民族國家の風を存し、近代獨逸の學說も國家至上主義の思潮に富み、ヘーゲル、トライチケ、ブルンチエールその他の影響多きを致してゐる。米國の地理學者ハンチントンは「獨逸の强いのは、氣候に惠ま

れたことがその一要因である」と云つてゐるが、地理的環境が該民族の統一に資し、西ローマに侵入せる當時より組織統制の性格が現はれてゐた。彼等の國家觀は之を有機體視し、或は道德的性格を基礎づけた。英佛學者の如く、國家と個人とを相對立せしめ、國家を以て個人生活のための道具視する底の思想を起さしめなかつた。ビスマーク宰相の當時既に社會主義にも「國家」の名を冠し、現在のナチスといふ略字も周知の如く、「ナチョナル・ゾチアリステッセ」である、その今日あるは蓋し偶然でない。

(三)世界本位は、國際・世界・宇宙及四海同胞等の主義によつて示されてゐる。又、國際法あり、教育・統計・勞働等の國際會議あり、「國際社會」及「世界國家」等の名あるも、現實は民族國家の割據競爭時代に屬する。

二、國家本位の傾向

惟ふに、個人本位は人間生來の本能に基き、容易に拔き難き觀を呈し、特に經濟的行爲は個人を根本義として解說されるが、それは單に生物學的に見るも誤つてゐる。我等の成育される家族といふ單位既に一の集團であり、市町村の集團は共同社會である。されば、社會と

個人との關係に前後を附するのは、恰も鷄と卵との前後を論ずるに均しい。我れ社會の中にあり、社會我れの中にある。社會を離れて我れなく、我れを離れて社會ないといふ「全」と「個」の二者一體が基礎觀念であらねばならぬ。現實の人間は總て社會的集團生活者にて、集團を離れた孤獨の個性は思議し得ない。もしそれ世界本位に至つては、突飛的な夢想幻影に屬し、今日の人類は、未だ之を基準として生活する域に達してゐないのである。

國家本位とは、その人口構成の單民族たると將た複民族たるとを問はず、一政治形態・一法律制度下に同一の國民として統治せらるゝ集團を基準とする。この集團の成長發達を計り、これが繁榮を期すことは當に自然の順序である。玆に民族としての血統あり、そこに家庭を造り教育を受け生業を營みて一生を送る。そこに君恩・師恩・親恩・國恩あり、自ら愛鄕心愛國心の發するは、本能なると同時に倫理的であつて、之を本位とするの適正なることは多辯を俟たない。しかしながら現實に思想し感情し意志する作用は各自個人であるから、國家本位なりとて個人を無視し、又は世界を除外すべきでない。個人と國家と世界は三位であつて、之を一體とするのが最高の理想である。

國家本位時代の倫理として要求せらるゝ所は、國民の一致團結・協力共同・所謂一億一心

一體たることである。國家は一の有機的集團にて、全體主義とは字義上、一統制體を意味する。この故に、各個の自由放埒、我儘勝手を抑止し、社會公共の利益となり、全體の幸福となる行動を奬勵する。一國の政治經濟は廣汎に渉るが、今日着手されつゝある大政翼賛及經濟新體制建設の主要目的も、國防國家を建設するにあたりて、最も效果的な政策と制度を創設して之を達せんとするのである。

各政黨政派は既に解消し去つて、往日の黨利黨益を謀り、或は政權爭奪を期せる英米佛流の議會政治は姿を隱し、大政翼賛の名に於て官民上下一致相協力する事となり、更に教育・宗教・出版より衣食住の日常生活にまで、幾多の新體制が計畫され、實施されんとしつゝある。

就中經濟新體制は國民多數の生活に直接影響あり、且つ廣汎に亘るがため論議も複雜多岐を極め、當局の指導原理は抽象的原則の一端を議する現狀なるがその趨勢は事變以來の經濟政策に徵して察知するに足ると思ふ。即ち自由民主的資本主義の横暴を是正する、暴利投機獨占の金權思想を抑制する。經濟と道德の二本建は、經濟道德化の强調によりて之を一致せしめる。私利私慾の終始一貫を排して公利公益を優先とする。公衆の損害を招く如き賣惜み買溜め及闇取引を始め、利己主義の惡德者は之を嚴罰に處する等々は、疾くより唱道されてゐる。しかも各産業別の統制整理により生ずる轉業及失業者の措置・個人企業の强制的組合加入・又は營業免許制實施に伴ふ處理・その他會社の配當・一般利潤の制限等、その聲のみにても、當業者を刺戟するに餘りあるが、これ皆從來の自由主義・個人主義・資本主義の經濟思想と制度慣習を再編成して、全體主義・國防國家本位主義に準據せしめんとする過渡期の現象に他ならぬ。明治維新に當り、士族級の善後策を講じたる場合とは比較し難い複雜性を有するのである。

國防國家建設上、國家本位主義が合理化され、合法化されることは正當なるが、その施設極端に走る所あれば、自ら弊害を生ずる虞がある。蓋し完全無缺は一の理想であつて、一方に偏傾すること甚しきに至れば、餘弊あるを免れない。國家本位觀には往々國家と政府とが混同せられ、官僚法治の盛行を敢てして、吏群の激增を招き、取締・管理・規定の頻出する結果、煩瑣極まりなき警察國家に墮し易い。物價公定の一事に見るも、既に小魚・蔬菜・果實・球根の一片一個に至るまで公定される。秤量制の實施は歡迎されるが、商人は量目を誤魔化すを能とすれば、警察は之を取締る必要上自ら吏員數の增加を免れぬ。一事は萬事、苛

細煩瑣の法治も結局、商人各自の心構へが改まらざる限り、善政の實現は期せられない。

三、國家・個人・世界の三位一體

こゝに於いて、各個人の人格尊重・自肅・自治の態度が重んぜられ、自由裁量が要求される。取締法の苛細が、免れて恥なき徒を出すは、古今を通じて變らない。かく人民の個性を輕視し、官尊民卑となる結果は、社會協調の敗退を招き、個人の創意・發明・奮起の精神を弱める。羽振よく跋扈せんとする者は、官府の中心に磐據して官吏萬能・官僚獨善を現じ、政府を國家視する迷想に陷りて、救ふべからざるに至る。

世界本位の夢想は據るに足らないが、國民と國民間の交誼は破壞を許さぬ。その適例は目下の支那事變に示されてゐる。皇軍は英米の傀儡たる蔣政權の絶滅を期するが、決して支那國民を敵視しないのみならず、現に宣撫班の活躍により、不幸可憐の民衆に對して博愛的行動を敢てしつゝある。當にこれ八紘一宇の精神發揮である。我邦に對する英米兩國政府の態度は目に餘るものありて憎惡の念禁じ得ないとするも、彼等國民の間には尙ほ理解あり、親善の情誼を持するもの少しとせぬ。我が國民は國際情誼を重んずる點に於て、他國民に優る

も決して劣らざる誇りを有するが、將來は益々この八紘一宇の大志を發揮せねばならぬ。

要之、國家本位より動もすれば生じ易き弊は、右の個人本位觀と左の世界本位觀との長所を採用して補足し、融和することによりて之を除却される。惟ふに、八紘一宇の精神は、國家・個人・世界の三位を一體として、始めて達せらるゝものである。

四、國防國家本位の强調

國防國家時代は求心的にて「總力」を重點とし、その間、組織・統制・秩序・堅忍持久・勇猛果敢・武士氣質・精神一到主義等、所謂ストイック流の道德が尊ばれる。一から十まで指導原理に準據して規矩される。倫理思想は、原理原則に據る體系が盛を致すに至る。西歐に於ては、現今の獨逸之を代表してゐる。

自由個人本位の時代は遠心的にて、各自個々の享樂幸福を重點とする。その崇拜の的は黃金といふ神にて金權萬能が建前であるから、人間は擧げて金儲けに熱狂して他を顧みない。日常一切の行動は、利潤獲得の目的に供され、貴賤尊卑上下高低の別は一に金の持つ高と取り高によりて定まり、名譽と快樂と幸福とは總て金を以て左右され又測定される。そこの指

導者は富豪といふ英雄であつて、彼等は各社會の上級を占め、一切の事物を金權によつて統制し、眞善美も金に代へ、場合によつて國すら金に代へる。富豪の數は少なきも、金權財閥の勢力は絶對にして强盛である。即ち人間萬事金の世の中、地獄の沙汰も金次第と見る。その倫理說は享樂・幸福・功利・唯物の感覺を主とする體系にて、所謂エピキュリアン流である。現今英米佛の金權政治國之を代表し、就中米國を以て最とする。これは畢竟、猶太人氣質の感化影響與つて多きにゐるのである。

世界本位時代は單に一部の宗教家、迷想家並に猶太系社會學者の所說に屬するものにて、世界が一民族一國家に統治せられた後の夢である。現在の民族國家が各その所を得、各國の共存共榮を期待するものとは同調を保ち難い。

五、改革運動の原則

國家本位觀が、極端に走りて歪曲せられ、種々の弊を生ずれば、自由個人の反動が擡頭する。之に反して自由個人本位が極端に達して弊害を生ずれば、國家本位の反動が必ず發生して、自然その倫理の主義・思想體系もまた自ら變動する。眞理はその中庸を得た所に宿る。

然し總て偏傾には反動の情熱を伴ふものにて、動力ともなり感激を惹くが、中庸は調和點であつて、均衡平定の態なれば直接の動力とはなり得ない、謂はゞ一の無風帶である。近來新體制建設運動が社會を動搖せしめつゝあるのは、從來永く信賴し來れる個人本位の基準が危くなり、最早時勢に添はないから、一切國家本位を以て代置せんとする氣運の勃興したためである。もし之を極度まで達せしむる底の熱誠を缺かば、恐らく中途半端に挫折して社會は混亂に陷らう。之を徹底するだけの情熱と努力と運動とを繼續して、始めて均衡を得るに至るものである。これが、古今東西に共通する改革運動の原則である。（昭和一五・一一）

四、新東亞建設の認識及倫理

一、帝國政府の聲明

皇軍の連戰連勝、遂に南支の廣東占據、並中心地武漢三鎭の陷落を契機として、帝國政府は明治節（昭和十三年十一月三日）の佳辰を期し、將來の方針と決意とを中外に聲明する所あつた。中に云く、「帝國の冀求する所は、東亞永遠の安定を確保すべき新秩序の建設に在り、今次征戰究極の目的亦此に存す、この新秩序の建設は日滿支三國相携へ政治・經濟・文化等各般に亘り、互助連環の關係を樹立するを以て根幹とし東亞に於ける國際正義の確立・共同防共の達成・新文化の創造・經濟結合の實現を期するにあり、是れ實に東亞を安定し、世界の進運に寄與する所以なり」と。この聲明に繼いで、近衞首相の明透なる敷衍放送が行はれた。云く「過去の諸原則が事實上、不均衡なる現狀維持を鐵則化し、固定化する所にあつたことは、否むべくもありません、聯盟規約の如き國際條約が、その權威を失墜したことは、實にこの不合理にその根本原因があるのであります」と。更に「日本の消長發展が常に國體に對する自覺と相並行することは、日本歷史が如實に證明するところであります」と云ひ、最後に「新らしき東亞の建設を擔當すべき日本は、その國民生活の全分野において、新らしき創造の時代にあります、その意味に於て眞に戰ひは今はじまつたのであります」と述べられた。

引續き陸・海相は勝つて兜の緒を締めよ、戰ひは之からだと警告し、藏相亦經濟上の覺悟を國民に要望する所あり、聲明の意義は既に盡され、肇國の精神を解說して些の遺憾なきを信ずるが、今、一二の蛇足を附して、その認識を一層深めたいと思ふ。

二、新秩序の建設

東亞永遠の安定を確保すべき新秩序の建設は、帝國の冀求する所にして、今次征戰の究極の目的も亦此に存すとは、千鈞の重きをなす焦點である。由來東亞の不安擾亂頻繁たるは白禍、卽ち和・葡・英・佛・露等の西力東漸して、印度及南洋諸島を始め悉く之を攻略し、歐洲人の世界征服を實現したるに基因する。歐洲の近代史は世界征服史に他ならぬ。見よ、英

國の支那に對する征服慾は、不義非道を極めたる阿片戰爭之を實證し、露國の極東漸侵・滿蒙攻略は日露戰役を惹起せしめ、佛國亦現に印度支那を所領してゐる。凡そ東亞の天地に不安の種子を播き擾亂を惹起したる主動力は歐洲諸國である。更に蔣政權をして帝國に反抗せしめ、今次の事變を惹起せしむるに至れるも亦、露國コミンテルンの支那赤化運動、英佛兩國の遠謀野心、米國宣教師及英米系猶太財閥の反日宣傳策動等、與つて力ある。蔣政權は是等の傀儡にて畢竟背後の實勢力こそ眞個の敵なるが、先決問題は、その傀儡となつて躍る蔣政權の潰滅なれば、過去一年有半に亘りその掃蕩に從つたが、今や漸く長期建設時代に入つたのである。

その新秩序の建設は如何にして成る乎、日滿支三國相提携して政治・經濟・文化等各般に亘り、互助連環の關係樹立を根幹とする。即ち日滿兩國と新支那政權とが相協力援助して、密接なる連環關係を樹つる。玆にこの三國は不可分の兄弟國、攻守同盟國となり、東亞のブロックを造るのである。その範圍廣汎に亘り、眞に長期建設に屬する大業である。

三、國際正義の確立

東亞の天地は西力東漸以來、彼等の植民地化し、その跋扈蹂躙に委せられ、不平等不公正の事態に置かれてゐた。帝國は明治時代に於て舊幕の條約を改正し、治外法權を撤廢して對等の面目を樹てたるが、帝國を除けば他は依然被征服にあらざれば、不平等を繼續した。帝國に對しても歐米諸國は相共同してその進出を妨害し、その發達を阻止する政策を施し、以て今日に至つてゐる。近衛首相が「過去の諸原則が事實上、不均衡なる現狀の維持を鐵則化し、固定化する所にあつた」と云へるは即ちそれである。米國が今次帝國の聲明に對し、新情勢と全然相容れざる、十六年以前の九國條約を持出し、新聞紙は英米佛の共同戰を煽り、更に民主々義諸國の對日經濟ボイコットを慫慂し、政府當局亦民主々義國家の引入れに暗躍する現狀にある。帝國は何等列强との協力を排斥せず、第三國の正當なる權益を尊重する意志を表明するに拘らず、この種の言動に出づるは遺憾である。由來、米國の排日は日露戰役後、三十餘年に亘る傳統に屬し、既に日本の移民を絶對に禁止し、滿洲事變當時は國務卿スチムソンの教理あり、帝國の不利を策するもの頻繁として多きは、周知の事實である。

英佛蘇の三國は現に、今事變に於ける蔣政權援助の主動にて、直接間接この事變を誘導したる元兇であり、國內は援支排日の言論を以て充され、間斷なく帝國の不利を策して來た。

爲めに我邦にも、漸次彼等と親交する氣分思想の減退せるは、餘儀なき勢である。東亞には由來、國際正義行はれず、却て歐米諸國を過重し、その共同壓力に屈從する態度を示して來た。東亞を救ふの道は、先づ彼等の搾取より解放せられ、彼等の壓迫より脱出して、對等の位地に立つにある。

第一次世界大戰開始當時、所謂歐米民主々義國家は、「正義の戰爭」を絶叫して、偏へに獨逸を責め、凡ゆる手段に訴へて宣傳し、遂に世界的聯合軍を組織して相對峙するに至つたのは、未だその事實の眞相を究めず、猶太化せる彼等英米佛の惡宣傳に魅惑されたためであつた。當時英米佛に於ける關係出版物を再檢討すれば、思ひ半ばに過ぐるであらう。我邦にては英語を第二國語の如く見做して、少年時代より之を學び、主として英米の文獻を輸入するを以て之を過重する弊あり、遂にその認識を誤つたのである。而も今次の支那事變に於て、英米佛蘇の態度とその眞相が、一般國民に諒知せらるゝに至つたことは、實に意外の利益であつた。彼等は平和と人道と正義とを口にして之を擁護すと爲し、民主々義國家の優越を誇るが、事實は全然之に反する。他民族に對する彼等の態度は常に非人道、不正義を敢てし、實に恐るべき僞善者であり、擬裝者である。しかも東亞に國際正義の確立なかりしは、畢竟國勢の劣弱に基くものなれば、新東亞は政治・經濟・文化等に於て、彼等と相對峙し得る實力を具備する以外に方法はない。見よ獨伊兩國の更生活躍に對する、民主々義諸國の態度は抑々何を示唆すとなす乎。

英國が實利以外眼中にないことは、古來の民族性であり、傳統でもある。伊太利對エチオピア乃至西班牙問題に就て經濟封鎖を策して、その行はれざる最後は妥協を示した。チェッコ問題に就ては、何等收穫なきを見透して偏に戰ひを避けた。支那事變に於ては、一方飽くまで蔣政權を援助しながら、皇軍の連戰連勝に接するや岐路に立ち、漸く二筋道を辿るの態度を示して來た。佛國は歐洲列强中、地圖面より眞先きに抹殺さるべき運命を有しながら、今尙ほ執拗に蔣政權を援助して、その將來を見透し得ざるは、全く時勢後れの愚直といふ他なく、世界一の誇大妄想に耽る米國も今更の如く九國條約を楯に抗議するに至つては、その外交手腕の如き、英國の足許にも及ばぬ觀がある。

四、共同防共の達成

帝國は共産主義の絶滅を期するが爲め獨逸及伊太利と防共協定を締結した。去十一月六日

（昭和十三年）は伊國と協定せる一周年に該當し、記念祝賀式が盛大に擧行された。今次の支那事變に際しては、獨伊兩國は直接間接厚誼を寄せて、帝國の爲め有利を謀り、且つ交互使節を派遣し、益々親誼を厚ふし、眞に盟邦の實を現じてゐる。

コミンテルンが支那赤化に狂奔して玆に年あり、支那事變以來、蘇聯は蔣政權援助に沒頭し、飛行機その他の武器を輸入するのみならず、將兵を派遣して支那軍を指揮する等、純然たる敵對行爲に出でゝゐる。而も帝國は蔣政權の潰滅を先決問題とし、蘇聯に對しては今尙ほ隱忍自重する所あるが、支那をして共產化より救はんとする熱望を中止するものでない。

防共上、獨伊兩國と協定せる如く、更に滿支兩國と共同して之が達成を期することが新東亞建設の一要諦である。蔣政權の潰滅を期する理由の一は、彼が抗日容共を標榜し、共產黨及共產軍と共同して戰ふからである。もしコミンテルンにして、飽くまで支那を赤化する行動に出づれば、新政權は帝國と共同して防共に盡さねばならぬ。共同防共は帝國の保全上必須なるのみならず、支那の赤化を救ふの道である。されば苟も防共運動を妨害する行動は、その種類の如何を問はず、東亞の敵として之が殲滅を期するのである。

五、新文化の創造

新文化の創造こそは、長期建設の焦點を爲すもの、今これを近衞首相の敷衍說明に徵するに、「親しく東亞に相隣りする日本と滿洲と支那との三大國が各自の個性を十分に活かしつゝ東亞保全の共同使命の下に固き結合をなすべき關係にある」。「國際正義をして一個の美文たるに止まらしめず、通商・移民・資源・文化等の人間生活の各部面にわたり、これを統合したる見地に立脚し、現實に卽應しつゝ歷史の發展に併行する新平和體制が創造せられねばならぬ」。「東亞諸國を連らねて、眞に道義的基礎に立つ自主的連帶に新組織を建設する任務が、如何なる意義を有し、如何なる犧牲を求め、如何なる用意を必要とするかに就て、徹底せる理解を持つて、斷じて認識を誤ることあつてはならない。」「新らしき東亞の建設を擔當すべき日本は、その國民生活の全分野において新らしき創造の時代に入つたのである。」との所說は、卽ち新文化創造の意義を示唆して餘りある。

從來唱道されたる東西文明の調和、西歐文明の沒落、又はその消長等に關する抽象論に拘泥せず、現實に卽應しつゝ歷史の發展に併行する新平和體制と云ひ、道義的基礎に立つ自主

的連帶に新組織を建設すると云ひ、更に國民生活の全分野において、新らしき創造の時代に入つたといふ。之には具體的に解說すべきか餘地多きも、近來稀に見る明晰且つ颯爽たる名句といふべく、國民は只管この新文化の創造に向つて勇往邁進せねばならぬ。

六、經濟結合の實現

東亞に於ける經濟結合の實現、卽ち日滿支三國の經濟結合は、特に重要なる問題にして東亞の安定上、一日も忽せにするを許さぬ。この經濟結合は、東亞に相隣りする三國の互助連環の關係にあれば、一のブロックにして、東亞永遠の安定を策する根幹となり、その共存共榮を齎らす所以である。之あるがために、第三國を排斥するにあらず、列强と衝突を招く虞もない。恰も米國が中米南米と提携するとその換を一にする。

最近米國の危惧する支那の利權は、日本の獨占に歸して門戸閉鎖され、機會均等を失するなき乎といふにある。之は己れを以て他を邪推するもの、先づ日米領土の廣狹と人口の密度を見よ、帝國の態度は米國の如く日本移民禁止を斷行し、平和・人道・正義を看板として、モンロー主義を主張し、人種的憎惡を遺憾なく發揮しつゝあるとは全くその選を異にする。

また英國の如く、南阿・加奈陀・濠洲・印度その他各方面に於て白人主義を實施して、他の入國を制限し、且つ商品輸入を制限する行爲と同一視するを容さぬ。他を忖度するに當り、先づ彼等自身の實施し來れる政策こそ改善すべきである。見よ、獨伊兩國は既に滿洲國と通商條約の締結を了し、交互貿易する事態にある。我れに通商の自由を妨ぐる意志なきこと、炳として明瞭でない乎。

從來、歐洲諸國の對東亞貿易政策は、各自の植民地に對する如き趣きを示した。彼等は遠隔の植民地より富を搾取して之を本國に持ち歸り、以て各自の資財を豐富にし、植民地の資源を空虛とする主義を取つた。先驅者たる和蘭・西班牙・葡萄牙等は新地を發見して之を植民地とすれば、所在の金銀財寶を擧げて奪取し去るを常例としたのである。蓋し植民地は概して本國より遠距離の地にあり、且つ多くは未開種族に屬するがため、武力を以て之を壓迫し、甘言を以て之を欺瞞し、或は奴隷とし、或は虐殺して、殆ど之を人類視せず、財寶を掠奪して國民生活の裝飾と資料とに供したのである。英國近時の植民政策はやゝ異なり、先づその地を開發し、國風を移して彼等自身の居住に適する施設を爲し、「到る所に英國あり」の趣きを示した。これ英國植民政策の成功した所以である。しかも印度を始め、その移植民に

適せざる地域に對しては、他國と大同小異の搾取主義を繼續してゐる。

新東亞建設の中堅を爲す日滿支三國は各相隣接し、特に支那は人口稠密し、商業心に富み、自ら他に對つて移住する事態にあり、滿洲國の開發は將來益々巨額の投資を要する形勢にある。又國防は隣接地域の關係上、將來共同體制を組織せねばならぬ事情にある。英國が寡兵を駐在せしめ、二億の人口を有する印度を收攬すると同一視すべきでない。滿洲も支那と共に巨額の資本を投じてその資源を開發し、產業の進展を期せねばならぬので、彼の西歐諸國が未開野蠻の植民地を獨占搾取したるとは、全然その趣きを異にする。新東亞の繁昌は購買力を增し、歐米列强の貿易額も亦自ら增長するは、火を睹るより明かである。日滿支の經濟ブロックは、門戸閉鎖・獨占等を意味せず、萬一にも之を敢てすれば、東亞の經濟を萎縮せしむる結果を來す、誰か好んで萎縮を爲すものぞ。帝國は事變前に於ける第三國の權益にして、その正當なるものは之を認容するに吝かなるものでない。

七、新秩序と新政策

近衞首相の數衍放送に云く、「抑々國民政府の政策の基調は、歐洲大戰後の反動期に於ける一時の風潮に便乘せる淺薄のもので、それは斷じて國民政府本來の良智良能に根ざしたものではなかつたのである」とは、蔣政權者以外、何人と雖も首肯すべきを信ずる。支那革命の父と呼ばれた孫文の標榜せる三民主義とは、卽ち民權主義（デモクラシイ）民族主義（ナシヨナリズム）及民生主義（ソシァリズム）にて、國民政府の指導原理となつたが、民族主義の强調より排外思想を高め、民權主義より惡平等の共和制を布き、民生主義より容共政策を取るに至つた。是等の主義は帝國內に於ても一時流行を極めたことであり、大體に於て歐洲民主々義國家の奉ずる所なれば、孫文の三民主義は、英米佛等には歡迎せられ、特に米國に於て賞讃せられたのであつた。しかも孫文の繼承者たる蔣政權樹立以來は、之を逆用して歐米依存の風を高め、以夷攻夷の傳統を復活して、排日抗日に狂奔し、その尨大なる國防施設は、一に帝國を敵として開戰する目標とした。その結果遂に滿洲事變及今次の支那事變を惹起するに至つたのである。

帝國は防共政策を徹底的に行ふ決意を有する、されば「國民政府は既に地方の一政權に過ぎず、然れども、なほ同政府にして抗日容共政策を固執する限り、それが潰滅を見るまで、帝國は斷じて矛を收むることなし」と聲明し、更に「固より國民政府と雖も從來の指導政策

を一擲し、その人的構成を改善して更生の實を擧げ、新秩序の建設に來り參するに於ては敢てこれを拒否するものにあらず」と宣し、その罪を憎んで、その人を惡まざる寛容を示したのである。

かくの如き新東亞の建設には、從來支那に於ける指導政策の變更を要求し、新政策の積極的進展を所期する。その新政策とは、即ち叙上、東亞に於ける國際正義の確立・共同防共の達成・新文化の創造・經濟結合の實現を期するのである。

八、新秩序新體制の傾向

東亞新秩序の長期建設時代に入りたる限り、世界大戰後の反動期に流行せる如き主義思想に膠着し、依然之を死守すべきでない。眞理は確乎不拔にして、絶對普遍妥當の性を有し、古今東西を通じて一貫するが、主義・思想は時所位によりて榮枯盛衰する。時代の精神に特徴あり、形勢に變化あり、輿論と思潮に消長がある。これ各種思想の歴史沿革ある所以なれば、今後は、新時代に適し、國策に添ふ思想を檢討し、之を馴致して指導原理とすべきである。しかも當初より一個のイデオロギーを掲げて、萬事を律する如きことなく、總て現實に

即し時勢の變に處するを要する。この態度は、所謂機會主義を以て目すべきでなく、實は應病與藥にして、政治倫理の要諦である。

現在の列强は三大別される。一は自由民主體制にして英米佛等之に屬し、二は全體主義體制にして獨伊の兩國之に屬し、三は共産體制にしてソ聯邦及東歐諸國之に屬する。新東亞の秩序體制は以上三種のうち何れに傾向する情勢にありとする乎。抑々日滿支三國相提携して防共政策に徹底する限り、ボルシェギズムやコミンテルンと正反對に立つは言ふを俟たぬ。次は自由民主體制なるが、英佛の二國は白禍の元兇にして常住の侵略國であり、蔣政權援助に終始一貫し來れる關係あり、今日までの經過によれば、英米佛は蔣を傀儡として事變を延長せしめた責任あり、間接の敵國たる位地に立つものなれば、從來の歐米依存は清算せられねばならない。殘る所は防共協定を締結し、滿洲國を承認して國交を結び、今次事變に際しては厚誼を寄せ、帝國の利益を圖れる盟朋の獨伊兩國の體制である。

東亞と獨伊とは、その國體政體等を異にし、相一致し得ざる要素なきに非るも、防共政策に協力し、通商貿易に互惠し、攻守に同盟し、文化事業に貢獻し、盟朋の厚誼を交驩して、國運の隆盛發展を企圖する上に於て、將來共同し得る事態にあれば、新東亞の體制が獨伊に

近接する傾向あるは疑ふの餘地なからう。

之を政治に見るに、帝國は立憲君主國であり、滿洲は君主制であるに對し、支那には中央集權なく、北京・上海・南京・漢口・廣東等の各地に臨時政權勃興し、昨今は聯合委員會を開きて、各機關と協力する事態にあれば、當分は聯邦制の形態を持し、中央統一集權は、水到渠成の他日を期せざるを得ない。この各政權が相聯合して新東亞建設の新政策に對し、一致協力を基調とすれば足るのである。

又經濟方面には、北支及中支に善處する會社の設立を見たるが、更に南支にも及ぶべく、文化方面にも施設を要するもの多々あるが、その根幹は三國提携・共存共榮・互助連環にある。この點に於ても、獨伊の全體主義體制に近似する傾向あるを看取される。

帝國は三十餘年前、露國と戰つて歐洲の世界征服史の一端を挫折せしめた。近く滿洲國の成立を促進して、亞細亞大陸の經營に進出した。現時の蔣政權打倒戰により、日滿支三國提携及新秩序建設を分擔する。未だ白禍を退治する運に達せざるも、今や歐米依存の弊風より脱却し、新東亞自主の長期建設に着手する段に進捗した。之は世界史の一大轉換を意味し、亞細亞の頽勢を挽回する契機を造つたものである。

過ぐる天長の佳辰（昭和十五年四月）に於て、板垣參謀長の名を以て發表せられた「派遣軍將兵に告ぐ」は、獨り戰線の將兵諸士に止まらず、銃後に在る一億の同胞も、新らしき感激を以て讀まれたわけで、當に劃期的の文獻である。その簡潔にして頗る要領を得たる、之を味讀する間に萬感交々起つた。

九、派遣軍將兵に告ぐ

今次の支那事變勃發當時より、皇軍の出動は特に「聖戰」と呼ばれたが、「派遣軍將兵に告ぐ」は、その冒頭に於て「世界に先行せる道義文化の傳統を共有し、二千年來の友好關係を繼續して來た日支兩民族」と云へるを始め、「道義日本の本質」、「聖戰の眞義は道義による新秩序の建設にある」、「皇軍の特質は道義の軍」なりと稱し、更に「東洋の道義文化」、「道義的基礎」、「身を以て道義を實踐せよ」とありて道義、道德等の文字が數多使用せられ、全篇を一貫するに「道義」の觀念を以てした。又その反面に於て「個人主義的歐米物質文化」、「利害の打算」、「西洋模倣の侵略思想」、「物質萬能の世相」、「速かに歐米的思想より覺醒」

等の文字によりて、歐米思想を排擊してある。一言すれば、東洋の倫理思想が高揚されて、西洋のそれが抑止されてゐる。

惟ふに、明治維新政府成立の當時は、神道主義鼓吹せられて排佛棄釋運動が起つた。後ち西洋模倣熱に浮かされて所謂鹿鳴館時代を現ずるや、その反動として國粹保存主義が鼓吹せられた。又宗教教育衝突問題起るや、之に對し日本主義といふが唱道された。更に世界大戰後は社會主義、特にマルキシズムの大流行を來して思想國難を叫ばれたが、滿洲事變以來、日本民族精神が大いに高調せられた。そして今次の支那事變以來、一代の主潮を爲せるものは、この「派遣軍將兵に告ぐ」に盛られた思想であつて、正にその粹を集めた中核とも云へる。筆者は斯文の趣旨に對して全幅の敬意を表し、反復熟讀を希求する意味に於て、一言を述ぶることにした。

一〇、道義文化と物質文化

斯文には、道義といふ辭が一貫して使用され、特に「個人主義的歐米物質文化」に對して「東洋の道義文化」と云はれてゐる。東洋の精神文化といふ辭は、從來も屢々使用されて來たが、近時は「道義外交」といふ辭も流行してゐる。案ずるに、道義とは各民族のモラルであつて、特に風俗・習慣・作法（獨語、ジッテ）と同義に使用される。されど、道義文化なるものは、獨り東洋にのみ偏在してゐないやうに、物質文化もまた西洋のみに偏在してゐない。東西共に各兩文化を併用するが、唯だその性格に差別があると見られる。

古代東洋の物質文化は、古代西洋のそれに匹敵し、否な寧ろ優れてもゐたが、近代西洋の物質文化は、近代東洋のそれに比して遙かに優れてゐる。之は理化學の發達・機械の發明・技術の進歩等に由來してゐる。その優越は寧ろ近時の談であつて、武器を始め、通信・交通、その他の機關の精鋭なるものは、現に利用せられて、大に便宜を得てゐる。この點に於て東洋は遙かに西洋に及ばない處がある。ために之に心醉し、之を萬能視し過ぎた嫌ひあることを認められる。

道義文化又は精神文化は、東洋に於ては儒教及佛教を主とし、西洋に於ては基督教を主とする。その宗教的信仰の評價は暫く控えるが、凡そ世界的大宗教の發生した民族の背景を檢討するに、政治的國家としては、除外例なく總て劣等なるを常とする。猶太教及基督教の起れる猶太、佛教の起れる印度、回々教の起れる亞剌比亞、ゾロアスター教の起れる波斯等、

何れも國家としては劣弱であつて、それら民族の精神は社會的共同性に乏しく、個人主義的傾向が強い。又、大宗教家の發生の背後には必ず大悲慘の事實が横はつてゐる。それら民族は悲痛慘憺の窮境に陷り、その救ひを求めて與へられたのが宗教である。恰も兩親を一時に失つた孤兒が、母乳を求めて號泣止まぬ底の心理に類する趣がある。各宗開祖達の宣傳せる當時の國情と、隣接國の社會情勢とを見れば、思ひ半ばに過ぐるであらう。

東洋の道義文化は佛教の流布以外、儒教精神が一國の指導階級中に行はれ、特に我邦の如く武士道の發達を見て、徒らに怪力亂神を語らず、中庸を保持せしめた效果あり、隨つて大過なからしめたといふ特徴がある。之に反して西洋の道義文化は徹底宗教を中心とし、羅馬帝國治下は基督教によりて統制せられ、中世期一千餘年間は羅馬法王の最高權力下に置かれ、殆ど宗教の一色を以て塗り潰された。そして近代歐洲の世相は、この中世期式を打破する行動の繪卷である。彼等は宗教の名の下に永年の戰爭を繼續したのみならず、亞細亞の半島とも見做さるべき狹小なる歐洲の地域内に異人種・異民族各々割據して、生存競爭上、常に武力に訴へて之が勝敗を決して來た。然り近代歐洲史は他民族の征服戰・植民地獲得戰、即ち征服と掠奪を敢てし、それが地球の隅々に普及したのである。宗教としては博愛仁慈を說く基督教を有するも、この宣傳が他民族の征服と掠奪とに利用せられて役立つて來た。即ち近代西洋の宗教は、國内の倫理道德の維持に資せるが、國外の政治經濟競爭には全く之を逆用した姿がある。彼等は總て戰爭の主因は、經濟的理由に基くと解釋するを常とする。經濟は厚生を主とし、厚生とは衣食住の生活を充實することで、各自競うて物質文化の優越に努めた。隨つて大勢上、經濟的利益が主となり、道義は客となつたのである。

叙上の歷史的事情に徴すれば、西洋が物質文化に偏傾し、東洋が道義文化に優越すると見做される由來が判かる。我等は須らく物心一如の見地に立ち、何れの一方にも偏傾せずに、その總和を圖らねばならぬが、今次總司令部の配布したる「將兵に告ぐ」の一文が、極力道義を中心として鼓吹したることは、深い意義があると思ふ。

一一　事變發生の眞相

事變發生以來、敵性第三國の援蔣行動に對し、相當の論議行はれ一時は排英の聲高まり、示威運動も行はれた。しかも爲政當局は、他國を刺戟するが如き言を使用せず、直接よりも間接にして婉曲に說明するを常とした。特に議會に於ける答辯の用語には細心の注意が拂は

れてゐる。ジャーナリズムの言論も多くは遠慮がちにて、唯だ事實を事實として報道する趣旨に出でた。然るにこの將兵に告ぐの文は、率直明白に敵性國を擧示してゐるが、之は國民を指導する上に於て寧ろ效果的である。歐米の新聞雜誌には、我邦に對し公々然惡罵と侮辱を浴びせつゝあるに拘らず、我は依然君子的態度を執りて、徒らに因循姑息に流るゝため、却つて彼等を恐怖し屈服するかの如き誤解を招いてゐた。この際、軍部が敢て率直に、その眞相を發表したることは、大に多とせねばならぬ。

先づ支那事變發生せる根本原因の一は、日支兩民族が東洋人たるの自覺を忘却し、個人主義的歐米物質文化に眩惑した事に歸し、二は歐米諸國の侵略的策動にありとして、英政策と蘇聯の態度を擧示し、蔣政權をして、抗日政策を採らしめたことにありとし、交戰の對象は英・米・佛・蘇の煽動に躍りつゝある抗日政權及その軍匪であつて、支那の良民でないことを明かにし、三は英・米・佛等の諸國が重慶政權を援助してゐる根本目的は、支那乃至東洋を永久に植民地化し、本國人の利益を基礎とし、搾取の對象として之を維持する事を念願するものであり、また蘇聯の企圖する所は、抗戰繼續による日支兩國々力の消耗であつて、共に道義に反し打算に立脚すると斷じ、以て歐米諸國の對日敵性の本質を明かにし、更に事變發生當時の勅語を掲げて、聖戰の眞義を明示されてゐる。

以上は事變の由來及經過と、その眞義如何を示したので既に周知に屬するが、斯文は之を簡潔明瞭に說明されたものであつて、國民一般の事變認識も、今や漸く常識となつたやうである。

何故に我が國民は、この常識に達することを遲延したの乎。それは明治以來歐米を師表として崇拜し、模倣し、依存し過ぎて所謂「侮支拜歐」主義が繼續したからである。我が知識階級は支那を學ぶに、主として英佛又は獨逸の文書に依り、支那研究のため支那に行くよりも、往々英國や佛國に留學した如き事すらあり、又一般に歐米研究のみを尊重して、支那研究を輕視し過ぎた嫌ひがある。聊か私事に屬してゐるが、筆者自身の體驗を記することを容されたい。

筆者は疾くより支那問題に關心を有し、田口鼎軒博士の主宰した「東京經濟雜誌」上に於て屢々論議してゐた折、京都同志社出身にて米國に遊學し歸朝後、安田銀行に入つた青木要吉氏と相識となつたが、その令弟に山本唯三郎君といふがあり、明治末期支那貿易に志して松昌洋行に入られたが、後繼者としてその經營を一任され、北支より英人經營の開平炭を輸入し、樺太より杭木用の木材輸出を

始めた當時、青木氏の紹介にて山本君と會し、談支那問題に亙つた際、一册の著作を委囑された。依て曾て自分の研究發表したのを纏めて、實業之日本社から山本唯三郎著「支那の將來」（菊判四二七頁、附錄四二頁）と題して刊行されたのは、大正元年十月で、今から三十年前である。自序に「終りに一言すべきは本書の著述に當り、布川靜淵君が種々有益なる資料を提供せられ、且つ多大の援助を與へられたる事是なり」と記してあるが、事實は、この序文は勿論、全卷の一字一句悉く筆者の手に成り、同君をして支那問題關心の一人たるを示す手段として、君の名を冠したものであつた。之には筆者の一家人を支那研究に沒頭せしむる心算から、君の經營する天津松昌洋行田張所に店員として入社せしめた厚誼に報ゆる意味があつた。同書には男爵阪谷芳郎博士の序文もあるが、山本君を舊識の男爵邸に同道して、初めて之を紹介したのも筆者である。同君は手紙一本さへ容易に書かず、讀書や文筆には凡そ緣のない實業家である。和蘭のベッサリング著山本譯「支那幣制改革」の刊行もまた同趣に出でた。君が金を儲けて成金呼ばりされたのは、世界大戰中、農商務省所有の惠山丸その他の船舶を利用した頃からで、後には朝鮮に虎狩して虎大蟲の稱を得、一時は豪奢の生活振を發揮したが、經營上に頓挫を來し、末路は洵に氣の毒であつた。

筆者が疾く支那問題に關心を有し、右の外尙一二の述作に從つた際、その參考資料としたのは東亞同文會の刊行物を除けば、概ね外國の文書が主要であつた。今より三十餘年前ではあるが、一部の有志者以外、支那研究に沒頭するものは洵に少なく、支那より來朝する留學生は多數を算しても、一般は所謂「侮支拜歐」で、支那を研究するとも別に得る所ない、といふ空氣で充されてゐた。然るに滿洲事變より支那事變に至りて俄然形勢一變し、殆ど朝夕支那關係の新刊書を見る盛況を呈してゐるが、何となく盜賊を見て始めて繩を綯ふ趣きが見える。その間にありて唯だ獨り間斷なく注意を拂つてゐるのは、我が軍部の首腦であつて、之には頭が下がる。如今皇軍の連戰連勝する所以のものは、多年軍部が不撓の研究に基いてゐることを知らねばならぬ。特にその研究たるや、頭や書類などよりも、足で實地を踏査した結晶であるから、今日我邦に於て眞に能く支那を知るものは軍部を最とする。隨つて、その所見も自ら首肯すべき價値がある。

一二、事變の解決法

次に事變の解決法に言及されてゐるが、先づその示された根本觀念の雄大なるに感嘆禁じ得ないものがある。我が軍部は平素よりこの意義の教育に努力せられつゝあるやうに聞いてゐるが、一般國民に對する學校教育及社會教育に於て、果して能く徹底されてゐるであらう

乎、頗る疑問に屬する。即ち「八紘一宇の理想は萬邦協和の建設であり、東洋平和は萬邦協和への第一歩である、東洋を救つた後には世界を救はなければならない」といふ。その理想の高遠と志望の雄大とは、正に宗教的使命の趣を以て示唆されてある。この世界を救ふの情熱と氣魄と至誠とが、一體どれだけ國民の間に育成せられ基礎づけられてゐるだらう乎、大に疑はしい。最近利潤統制の創提にも見るが如く、兎角何事にも尖端を切つて一歩前進するのが何時も我が軍部らしい。

又云く「東亞新秩序建設の爲には先づその基礎である日滿支三國の關係を道義的基礎の上に物心兩面に亙り調整結合せねばならぬ。是が今次事變の直接目的であり、日露戰爭、滿洲事變及今次事變は之が歴史的努力の過程である」と。近時の事變は玆に肇國の理想と密接に結合せしめられ、歴史的に一脈相貫徹する所以が示唆されてゐる。それで「今次事變の本質は、消極的には日滿支三國の安定確立に關する努力であり、積極的には東亞再建への發足である」と解してゐる。そして三國關係の調整結合の國策としては、周知の如く善隣友好・共同防共・經濟提携の三原則が既に提唱されてゐるのである。この根本觀念は指導原理であるから、苟も之を阻止する如き國あらば、之を踏み越えて邁進せねばならない。英・米・佛・蘇等の諸國は、我國の事變處理を目して、獨占行爲に到達するものと邪推し、凡ゆる手段に訴へて現に之が妨害に與つてゐる。故にそれらの妨害を打破して、着々これが實施に進む。これ即ち長期戰の段階に入つたと云はれる所以である。

次に、日本は支那の統一强化を高調し之に向つて努力する。されば「萬一日本人にして支那人を瞞して不當の所得を望み、或は外國に倣つて支那を日本の植民地の如く考へる者があつたら、道義日本の本質に反するものであり、到底天に愧ぢざる信念を持つ事は出來ない。聖戰の眞義は道義による新秩序の建設にある事は、炳乎たる大方針であるから、總ての施策亦、言行一致の誠意を以て臨まねばならない」と訓戒されてゐる。之は事變解決の根本觀念上、當然服膺すべきことで、千鈞の重きを爲す點である。

かくて滿洲建國の根本精神を想起せしめ、東亞聯盟を結成する要あるを示し、「日滿支三國が眞に結合すれば、恐らく世界何れの國と雖も、一指をも染める事は出來ないであらう」ことを力說され、「東亞新秩序に於ける國家相互間の關係は、究極に於て聯盟結成への發展を豫期するものである」と斷じ、三國ブロックの必須を企圖する。東亞新秩序の建設とは蓋しこの業を指呼するのである。

一三、日本人は日本人に還れ

叙上の目的を完遂するには、如何なる行動に出づべき乎、こゝに行動倫理が明示されてゐる。先づ西洋模倣の侵略思想に依り、權益的代償を求める觀念を清算し、力を以て求めずして、道を以て得るの要を示し、速かに歐米的思想より覺醒して、眞の日本人に立還るべきを說いてある。「東洋を東洋に還す前に、先づ日本人は日本人に還らなければならぬ」といふ、之が事變解決の根本條件である。この趣旨に對しては毫も異議を狹む餘地ないが、世には近時の情勢を見て、餘りに保守的傾向が强調され過ぎぬ乎、明治維新の際賜はつた五箇條御誓文の御趣旨をも考慮する要があらうといふ。之は朝夕のラヂオ放送を始め、古代文化、肇國史等に關する言論文書の流行甚だ盛なるに反し、歐米方面が閑却される事情より、所謂採長補短の要を說くのであらう。しかし歷史的循環性及波動性より見れば敢て怪しむに足らぬ。現下の情勢は、第一次世界大戰後の思想國難の經驗及英・米・佛・蘇等の對支行動が東洋の一大危機を招き、皇國をして興亡の分岐に迄押込めたのであるから、眞の日本人に立還らしむるため、日本人の由來因緣を回顧せしむることは最も必要な修養である。勿論一にも二にも西洋模倣・西洋崇拜・西洋依存として排擊を能とする如きは感服されないが、その惡弊を除去するがため、多少奇矯に走る如きことは敢て咎むるに足らない。

次に皇軍たるの本質に徹し、身を以て道義を實踐せよと訓戒してある。「皇軍の特質は道義の軍として、皇道を宣布することを、その使命とするにある。　陛下の軍人、　陛下の軍隊は常住坐臥、唯々大御心を奉體し、身を以て實踐しなければならぬ」と切々微細に亘つてゐる。皇軍の軍紀振肅は今更のことでなく、疾く國民の絕對信賴を得てゐる。銃後の我々も無論之に倣はねばならぬのである。

更に注目を値ひするのは、「敬・信・愛を以て兩民族を永久に結合せよ」との訓戒である。惟ふにこの三者は一切の宗敎及道德の根本原理、人倫の粹を爲すものであつて、西洋の基督敎とても信・望・愛を擧示し、そのうち最も大なるを愛なりと云つてゐる。今や日支兩民族は相互に敬し、相互に信じ、相互に愛して永久に結合せよと云はる。惟ふにこれ以上、これ以外、そこに何の宗敎も倫理も道德もないのである。もし之を解釋すれば、僕を代ふるも足らぬが、又、些の解釋を待つ迄もなき自明の倫常である。然り、倫常の德目としては明かなるも、これは抽象的原則なれば、更に具體的示唆を要する。果然、刻下の時局に急務とする

要領が、そこに擧示されてゐる。

一四、時局急務の要領

第一は不良邦人の戒飭遷善である。事變以來、大陸に進出する邦人益〻增加するが、而も道德的に指彈せらるゝものが甚だ多くなつたから、之を戒飭して遷善せしめねばならぬ。卽ち派遣軍將兵は先づ身を以て自肅の範を示して、不良邦人の反省自覺を促したのである。果然、五月七日を以て外務省は大陸渡航制限を發表するに至つた。之には事變以來の渡航者五十八萬に上り、現地に落す金は年一億圓に達するより生じた圓通貨下落や、物資輸出上に及ぼす影響等を顧みた點もあるが、同時に不良邦人の制限取締も含まれて、洵に時宜に適した措置と云へる。卽ち「十萬の英靈は不良邦人が懷を肥やすために、日支兩民族を再び抗爭に導くやうな結果を見たら、地下で何と訴へるだらう」と告げられた所以である。

第二は傳統と習俗の尊重である。凡ゆる分野に於て交互に誤解と不和とを釀す原因は、その國の傳統と習俗とに違ふことより來るが多い。故に「支那には支那の傳統があり、支那人には支那人特有の習俗がある。之を尊重し、之を理解して、その面子を尙ぶ事は絕對不可缺の要件である」といふ。卽ち日本の法則を支那に强ひたり、その內政に干涉してはならぬ。「宜しく支那自體の事は支那人に委せ、信をその腹中に置く雅量を以て接しなければならない」と告げた。對支態度として、かくの如く情理の至れり盡せるものは、未だ曾てその類例を見ない。もし國民一般にしてこの態度に出づるあらば、不良邦人として指彈せられ、渡航を制限さるゝものも、恐らく皆無となるであらうと信じられる。

もしそれ正當なる第三國人に對して寬容なるべきことは、政府に於ても疾くより屢々聲明した所で、將兵のみならず、一般國民も同樣に寬容を要するが、利敵行爲を悛めざる行動者に對しては、斷乎懲戒、敢て止むべきでない。

一五、交代歸還將兵に告ぐ

最後は交代歸還將兵に告げたもので、國內を導くの覺悟を要求し、もし醜狀、無自覺あらば敢然起てと云はれる。今、玆に我等は、斷じて國內に醜狀や無自覺がないと公言し兼ねるを遺憾とする。旣に支那渡航者制限の餘儀なきに至れる、興亞奉公日に於ける醜態の暴露せる、闇取引の全國を通じて一般化しその檢擧の頻繁たる、依然として思想對策を講ずるの止

むなき事態等、蓋し枚擧に遑がないとも云へるが、他方單刀直入的に之を糾彈し得ざる事情も亦考慮せねばならぬ。國民の修養もさることながら、何よりも先づ「政治の貧困」が、その一半の責めを負ふべきでなからう乎。

事變それ自體が當初より、不擴大主義によりて卽決せらるゝやう宣傳せられ、誰もが今日の長期戰を期待しなかつた。政策その者も、唯だ都度々々に施されて來た。生活必需品たる米・木炭・石炭・砂糖・マッチ等に至るまで、何等適切の計畫、統制に出でず、或は有るが如く無きが如く、或は高くなるが如く低くなるが如く、一向見透しが付かず、もし眞に不足ならば節すべきであるが、何等不足せずとて安心せしめ、斷じて値上せずと云ふ後から突然値上げをするといふ事態なれば、國民は政治に對して信用を措かざるに至つた結果多きにゐる。今次地方長官會議及その座談會記事等は、從來一般の周知せざる事情を明示してゐる。卽ちその禍根は主として、法律萬能主義と秘密主義とに歸せられる。

地方は中央を信ぜずして將來を危惧する餘り、村落人は己が村落居住民の生活を維持するだけの貯藏品を要するとて之に腐心し、各町・各郡・各市また之に則る勢ひとなつた。こゝに封建的地方割據を現じたので、要は中央政策の不徹底に基いてゐる。生產・配給・物價・賃銀・勞力等を始め、凸凹あり、緩急あり、統制の名はあるも、その實がないから、闇取引が全國に普及した。賣惜み買溜めもまた同一義に出でた。法規に照して檢擧を行つたが、その多くは說諭して將來を戒飭するに止めたため、金儲けの好機會として暗躍するに至つたのである。戰時に不正利得を所期する惡德は、素より許さるべきでないが、所謂經濟事犯の無際限を致せるは、政治の貧困なるによるのであれば、經濟倫理を高調すると同時に、政治倫理を高調せねばならぬ。一言すれば、因循姑息の政治が、今日の經濟惡德を助長したやうな消息も大いに考慮を要する。

軍は交代歸還將兵に對し、更に物質萬能の世相に捲込まれざるやう警告し、「もしこの英靈を冒瀆する樣な國內の醜狀、國民の無自覺あらば敢然として起ち皇運を扶翼し奉り、聖戰の目的貫徹に向つて國內を導くの覺悟を必要とするは言を俟たない所である。……歸還後、物質萬能の世相に敗退することなく、皇國民の精神的中核となつて鄕黨を指導することは、生き殘つた者の英靈に對する義務である」といふ。一讀以て肅然襟を正さしむる概あり、何人も感慨措く能はざる辭である。敢て問ふ。政治家及政黨者流の面子、果して如何と。

筆者は曩に「今日の軍部といふグループは、その敎育訓練の高度は勿論、精神的修養も錬

磨せられ、戰場に臨めば千辛萬苦を厭はず、忠勇義烈、一死以て君國のために至誠を盡して一心不亂の態度を徹底する。この崇高なる精神と態度に於て、今日の軍人は一國の模範であり、國民の師表として當に仰ぐべき性格と價値を具へてゐる」と言明した。今、その歸還將兵に對し、「皇國民の精神的中核となつて鄕黨を指導する事」を告げられ、「特に上級者の自肅自戒、卒先垂範を先決としなければならぬ」といふ警告と相對照し來りて、玆に皇軍に對する感謝と信賴とを禁じ得ない次第である。

東亞新秩序建設の偉業は、如今漸く發足したばかりであつて、事は容易でないが、その意義を解するに徹底道義を以てし、指導原理を示唆されたることを多とせねばならぬ。而も之を政治に、經濟に、また外交に運用して施設行動すべき範圍は廣大で、前途遼遠である。

こゝまで記した際、ラヂオ放送は獨逸の落下傘隊果然和蘭、白耳義及ルクゼンブルクの隨所に着陸、領内で大空中戰展開、和蘭は全運河を閉鎖した、獨機は佛國全土及英國東海岸空襲、英軍はアイスランド上陸、英内閣總辭職說目捷に迫る、等々を報じた。

（昭和一五・五・一〇）

五、建設途上に於ける世界の新秩序

刻下進行中に屬する東の支那事變と、西の歐洲大戰とは、世界の舊秩序を打破して、新秩序を建設する世界史的意義を有してゐる。さらば、その新秩序とは如何なるもの乎、事は將來に屬するも、當然招致せらるゝ一二の傾向を點描して、之が對處を考慮して見やう。

一、世界舊秩序の一瞥

新秩序の傾向を見るには、先づ以て舊秩序に就て一言せねばならぬ。舊秩序とは、卽ち第一次世界大戰の結果、ヴェルサイユ條約締結により決定せる歐洲の情勢を指すので、過去二十有餘年に亙る事態を含む。要約すれば、(一)戰敗國たる獨逸を徹底壓迫するため獨墺兩國を四分五裂せしめ、隣接にチエッコ・スロバキア、ポーランド、ルーマニア、ハンガリ等の新國家を建て、以て獨逸を包圍して再起不能の狀勢に置き、且つ獨領に屬せる海外植民地は擧げて奪取の上、英佛の占有及聯盟の管理又は夫々の委任統治とした。(二)史上未曾有の巨

額に上る賠償金を獨逸に課したる外、數多の資源を獲得したるのみならず、單に國内の紛擾を停止する底の兵を備ふる以外、國防充實の權を與へられず、獨逸國民は生命維持の最低生活を營む外なき窮地に抑壓された。(三)國際聯盟なる機關を造つたが、英國は本國以外、英領植民地及自治領にも一主權國家と同樣の投票權を與へて、本國と共同の行動に出でしめ、佛國及新設國家を網羅して、英佛權力の協同體たらしめながら、國際聯盟といふ美名の下にその權力を縱にした。(四)佛國は白耳義及ポーランドと同盟を締結せる外、小協商國たるチェッコ・スロバキア、ルーマニア及ユーゴスラヴ等とも締結し、更に蘇聯と同盟國となれるが、英國もまた同旨に出でた。結局、獨逸を孤立無援として、正に英佛主宰下の歐洲たらしめたのである。

この間、獨逸帝國は共和制となり、ワイマル政府を建てたが、初代大統領を始め政府の中堅分子は悉く猶太人によりて占められ、憲法すら一猶太人によりて起草され、政權は社會民主黨に歸して、十有餘年を經過した。ために、祖國復興の如きは殆ど期待されなかつたのである。然るに一九三三年一月ヒットラー内閣成立し、十一月の總選擧に於てナチス黨は絶對多數を占め、翌三四年八月ヒンデンブルグ大統領の歿後、ヒットラー首相が大統領に當選以來、ヴェルサイユ條約軍事條項廢棄を公式に宣言し、爾來、臥薪嘗膽、鋭意國防の充實に邁進し、遂にチェッコ、墺地利を併合し、進んでポーランドを攻略するに及んで、一九三九年秋、英佛聯合軍と開戰を宣するに至つたのである。

即ち、西に於ける舊秩序とは、ナチス獨逸政府が出現せざる以前の歐洲の情態を意味し、ヒットラー首相が總統の任に就き、ヴェルサイユ條約軍事條項廢棄を宣言するに至つて、その舊秩序破壞の端が啓かれた。また東に於ける舊秩序とは、滿洲事變、特に支那事變以前の事態を意味し、新秩序は該事變以來起りつゝあるが、現下漸くその緒に就きたるに過ぎずして、將來に屬するものが多い。されば、東西共に、新秩序は近き將來に實現されるものである。今は唯だその趨勢を豫想して點描する外に出てない。

二、世界新秩序の建設着手

獨逸は丁抹、諾威を攻略し、西部戰線に於て、既に白、蘭兩國を降服せしめ、更に佛國の降服となり、その間、伊國の參戰を見、獨佛及伊佛の休戰條約締結せられ、今は英國を殘すのみとなりて、獨英兩國の大決勝戰は目睫の間に迫つて來た。その勝敗は乾坤一擲の一大決

戰として全世界の耳目を聳動し、未だ俄かに豫斷を許さないが、我等は必ず獨伊樞軸の勝利に歸すべきを信じてゐる。伊太利は英本土戰に與かるところ少なく、主として地中海方面に於て活躍すべく、獨伊協力してスエズ運河を閉塞し、埃及を抑へ、ジブラルタルを攻略し、西班牙また追つて參加して、地中海方面に於ける英國の勢力を驅逐し、英國の極東進出を抑制することは必須たるべく、從つて、地中海より香港・ビルマ・新嘉坡・南洋方面への進出は阻止される運命となり、之と同時に印度及ビルマの獨立運動益〻熾烈となり、東南洋に於ける英國の勢力もまた脆弱となるのである。

英國の勢力を打破するに於て獨伊協力して、地中海沿岸の英勢力とスエズ運河をその掌裡に收むることは、獨伊兩國が將來、阿弗利加方面を經營するに於て便益を獲るに止まらず、地中海の覇權を握り、併せて東南洋に於ける英勢力を失墜せしむる上に於て一大效果を齎らすので、東亞新秩序の建設上に多大の貢獻となるのである。かくて地中海の平和が維持せられ、東京—伯林—羅馬樞軸が新らしき意義を發揮することになる。之によつて第一次大戰當時の損失を償ひ得るは勿論、延いてバルカン半島諸國に對する睨みもきゝ、世界の平和に貢獻するところ多大となる。之は最早想像でなく、今や必至の實現に近づいて來た。又、今次獨伊の對英戰が、東亞の新秩序建設と如何に密接深厚の關係あるかを認めて、我等はその勝利を祈らねばならぬ。

三、獨逸の大捷と大計畫

首腦立役たる獨逸の今日までの戰果に徵し、今や世界何人も對英戰勝の必至を信ぜざる者はなからう。而してその影響の多大なるは枚擧に遑なく、先づ以て阿弗利加に於ける舊植民地の回收を始め、地圖の塗り換へもさることながら、獨逸の大計畫は潑剌たる新鮮味を帶び歐洲を一體とする聯邦の建設となり、經濟同盟を締結して、完全な自由通商國となすべく、それには新幣制を布き、一種の歐洲聯盟的經濟圏を造りて米國をして、經濟的孤立たらしむべく豫想される。第一次世界大戰以來、世界の黃金は米國に集中し、彼は黃金帝國主義國となつて來たが、その黃金も主として猶太財閥の掌握する所となつてゐるから、この猶太人の國際金融財閥を打破するには、先づ猶太人の獨占に歸せる武器製造業を各國の經營に移し、更に現在の金本位制に代るべき新幣制を布く運びとならう。この新幣制と武器製造國營の二者は、彼等戰爭魔の陰謀と暗躍を根絶して戰爭の頻發を防ぎ、黃金帝國主義を打破する世紀

的偉業であつて、ヒットラー總統以外、之を敢てし得る者、恐らくは他にないであらう。と
に角、世人の豫期せざる新計畫を樹て、以て歐洲の新秩序を建つべきを期待される。歐洲の
新聯盟は、米國のモンロー主義の如く、單に歐洲人によりて自治し、他に干涉しないと同時
に、他の干涉を容れぬといふ如き宣言に止まらず、獨逸は新盟主となつて、政治に、經濟に
新機軸を樹立し、從來屢々唱道され、希望された歐洲聯邦を形造りて平和の維持を圖り、黃
金帝國主義、國際財閥の巢窟たる英米兩國に對し大痛棒を加へるのである。ヒットラー總統
は彼の第一次大戰後、國際聯盟を造りて、英佛及猶太系の獨占主義に沒頭したる如き卑怯を
避け、眞個世界の平和と文化の向上とに貢獻するところ多大なるべきを信ずるのである。

こゝまで筆を運びたる際、七月九日、獨宣傳部長ローゼンベルグは、次の如き重大聲明を
發したとのニュースに接した。

「ノルウェー、デンマルク、スエーデンを含むスカンヂナヴィアは北海、バルチック海に至るドイツ
保護下の汎獨結體の一部と見做さるべきことである。これは英國の封鎖により、これら諸國間の經濟
的、政治的、文化的協力を一層緊密ならしめる必要が生じたからである。これら諸國は强大國の保護
を受けても、決して自國の體面を汚がすものではなく、單に同一文化の生活法則を承認するに過ぎな
い。かゝる處置は歐洲民族の運命を體得することである。運命は、かくて北歐のゲルマン民族が住む
全地域を保護下に置くことをドイツに命じた。英國による對歐封鎖は、歐洲諸地域の經濟的自給自足
を强ひつゝあり、今後は、ダニューブに繫がる道路や運河の構築により、歐洲大陸を一體とする歐洲
經濟圏を建設することとならう。かゝる經濟圏に於けるドイツの役割は特殊なものであるが、これに
對するスカンヂナヴィアの協力を希望する。ドイツはスカンヂナヴィア諸國の文化傳統を保護する責
任を引受ける覺悟である。」

白・蘭・佛の三國は既に降服したるも、對英戰の終結と平和條約の締結せざる限り、その
處理は豫測されないが、佛國は國家革命の必要に迫りて早くも憲法を改正し、こゝに小黨分
裂する議會政治の惡弊を排除するため、議會は一の諮問機關とし、組合主義組織國家體制を
執ることに決し、獨伊兩國と同旨の全體主義下に更生し、過去百十五年來の政治形態を淸算
することゝなつた。即ち、ペタン佛首相は七月十日、上下兩院に對し、佛國再建の宣言をな
した中に云く、

「凡ゆる罵倒を突破する精神を以て、新政府は近代的單一基礎の上に立ち、戰敗によつて解體された
國家の行政司法制度を再建するであらう。政府は不幸なる戰爭の重荷にも拘らず、國家支出を最小限
に止めんとするものである。社會政策に就ては青年教育を第一とし、次に勞働の組織化を行ひ農業を

行はしめざるやうにする。社會的、個人的、職業的自治體的、地方的團體の活動は、凡てフランス全體の利益と共通の幸福に從屬されねばならぬ。何となれば、フランスは今後、生産と交易とを組合主義組織に統一し、以て非團體的組織と不合理なる組織によつて生じた現在の經濟的混亂に終止符を打たねばならなくなつてゐるからである。」

この宣言の實行こそは、佛國をして起死回生し、祖國を保全せしむる處置である。

又、佛國はフランダース戰線に於ける英軍の狡猾なる行動、英佛合體の主權無視の提議、即ち英國の屬國扱ひに憤慨し、更にオラン港に於ける英艦隊の襲擊により、佛海軍が一千餘名の損失を招來したる暴行等々に鑑み、佛國内に俄然反英思想勃發して英國を敵視するに至り、昨の聯盟は今や全く敵國と化し、將來、獨伊西三國との協調を辿り、こゝに英國と分離したるは、素より當然の處置と云はねばならぬ。

之と關聯して更に注意すべきは、佛領印度支那の態度である。同地は過去三年間に亙り援蔣ルートの一要地として、英國と共同して蔣政權援助に努め來れるが、今や本國の降服に顧みて我が皇國の要求に應じ、援蔣ルートたるを全面的に禁止するに至つた。惟ふに將來同地を保持するには、我日本と協力し政治經濟及軍事に於て相提携するが大得策なるを悟るであらう。兎に角、佛國が大死一番以て更生の氣勢を示したるは洵に祝着の至りである。

蘭領印度に就ては疾く有田外相の聲明あり、和蘭政府も之を諒解する所あつたが、和蘭本國が獨逸に降服したるがため、之が處理の鍵を握るものは獨逸となつた。依て有田外相は六月二十九日、南洋を含む東亞の安定圏を說き、共存共榮が自然の運命にて、歐米の容喙を許さゞる旨を放送によつて聲明するに至つた。中に云く、

東亞の諸國と南洋諸地方とは地理的にも、歷史的にも、民族的にもはたまた經濟的にも極めて密接なる關係にありまして、互に相倚り相扶け有無相通じて共存共榮の實を擧げ以て平和と繁榮とを增進すべき自然の運命を有するのであります、故に之等の地域を一括して共存の關係に立つ一分量と爲し、その安定を圏ることが當然の歸結と思はれるのであります、斯くの如く部分的に公正なる平和を建設し、之を集大成して世界全般の公正なる平和を建設せんとする考へは歐米諸國に於ても存するのであります、而して此の思想は夫々の分野に於ける安定勢力を豫想するものでありまして、斯る勢力を中心と致しまして其の分野内に於ける諸民族が共存共榮と安定とを確保すると同時に、各分野は他の分野の政治的文化的及び經濟的特色を尊重し有無相通じ、而も互に相侵さず協力することを以て其の内容とするものであります。

今次歐洲戰爭が勃發致しまするや、帝國政府は不介入の方針を闡明し、歐洲戰爭に介入せざると共に

戰禍の東亞方面に波及するを欲せざることを明かに致しましたが、自然帝國としては歐米諸國が東亞方面の安定に好ましからざる影響を及ぼすが如き事なきを期待するものであります、今や帝國は東亞新秩序の建設に邁進して居りますと共に、今次歐洲戰爭の成行特に南洋を含む東亞の諸地域に及ぼす影響については、常に深甚なる注意を拂ひつつあるものでありまして、此等諸地方につき齎らさるることあるべき運命に對しましては、東亞の安定勢力たる帝國の使命と責任とに顧みまして重大なる關心を有するものであることを言明しておきます。」

斯の如く、獨逸の建設せんとする歐洲新秩序と日本の建設せんとする東亞新秩序の輪廓の一端は既に示唆された。そして米國の秩序は合衆國主となりて南米を含み、更に蘇聯は大露西亞を中心として成り、玆に世界に四大新秩序圏の成立が期待される。さらば英國を中心とする新秩序圏は之を何處に求むべき乎。トロツキーは曾て『英國は何處へ行く』(一九二六年) Where is Britain going? を書いて揶揄する所あり、アンドレ・ジイグフリイドは『英國の危機』(一九三一年)を書いて警告する所あつた、今や果して如何。

四、米國の軍備大擴張

白・蘭・佛三國の降服による處理のみにても無數に上るが、更に英國が敗亡した曉を想察すれば複雜多岐にて、全く世界史的一大轉換である。印度・馬來半嶋・ビルマ・香港を始め南洋に於ける英領諸地方の運命は果して如何。地中海が獨伊樞軸側の內海となれば、英國は南阿を廻り印度洋より極東及南洋方面に出づるのであるが、それ迄には東亞の新秩序も略々成り、東亞と南洋を含める東亞共榮圏が强化され、印度の獨立・馬來半嶋の分離等も漸次擡頭する氣運とならう。

玆に援英國として、飽く迄も日本制壓に全力を集注せんとするのは米國である。米國は現在は勿論、將來に於ても日本の壓迫に腐心する。獨逸が歐洲を制覇して、英國が劣弱となつた曉、米國は歐洲に容喙する力はない。現に今次とても武器提供以上の同情を寄せてゐない。第一次歐洲大戰當時のデモクラシー擁護の看板は空しく下ろされた。「世界一」を期して大々的に擴張する海軍・空軍の向け所は何れの方面にあるの乎。ルーズヴェルト米大統領は更に陸海軍大擴張のため、一九四〇年七月十日議會に對し總額四十八億四千八百萬ドル(邦貨約二百四億圓)に達する支出を要請したが、該豫算を要請するに當り、米國は軍備を侵略的に使用せず、且つ戰爭するためには米國軍を再び海外に派遣せず、米國乃至西半球の侵略

に對してのみ使用すべしとの誓約を添え、海軍に就ては、敵性海軍の如何なる結束にも對處し得るだけの海軍擴張を繼續すると云ひ、太平洋及大西洋同時作戰に備へ得る大艦隊完成の目標、即ち世界制覇たるを示してゐる。現下は東亞に於ける英國の番犬なるが、近き將來に於ては英國に代らうとしてゐる。又米國は蘇聯と聯合する可能性あれば、我は陸に於ては蘇聯より、海に於ては米國よりの來襲を阻止する丈けの國防力を充實せねばならぬ。又東亞新秩序の建設を完遂すると共に東京—伯林—羅馬の樞軸を密接にし、同盟國たる段階にまで强化すべきである。

蘇聯の對日態度は未だ良好でない。一九三九年（昭和十四年秋）獨逸が蘇聯と提携するや我邦に於ては防共協定國たる獨逸が、その敵視する蘇聯と提携せるを怪しみ、國際政局の複雜怪奇に驚けるが、獨逸のそれは蘇聯の英佛と聯合するを阻止する趣旨に出てたのであり、蘇聯亦英獨兩國を戰はしめ、その間に漁夫の利を獲んとの肚であつた。見よ、一旦開戰となるや、ポーランドの大部を占取し、西部戰線活氣を呈せる虚に乘じてバルチック沿岸三國と協定し、芬蘭を襲ひ近くはルーマニアに侵入して、ベッサラビアその他を奪ひ、更にハンガリ、トルコ、イラン等に對する要求多々益々多からんとする。ヒットラー總統は豫め之を知らざるに非るも、英本土の攻擊を終らざる間は、暫らく看過し去るものと見られる。蘇聯は芬蘭戰に見る如く、素より獨逸の敵ではなく、獨逸の脅威に只管戰慄するものである。獨逸も英國を攻擊する間は之を默し、蘇聯も獨逸の對英戰中、出來る限り領土を擴大して他日に備へやうとする肚であらう。されば獨逸が蘇聯と清算する機會は、英國を打倒した後到來すると見るが妥當である。この際我國としては一刻も早く親英主義の無意義を悟り、且つ米國及蘇聯の敵性を吟味して、是非とも獨伊兩國との樞軸を强化すべきである。（註、本稿發表二ケ月の後、日獨伊三國同盟成立を見た）

五、世界四大新秩序圏

叙上の如く西歐・北歐・南歐は勿論、地中海沿岸及バルカン半嶋に亘る廣汎の平和は獨・伊・佛・西等の鞏固なる同盟により、英國を完全に抑壓し得た曉に於て始めて歐洲大陸の惱みは解除される。又、東亞及南洋を含む平和は、日滿支ブロックの完遂によりて維持せられる。更に西半球の南北兩米は北米合衆國によりて、東歐の聯邦は大露西亞によりて維持せらるべき氣運を造りつゝあるが、この四大新秩序圏の建設こそは、將來世界の平和を齎らす機

構とならう。之は數世紀に亘れる英國の横暴と獨占的優越の地位に立ちて、殆ど世界征服の暴威を發揮しつゝある現狀打破の行動に基くので、事實上英國の崩壞が、世界新秩序を招致する要因となるのである。

歐洲の新秩序にして成立すれば、米國は殘存せる英國と合體して太平洋に海軍力を集中し、以て我邦を牽制し、支那・印度・蘭印・佛印等の保全といふ美名下に、日本に對し直接脅威を感ぜしむる可能性がある。何れにしても、米國にして東亞の共榮圏を認め、且つ歐洲より手を引くやうに東亞及南洋よりも引退して、米國自體のモンロー主義を守らざる限り、遺憾ながら平和は東亞に來らない。米國今日の對日壓迫策の如く愚なるものはない。

蘇聯は領土として廣大無邊の地域を有しながら、尙ほ世界赤化を企圖して益々獲得慾を發揮しつゝある。その領土の面積・人口の數量・自然資源及國民生活資料等より推せば、最早足るを知りて然るべく、殆ど侵略の要なきに似たるも、事實はその底止する所を知らない。蓋し蘇聯は大敗戰しない限り戰爭勃發の禍因は玆に伏在してゐる。

斯く見來れば日獨伊三國は共に、尙ほ戰禍を免れぬ事態に置かれてある。而かも歐洲の戰亂は案外早く休止の傾向あるに反し、東亞と太平洋方面は、自今益々險惡となる氣配にあるから、我が國民は一層の緊張と覺悟を要するのである。

六、獨逸戰勝の意義

一國家が一國家を相手とする戰爭ならば、歐米諸國のうち、獨逸に對抗し得る國は一つもない。第一次歐洲大戰は五ヶ年に亘れるが、その間獨逸は自國の領土內に一人の敵兵をも侵入せしめず、世界各國を相手として戰つたのであつた。今次は諸・丁・白・蘭及英佛聯合軍と戰ひ、月餘にして之を降服せしめ、餘す所は唯一の英國のみとなつた。假令米國よりの武器輸送あり、直接間接の援助ありとも英國の打倒近きは、既に世界の常識となつて來た。蘇聯は十數の聯邦より成り兵力亦多數を算するも、之れまた獨逸の敵ではない。

又東亞に於ける無敵軍は言ふまでもなく日本の皇軍である。蔣政權軍は過去滿三年間英・佛・蘇・米四ヶ國より來る援助の下に戰ひつゝあるので、單に蔣軍のみの實力ならば疾く平定し去つたのである。彼等援蔣四ヶ國は、或は借款或は武器輸送を以て、今日まで間斷なく援助し、瀕死の蔣政權軍を維持せしめたのであるから、皇軍は是等の五ヶ國と戰爭してゐる事態である。彼等は蔣軍を援助する代償として利權を獲得し、東亞の天地を植民地化せんと

するのである。最近佛國は我が要求に應じて佛印の援蔣ルートを禁輸したが英・米の二國は尙ほ依然之を繼續してゐる。國民は是等の敵性を永久に記憶して之を忘るべきでない。

重慶政府の最期が近づきつゝあることは、周知の通りなるが、今日まで我等が臥薪嘗膽、巨額の負擔を重ね、無數の犧牲を拂ひ、生活の脅威を忍ぶ所以のものは、皆なこれ英・米、その他の敵性に出づるものであつて敵は蔣政權の一團でなく、是等敵性の責めである。今盟邦獨逸は迅速果敢、四邊の敵を降服せしめ、數世紀に亘り惡德罪業を重ねて、世界征服を企圖せる首腦英國の打倒に邁進しつゝある。獨逸の戰勝は幾億に上る世界被征服民族の渴仰期待する所となつて來たのは當然のことである。

七、スターリンの勝利

獨英兩國の一騎打に於て英國の敗亡となることは、聊か疑ふの餘地がない。唯だ問題として殘るは米國と蘇聯の動向である。英國は今や年貢の納め時、多年に亘れる惡業の淸算期となつた。米國には孤立主義の不參戰派もあるが、英國の敗北は米國の危機なれば、積極的に參加して獨逸と戰へとの意見も擡頭してゐる。由來ルーズヴェルド大統領の取卷連には、猶太系多數を占め、參戰派の中堅を爲してゐるが、勝味なき戰爭に加はる愚擧は敢てしまい。又蘇聯は獨逸の絕對勝利を以て他日の脅威と認めてゐるがその進度如何は、一に獨對英戰の情勢によるので、對英戰が早く獨伊側に有利に展開すれば、蘇聯も差控へるに至るべく、之に反して萬一にも米國參戰の如き不利の事情生じ、自ら長期に亘る傾向ともなれば、從來の如く露骨に進出して止まぬであらう。現に英本土上陸戰が目睫の間に迫ると同時に、蘇聯はイラン及土耳古に對して領土割讓を要求し、バルチック沿岸三國の併合運動に從ふといふ惡辣振りである。玆に於て想ひ出でらることは、次のパズルで、歐洲人の間に流行してゐたものである。

これは「ムッソリーニ、ヒットラー、チェンバレン、ダラヂエのうち誰が勝つか」といふ意味の英語だが、さて解答は、左から三番目のローマ字を縱に讀めば、一目瞭然「スターリン」と出て來るといふのである。

MU S SOLINI
HI T LER
CH A MBERLAIN
DA L ADIER
WH I CH
WI N?

今日はチェンバレンの代りにチャーチルが英首相となり、ダラヂエの代りにレイノー、最近はペタンが佛首相となつてゐるが、兎に角、スターリン勝利の豫言は當に適中した觀があ

る。そして濡手で粟を掴かむ機會が去れば、恐らく將來に於て潜行的内部攪亂の手法に出づるであらう。

八、英國の決定的敗戰

英國が早晩崩壞して小弱國に墮すとの豫想は、時期の問題となり、到るところ反英排英氣運の熾烈となれるは全く世界的形勢といふを妨げない。第一次大戰以來、相提携し來れる佛國も、今や英國を敵として獨伊軍に參加し、その打倒に盡す情勢も見える。之は今次の戰線に於て佛軍の敗北せる一因は、英軍の狡猾と不誠意にありとし、且つ海賊的本性を表はしオラン港に於て英艦が佛艦隊を擊沈して、千餘の生命を失はしめたこと等々に原因するが、英國の不正不義は今更の談でない。

又懸け聲のみにて實際援助の約を果されずに敗亡した波蘭を始め、東歐及バルカン半嶋諸國は、最早英國の信賴するに足らざるを知つて、獨伊側に依存する形勢となり、今や歐洲方面に於て英國に味方する國は地を掃つて消失し去つた。地中海方面には伊太利・西班牙あり、ジブラルタル海峽とスエズ運河は、近く獨伊樞軸の掌裡に收められんとする形勢にあり、

埃及にも反英の氣運が高まつて來た。又印度の獨立運動は今更のことでないが、この機會を逸しまじとする獨立要求が燃ゆるが如く興つてゐる。ビルマは援蔣ルートとして、我が要求を拒否せる處なるが、ビルマ人は獨立を叫び反英熱が現に興起してゐる。更に南阿弗利加聯邦は、ボーアと稱する舊和蘭系の農民多數を占め、一九〇〇年南阿戰爭によつて征服されて以來、常に反英思想を懷けるが、時宜によりては獨立を叫ぶ氣勢がある。唯だ是等諸地方は未だ徹底的反抗を敢てする丈けの要素を缺き、その獨立は容易に期待し難いが、英本國の衰頽するに隨ひ、夫々獨立を助長する勢力が發展するから、必ずしも夢想を以て目すべきでない。何れにしても被征服民族として、過去幾世紀に亘りて壓迫され搾取された幾億の住民は、一意專念日獨伊三國の勝利を祈り、彼等の自由解放を期待する光景が偲ばれる。斯く反英排英の世界的氣運を助長したのは、一に日獨伊の恩惠と云はねばならぬ。

支那事變勃發以來、英國は今日に至るまで援蔣行動を以て一貫してゐる。先きに我邦にも反英排英の氣運高まつたのであつたが、依然迷想的親英恐米病者殘存して、容易に之を脫却せざるは遺憾の極みである。しかし民間の輿論も大に革まりて、日獨伊樞軸强化の叫聲高まり、外交の轉換は政府部内にも起り、單に時期の問題となつた。日獨伊樞軸の强化は、數年

來特に昭和十四年はその高潮に達したのであつたが、獨蘇同盟の眞義を未だ看破し得なかつたため、呆然その爲す所を知らず、徒らに不介入の原則を建前として、稍々傍系に立つ如き傾向を示したのである。然るに獨逸軍は白・蘭・佛を降服せしめ、地中海には伊軍の活躍あり、その影響の東亞及南洋に及ぼす所多大となるや、悠長なる當局も漸く覺醒するに至つたのである。しかし今からでも遲くはない、場合によりては、太平洋上に大波瀾が起らないとも限らぬ。見よ、米國艦隊は布哇に集結して去らず、香港・新嘉坡より蘭印に亘り、英米は意表に出づるものなきを保せぬ事態にあれば、支那事變同樣、千載一遇の大事變に會するやも測られない。この際、如何に不明の當局者と雖も外交を轉換し、日獨伊樞軸の强化を圖るの緊急を覺らずには居れぬ筈である。

佛國は既に佛領印度支那に於て誠意を示したれば、今更追究の要ない。殘るは猶太的な英・米・蘇の三國で何れも猶太財閥の資本下に踊つてゐる國々である。彼等の東亞に對する野心を挫きて、その脅威を除くためには、斷然外交の轉換を圖り、如今澎湃として起りつゝある擧國一致の新體制を整ひ、以て東亞の新秩序を完遂し、併せて世界新秩序の建設に資する所なければならぬのである。（昭和一五・七・七）

（註、昭和十五年九月、日獨伊三國同盟條約協定あり、昭和十六年四月、日蘇中立條約成立し、之と同時に獨伊兩軍はバルカン半島に於けるユーゴー・希・英の聯合軍を破り、遂に全半島を制壓するに至つた。校正の際追記）

（註、昭和十六年六月二十一日、獨逸は蘇・英兩國共同の陰謀あるを看破し、蘇聯に對して宣戰を布告し、古今未曾有の延長せる戰線に於て激戰を交ゆるに至り、玆に英・米・蘇の合作を現じ、第二次世界大戰に邁進するに至つた、校正の際追記）

六、新經濟秩序と金本位の崩落

一、金を基礎とせぬ經濟組織

獨逸は豫ねてより將來一種の歐洲聯盟的經濟圏を造り、現在の金本位制に代るべき新幣制を布く運びとなるべき旨を示唆する所あつたが、同盟通信（ベルリン昭和十五年七月二十五日發）の報ずる所によれば「歐洲戰爭終局後のドイツ及び歐洲經濟體制再建計畫につき、豫てゲーリング元帥の命を帶びて研究中であつた、獨逸經濟相ワルター・フンク博士は、二十五日内外記者團を引見して研究の成果を發表、歐洲經濟體制の「新秩序」の内容を初めて正確に表明して注目を惹いた。フンク經濟相の「新秩序」は、歐洲に於て全體主義的經濟體制に基き、經濟的歐洲圏を結成、「金」を基礎とする經濟組織を驅逐すること、この新歐洲圏を基礎に、北米・南米・東亞等、各經濟圏と有無相通ずることの兩點を骨子とするものであつて、その要旨は左の如くである。

一、戰爭終了後は全歐洲に對しドイツが戰前及び戰爭中、大成功を收め得た經濟政策と同一の政策を適用する。

二、「ライヒス・マルク」は歐洲に於ける支配的通貨となるであらう、しかしこのことは吾々が今後完全に自由な通貨制度、或は爲替制度を樹立したり、或は通貨同盟乃至關稅同盟を結成することを意味してゐない、而して今後「金」は歐洲通貨の基礎たることを止めるであらう。吾々は如何なる意味に於ても「金」に依存する通貨政策を執ることはない。

三、新歐洲經濟秩序は歐洲諸國民經濟の自然的要件を基礎とし、獨伊兩國の樞軸を中心として結成される筈である。

四、右「歐洲經濟圏」は自給自足的なものでなく、世界の他の經濟圏に對し有無相通ずるの關係に立つものである。

五、北米と「歐洲經濟圏」との貿易關係が如何程緊密の關係に立ち至るかは、全く米國側の出方如何に懸つてゐる。卽ち米國が世界經濟に寄與せんとすれば、世界最大の債權國たると同時に最大の輸出國たらんとする誤れる方策を放棄すべきである。

六、米國は南米から歐洲が買ひ付けるだけの生産品を買ふことは出來ない、從つて米洲を世

界經濟から切り離さんとする米國の企圖は失敗すること間違ひない。

七、ドイツは南米との貿易に於て北米の仲介を排擊する、南米諸國の獨立した主權と協定を結ぶのでなければドイツは對南米貿易を斷念するであらう。

八、東亞に於ても英國の海賊行爲が終熄し次第、新貿易關係に有利な條件が展開するであらう。

九、かくて新歐洲經濟聯合は、國際經濟裡に於ける他の經濟圏との關係について、歐洲の利益をよりよく代表することになるであらう。

一〇、今吾々が準備しつゝある來るべき經濟體制に於ては、ドイツは最大の經濟的保證を確保しなければならず、ドイツ國民は消費價の最大量を供給され、より高い生活水準を保證されるであらう。

右の計畫の前途には、種々の障碍横はることは明かなるも、又實現の可能性あり、筆者はその成功を祈つて止まぬものである。

二、幣制推移の一瞥

斯問題は多岐に亘り議すべき事項少からぬが、先づ現在の幣制を生じた過程の一瞥より始めよう。太古の未開時代、人口稀薄にて隨所小部落の生活を營める際は、自足自給經濟を主とせるが、人口增加し居住地域擴大するに隨ひ、甲部落に有つて乙部落に無く、又他村に無くて自村に有る物が生じた。その都度、互に往來して各自の需給を充たす煩累を避くるため、一定の時日を期し、相持寄つて物と物とを交換し又は賣買することになつて定期の市場が出來た。今尙ほ地方に見られる市日を冠せる町名、一日町・二日町・三日町・八日町・十日町等はその名殘りである。相互に貨物を持寄ることは需給上種々の不便があるので、遂に直接物と物とを交換せずに、各自の欲する物を買ひ得る媒介物を使用することとなつた。單に交換の媒介物なれば、その石たると貝殼たると稻束たるとを問はぬのであつたが、成るべくは携帶に便利で、貯藏し易きものが使用され、腐敗し死滅する如き種類は漸次消失し去つた。それで石や貝殼は相當永く使用されたが、更に便利な鐵・銅・銀等が使用され、最後に今日の「金」が使用せらるゝに至つたのである。が、「金」の直接取引は危險が伴ふから、「金」を保證として兌換券卽ち紙幣を發行して通貨とした。之が今日の金本位制である。

日支兩國人が現在讀み書きに使用する漢字に就て見れば、往時支那に於て貝殼(かうがい)が貨幣とし

て長く使用せられたことが判かる。金錢や資産の關係を始め貴賤貧富の社會的階級より、吉凶禍福や倫理道德の關係に至るまで、經濟を基礎として表示されたことを立證してゐる。卽ち古代支那の貨幣は金銀銅鐵でなく、貝殼であつたから、凡て「金」扁でなく、「貝」字から成つてゐるのである。

試みに見よ、財、貨、價、貢、資、賦、寶、賣、買、販、貧、貪、負、賞、貴、賤、貯、貸、貰、貿、購、賄、賂、賭、賜、贋、贊、賠、贓、貞、費、貶、贈、賊、賃、賑、賀、質、贐、贖、債等を始め、「貝」字を中心に造られた文字が多數で、何れも經濟・社會・道德關係を意味する場合に使用してゐる。支那の文字は形象に取り、又それを組合して造られたもので、貝を小さく分ければ少なく、貧しくなるから、貝を分つが「貧」であり、貝の乏しい者は退けられるので「貶」となり、變化反易する物なりとて「貨」となす如く、字解すれば皆貝を中心として造られてゐるのである。この貝殼が貨幣として使用されたのは、獨り支那ばかりでなく他の民俗にも例がある。石も亦各方面で使用された。要するに貨幣は交換の媒介で信用がその基礎となつてゐるのである。

しかし携帶に便利であつて何人も愛用し、且つ貴重されるものが殘存し、現時に至るまで

繼續したのは黃金である。鐵は疾く廢され、銀・銅・白銅等は補助貨となり結局「金」が本位となり文化國民の貨幣となつた。尤も金の貴きことは、古代埃及時代からのことで、別に新らしい現象ではない。

現代の金融資本は「金」となつたから、金（通貨）さへあれば何でも買はれ、特に外國との取引は「金」を以てする常態にあれば、「金持になりたい」「金さへあれば何事でも爲せる」、「人間萬事金の世の中」、「地獄の沙汰も金次第」と云はれ、金があれば生涯安樂に暮されるので、金權は一切を超越した。富國とは金を多く貯藏する國、富豪とは金を多く蓄積する人、人間は金を儲けるために働く、金があれば生きながら、極樂淨土に住へると云つてゐる。

拜金思想は世界的形勢にて、一民族一國家に限つてゐない。愛金は現代の通念となつて除外例がないとも云はれる。しかし歐洲の中世期は宗教關係より金錢慾を戒め、我が武家時代別けて舊幕府時代は、士農工商の階級別を立て、金儲けに沒頭する町人を輕蔑した。之は金錢慾を戒めたのであるが、世界經濟海外貿易によつて有無相通ずる時代となつてからは、世界を擧げて金融資本を重視し、何人も經濟至上主義を奉ずる勢となつた。今や一國の生死も

「金」によつて支配せらるゝ時代である。戰爭するにも石油・ガソリン・鐵屑等を要するが、それが國内に産出せぬ場合は之を外國より輸入するを要し、その代金は凡て「金」を以て支拂はねばならぬ。ために「金を政府に總動員」と云つて、全國民所有の「金」を動員する。苟も金細工なれば時計・簪・指環・眼鏡・入齒・金盃等、その種類の何たるを問はず、之を買上げて金塊とし、以て外國との貿易尻を決濟する。これがために輸出が奬勵され、之に反して、軍需品以外の輸入は極力防止される、これ一に「金」を得る手段である。往古の支那に於ては一にも貝、二にも貝、三にも貝であつたやうに、今日の世界は一にも「金」、二にも「金」、三にも「金」である。然るに獨逸はこの金塊を通貨の根底とせざる幣制を實現すると聲明した。正にこれ青天の霹靂で、驚天動地の新計畫といふべく、しかも奇蹟ではなく、斷じて行へば鬼神も避ける可能性があるのである。

三、主要國の金保有高

抑々世界が斯くも「金」を重視するに至つたのは、各文化列强を擧げて金本位の幣制を布き、之が唯一の貨幣として世界的に通用される制度となつたからである。金を多く所持すれば富力權力を掌握され、金權の勢力は一切萬事を左右する時勢であれば、金の所有高の多少が、貧富貴賤强弱を區別する標準となつたのである。しかも、世には持てる人と持たぬ人のあるが如く、持てる國と持たぬ國とがある。第一次世界大戰前後に於て、主要國の中央銀行及國庫並に其の他銀行に於ける金保有高は大略左の如くであつた。（單位百萬ドル）

	一九一三年末	一九三〇年末
佛蘭西	一、七〇〇百萬ドル	二、〇九九百萬ドル
獨逸	九九五	五四四
英吉利	七七〇	七三〇
北米合衆國	一、九二四	四、五九三
南米諸國	四二〇	五六四
日本	八六	四一二
合計	八、六二九	一一、五四六

備考、下段一九三〇年の世界合計には亞細亞、阿弗利加、特に印度及埃及の金貨は除外されてゐる。

見よ、世界一の金保有高の最も多きは北米合衆國にて、佛國は第二位、英國は第三位にあ

る。最近は形勢一變して、北米合衆國は世界金總額三百四十億ドルの內、百八十億ドルの金を保有しケンタッキーの山奧に貯藏されてゐる。卽ち世界の「金」は今や殆ど米國に集中して、他の列强は僅かに一半內外を分有する事態にある。而してこの「金」の大部分は米國の金融界を支配する猶太財閥の占有に屬することを知らねばならぬ。米國は單に經濟界のみならず、通信・交通・出版を始め政治に至るまで猶太人の支配下にあり、現米國藏相モーゲンソーは猶太人にして米國の猶太財閥を代表する人である。前揭フンク獨逸經濟相の歐洲經濟新秩序に關する聲明發表さるゝや、米國に大衝擊を與へ、官邊ではモーゲンソー藏相の「世界貿易の存在する限り金は決して排除されない」との言を引用して、これに應へてゐる。

卽ち現在金本位制時代に於て、米國が世界の「金」の大部分を自國に集中し、その所有者が猶太財閥である事實と、歐洲經濟の新秩序として獨逸が計畫する所は、金塊を通貨の根柢とせず、貨幣は第二義的で經濟指導が第一義的のものとするのであることとは、大に研究の要ある所以である。兎に角、世界の金は猶太人の支配下にある米國に集中され、世界一の金所有者となつて、二百億ドルに上る軍備擴張費も瞬く間に議會を通過し、太平洋及大西洋を同時に作戰制覇する策謀を懷き、着々世界支配を企圖する事態にある。昭和十五年八月五日メキシコ發同盟通信は、メキシコに亡命中のトロツキーは、新聞記者團との會見に於て、今次大戰終了後の情勢を豫言し、米國の對日獨決戰は不可避であらうと、左の如く述べたと報じた。

「米國は干戈を交へることなくしてカナダ・濠洲・ニュージランド及ラテン・アメリカ一部等、英領の合法的繼承者となるであらう。その後において日獨兩國との決戰は不可避とならう、結局は戰爭の影響によつて未曾有の軍擴計畫を促進せしめられた結果、好むと好まざるとに拘らず、世界史上最大の帝國主義的國家となつてしまふであらう」

豫言は名詮自性、豫言に過ぎないが、刻下の情勢上斯く見るのが一般の常識であつて、獨りトロツキーに限つてゐないやうに思ふ。米國現在の敵性は、何人にも斯く豫測せしむるものがある。フンク獨經濟相の計畫に對しても米國の妨害は必至の勢である。そは博士は、北米が南米市場を獨占すること及貿易政策の橫暴なることを責め、最大の債權國であると同時に最大の輸出國であることを止めねばならぬことを力說するに對し、米國は之を肯ぜぬに徵しても明かである。この意義よりするも、金塊は將來の歐洲の通貨の根柢を爲さずとしての計畫は、頗る興味多き問題である。

四、ルーテル及シャハト兩博士の功績

フンク獨逸經濟相のこの計畫は、必ずしも創見でなく、前經濟相ヤルマー・シャハト博士が、曾てその趣旨を國内に實施して成功し、ヒートラー總統も亦、疾く聲明したる所あるので、獨逸近時の幣制イデオロギーの傳統であると云へる。フンク博士は現在責任の地位に立ち、之が全面的實行の責に與かる代表者として重きを爲してゐるのである。先づ前任者シャハト博士の場合を語らう。

第一次世界大戰當時、獨逸政府は戰勝を確信する所より、巨額の戰費支出を增稅に據る所少なく、主として公債發行手段に據る所あつた。勿論他日戰時利得稅及賣上純益稅の如き所得資源を見出し、漸次稅率を增したが、直接徵稅によりては僅かに戰費の約五パーセントを運用したに過ぎないから、一九一八年の休戰當時の通貨は、一九一三年の開戰當時に比して五倍の額に達し、休戰の年末に於て、「マルク」は額面の半額の相場が建てられてゐた程度にて、獨逸の財政は依然信用を維持してゐたのであつたが、通貨の膨脹に比例して物價が騰貴し始め、戰時中の最高價格制限は全く無效となり、「金」は戰時中、物資供給の支拂用として中立諸國に送られたため、「金」の大不足を來し、戰時に於ける貿易差額は百二十億ドルを算せることが判明した。之より國内の全經濟界は亂脈となり、唯だ不換紙幣發行に賴つて生活必需品を得ることとなつたため、異常の通貨膨脹、所謂惡性インフレイシヨンとなり、一九二二年末の如き、米貨との換算は一ドルが七千マルクの相場となつた。

爾來逐日通貨の價値は失墜し、翌二三年六月初め頃、米貨一ドルに對し十六萬マルクの相場を示せるが、同月末には一ドルに對し百萬マルクといふ暴落を來した。當時獨逸帝國銀行は紙幣を造る紙・印刷・運搬等の監督者のみにても無慮二千人を使用し、三千の製紙工場と百三十三の印刷所と一千七百八十三臺の印刷機とは、莫大なる紙幣の需要に應ずべく、不眠不休の劇務に忙殺された。二三年十一月半頃はベルリンに於て米貨一ドルに對し、一兆マルクの建値となり、牛乳一罎（四分の一ガロン、我が六合三勺）の賣價は實に二千五百億マルクとなつた。この價を以てしても、品拂底にて容易に購入し得ないといふ事態であつた。斯くて經濟界の破滅に陷り、國家崩壞の危險に瀕し、國民生活は飢餓に直面した。依て政府は二三年九月戒嚴令を布き、十月最後の手段として、新通貨及新紙幣發行、銀行創立、豫算の均衡保持、產業の復活等を企圖した。斯の奇蹟的計畫を遂ぐるに與つたのは、當時の藏相ハ

ンス・ルーテル博士と帝國銀行總裁にして、特に通貨委員會を創立せるヤルマー・シャハト博士であつた。

その實施された大英斷に就て、玆に詳述することは紙幅が容さないが、要は無價値の紙幣印刷を停止し、特殊大藏銀行は一九二三年十一月十五日を以て開始された。この銀行は戰前の金マルクと同價値を持つ「レンテンマルク」と稱する新規な暫定的通貨を發行した。保證金は事實上空虛な抵當卽ち獨逸の農業及工業の富によりて準備された。斯くて三十二億マルク發行され、この「レンテンマルク」一に對し一兆の割合で流通した。之は「無……卽ち人民の信用によりて安定を保つ通貨」より創造されたのであつた。それより豫算緊縮として官公吏俸給の引下げ、吏員の淘汰解雇・一時の支拂停止・各稅率の引上げ・新家賃稅を課する等、種々畫策の後、漸次經濟的恢復に向つたのである。

一九三三年ヒットラー內閣成立して、形勢一變するに至つたが、シャハト博士は引續き獨逸經濟相兼獨逸帝國銀行總裁として努力し、經濟の革新に貢獻する所實に多大である。博士は一九三五年三月ライプチヒに於て、經濟政策に就て講演せるが、說を爲して曰く、

「經濟政策と申しますのは、科學ではなくして一の技術であります。この技術は靈魂と信念の獻身及意志の上に建つて居ります。彼の經濟學の精確な方法とか、一定不變の經濟法則など申すことは一の誤つた敎理に過ぎません。經濟政策の指導者は、一見不可能らしきものを、可能ならしめねばならぬのです」

この言は博士が錬達せる政治家であつて腐儒でないことを立證して餘りある。ナチス獨逸の經濟革新に多大の貢獻ある、又故あるかなと云はねばならない。現フンク經濟相はこのシャハト博士の繼承者にして師弟の間柄、その將來計畫の可能は些の疑を容れない所である。

五、ヒットラー總統の幣制演說

又ヒットラー總統は、一九三九年一月三日の國會に於て貨幣制度に就て演說されたが、之は將に實施されんとする新經濟秩序の一端に觸れたものである。（一九三九年四月一日刊「ワールド・サーヴィス」誌掲載）その要旨次の如し。

「我々は今日經濟學者が最も眞面目に、「通貨の價値は國立銀行地階の鋼鐵倉庫の中に貯藏されてある準備金と、外國爲替とに支持され、就中、通貨はこの正貨準備によつて保證されてゐるのである」と考へてゐた時代に對し哄笑を禁じ得ない。我々はその反對に「通

貨の價値は國民の生産力に存し、生産の增加は通貨を維持し、時には一産の通貨の値をも回復させることが出來る。然し反對に生産物の減少こそは、早晩一國平價の切下げを餘儀なくするのである」ことを知り得たのである。

まことに、他の諸國の金融、經濟の理論家達が、獨逸は三ケ月乃至六ケ月のうちに破産するであらうと豫言したに拘らず、我がナチス獨逸國は、非常狀態の下にあつてよく生産を增加し、この生産增加に依つて通貨の價値を安定させ得たのである。

增加の一路を辿る生産と通貨との間には、かくて自然的な關聯が打建てられた。賃銀の安定から必然に又物價の安定が生じた。過去六ケ年間に國民所得の漸增は、生産の漸增と並行線を描いて來たのである。又、約七百萬の失業者が賃銀を得るやうになつたのみならず、彼等はこの收入によつて優に必要な生計を立て得るに至り、勞働の代償として支拂はれる個々の賃銀は、國民生産の換金價値が不斷に高まり行くのにつれて增加されたのである。ところが他の諸國では、その反對が行はれてゐる。生産が減ずる一方、賃銀を引上げることによつて國民の所得を增してゐるが、これでは金錢の購買力が減じて、結局通貨の價格に低下を來たさずにはおかないことになる。獨逸の遣り方が不人氣なものであることは自分も認める。何故ならばこの遣り口では、賃銀の引上げが生産の增加を俟つてのみなされ、隨つて、先づ第一に生産の確保がなされ、賃銀增加は第二にされるからである。換言すれば、この國の經濟界に七百萬の失業者が現はれてゐると云ふ事は、先づ第一に賃銀、給料の「單に職を得させると云ふ」問題としてゞなく、純然たる生産の問題として考へられ、この考のもとにこそ、對策は講ぜられたのである。獨逸の勞働者が一人殘らず職を得るに至つたなら、その時こそ初めて、能率强化とか技術の高度化と云ふやうな追加的手段にもとづく勞働成果の增加が見られるに至り、將來に於ける此等の逐進的生産增加は、やがて遂に一層激增した消費のために勞働者、技術家等々として生産界に働く者が一層多くなり、隨つて又賃銀給料の實際上の增加が見られるやうになるであらう。」

今次フンク獨逸經濟相の聲明せる所は、このヒットラー總統の演說の布衍とも見られ、前任シヤハト博士以來、獨逸近時の幣制イデオロギーの傳統である。獨逸が今次戰勝の結果として歐洲に經濟圏を造り之を弘布實施することは、既に經驗を積み牢固たる根據を有するもので、決して奇蹟ではないのである。

金權獨占主義と金本位制とは、幾多經濟史的事情の結果なるも、之が促進に與つた主要素

として猶太人の役割を看過すべきでない。彼等民族は亡命以來世界各地に散在せるが、到る所該民族の特徴たる金貸業を營み、金錢の蓄積を生命として種々劃策した。これが近代資本主義の發展を促進し、現存する經濟制度の構成に資する所あつた。斯くて彼等は歐米諸國に於ける金權を掌握する位地に進み、遂に國際猶太人・猶太財閥と稱嘆せらるゝに至つたのである。

ナチス獨逸はこの猶太人の勢力を排除し、玆に英・米・佛・蘇等の如く猶太財閥の支配下に立つことを免がれたが、更に金權力と金本位制を排除する計畫を建つるのは、一面より見れば、從來、永く猶太式經濟機構を踏襲したる現時の經濟社會觀を一新せんとするものである。金本位制は世界各列强を擧げて、現に踏襲する所なるが、之に依存する限り、猶太財閥の世界支配を免かるべき道はないのである。特に猶太人の支配下にある米國が、既述の如く世界の金の大部分を集積して金權獨占主義・金權帝國主義に沒頭する國なれば、是が非でも獨逸を敵視して止まぬ理由が解されるであらう。

日本に於ては近來自由主義・民主主義・社會主義の思想と之より結果せる制度文物を排除し、獨伊の全體主義的傾向を止揚する事態にある。勿論日本獨自の皇道主義に據り、特に國體・憲法等の根本義は他と比較を許さぬ所なるも、その傾向と趨勢とより見れば、英・米・佛等は自由民主の個人主義國にして我國とは異調であり、之に反して、獨伊兩國とはその主義に於て同調協和の趣きがある。近來續出する我が政治及經濟の新體制論議に徴すれば、思ひ半ばに過ぐるものがあらう。

日本の政界に於ては從來英國流を本尊としたる議會政治・政黨政治が國體に添はざるものとして、既存の政黨は今や擧げて解黨を見るに至つた。昭和十五年七月二十二日近衞新內閣成立の際、首相はラヂオ放送により既成政黨に言及して、

「その一は立憲の趣旨において自由主義・民主々義・或は社會主義を取つたことはその根本の世界觀・人生觀が我が國體と相容れぬ、これは急速に改變し、根本的に改正せねばならぬ。

その二は黨派結成の主要目的を政權の爭奪におくことで、かくの如きは立法府に於ける大政翼贊の道では斷じてない」

と云ひ、以て强力政治遂行を闡明された。既に解黨したる各政黨所屬の代議士等は大同團結して、一國一黨の趣きを貫徹するに努めつゝある。近衞首相は經濟體制に就ては、記者團と

の會見に於て、單に「今のまゝの經濟體制ではいかぬ、しかし新政治體制は經濟方面も當然含んでゐる、職能・産業・文化等各團體をどう扱つて行くか等の具體的なことは、今はつきりいへない」と答へられたに過ぎない。

目下民間には種々の希望や意見が行はれてゐるが、大勢は從來の如き英米佛の思想に依り自由主義・民主々義・社會主義等を基調とする體制を維持せんとするものは殆ど衰退し去つた。例之從來の利潤追求を改めて公益本位主義の唱道、卽ち滅私奉公の觀念を鼓吹するが如き、或は利益協同體より生活協同體に改善するを力說するが如き、又英米佛に於ては近來政治時代既に去つて、經濟時代來れりと說くものあるに反し、經濟は政治の手段であり、從つて經濟は政治に從屬し、政治に支配されるが故に、此際經濟至上主義を清算して政治至上主義を取るべきを主張するが如き、或は英國の特徵たる物質主義・功利主義を否定して精神主義・理想主義を唱道するが如き、更に經濟上從來英米依存を建前とせるが、現今に於ては最早その必要なきを以て、英米依存を斷然放棄すべしと力說するが如きもの、枚擧に遑ない。特に顯著なるは經濟と道德との密接なる關係に着眼して、經濟倫理の鼓吹が益〻熾なるを致し、利と義との調和を圖らんとする思潮は頗る注意を惹くに足る。要するに、我が新經濟體制は尙議論の時代であつて、未だ具體的に示現される運びとなつてゐないが、明治以來最近まで宣傳されて來た英米佛の政治・經濟思想及體制の淸算を叫ぶが常識となり、之に反して、獨伊流のそれと同調する情勢にあることは拒否し得ない。之は素より昨今の新現象ではなく、滿洲事變前後より既に顯著なる特徵となつてゐる。特に支那事變及今次の歐洲大戰以來、一層强化されたが、政治新體制論と同時に更に擡頭したと言へる。偶〻以て日本に於ける英米佛の思想が如何に衰頹に瀕しつつあるかを卜するに足らう。

しかも尙多くは抽象論にて、具體的に實現したるものは少ない。もし夫れ幣制に至つては片言隻句も之に觸れるものなく、金本位制を以て絕對永久制と信ずるが如き憾みがある。

六、金本位制の前途多難

眼前に橫はつてゐる支那事變處理、日滿支經濟ブロック建設、支那法幣始末等の上に於て對處すべきこと多々あるが、幣制改革はその主要なる一に屬する。現在の法幣によつて支那人の經濟生活が維持さるゝ限り、東亞の新經濟秩序は順調に進行しない運命にある。我等が英米依存主義を放棄し去つて、東亞モンロー主義を企圖するには、この金本位制を脫却する

底の覺悟を要する。獨逸は昨秋開戰當時金保有高は僅々二千九百萬ドルといふ世界一の最低國で彼が如く大飛躍を爲してゐる。他日或は戰敗國より巨額の賠償金を獲得し、之を保證として「マルク」通貨を發行して、歐洲全面に之を通用せしめ、その價値を堅持するかも知れない。しかも事實上歐洲協同體を一の新經濟圏として、金貨を第二義的とする制度、即ち新幣制を布き得る實力を行使するに至るのである。日本も滿支兩國と經濟ブロックを建設する上に於て、「金」を所持して圓貨の價値を維持することも便法であるが、同時に三國共通の新幣制を建つる必要がある。而して「金本位制を脱却する底の覺悟」とは、日滿支經濟ブロックを强化し、その協同體を建設する間に、金に對する迷想・金偏在より來る壓迫・爲替相場の亂高下より來る不利等を避け、金權獨占主義者の攪亂より脱るゝ準備を要することを意味する。

フンク獨經濟相の談に「この戰爭は一言にして云へば、勞働によつて賄はれてゐる。我々は勤勞によつて生ずる以外の貨幣を發行してゐない。國家が發行し、ライヒス・バンクが裏書する勞働手形こそはドイツ貨幣の根柢である、その勞働手形は物價と勞銀が統制の力で釘附され不動であるから、從つて不動の價値をもつてゐる」云々とある。そして金塊を通貨の根柢とせずとは、通貨は、その金準備に依存するものでなくして、その通貨に國家が――國家によつて作られた經濟組織が――與へる價値によるからだ、と說明されてゐる。第一次大戰後未曾有の危機、即ち世界史上稀有の惡性大インフレイションに際し、シャハト博士は、この趣旨によりて建直しに成功した、今次の戰時財政も亦之によりて賄はれてゐる。更に戰後の歐洲經濟秩序も亦之を全面に實現せんとするのである。この主義は我が經濟體制建設上大に參照して然るべきものである。

過去幾世紀に亙りて自ら發達し來り、之に習慣づけられたものは、容易に革新を期し難いものであるが、貨幣の變化・幣制の推移史に見るが如く、「信用」を第一義とする。二圓餘で四兆のマルク紙幣と換算し、又、一錢で一ルーブル紙幣の換算を示したのは、當時マルクやルーブルを發行する政府の信用がなかつたことを證する。之は極端の例なるが、今日普通に行はれる爲替相場の高低も國の信用の高低であつて、それは單に「金」の保有高に關する。今次獨逸戰勝の結果はマルク貨の信用絶大となりて價値を增すから、歐洲にてはマルク貨が標準となる。之は實力ありて拂はるゝ信用なるが、既述の如く紙幣マルク通貨の洪水となるや、些の信用なく全く無價値となつた際、政府は特殊の新通貨を造り、無價値の紙幣を回收

したが、之は「金」の準備があつたのでなく、農工の生産力に信用を置いて、その價格を保證したのである。鰯の頭なり、木像石像又は畫像なども、之を信ずれば、信ずる者に效驗があるのは一の精神作用である。護符・守札類は多く紙片に印刷されたものに過ぎないが、之が即ち神の護符であり守札であると肌身を放さず、必ず神佛の守護ありと確信する精神力が無をも有に化する。往古の支那、南洋土人の間に貝や石が貨幣として信用された當時は、貝殼や石塊にも價値が生じたのである。斯の如く信用は價値を創造する母である。

七、幣制改革は刻下の大問題

貨幣といふのは單に物資交換の媒介物たる性格に於て、石塊や貝殼や鐵や銅が使用されたと同意義にて「金」も使用されたのであるけれども、猶太人や英米佛人の如く貪婪飽くことを知らず、之を獨占し集積して、金權萬能を建前に世界を征服し支配する事態に迫つて來た以上、この金本位制問題を等閑に附することは出來ない。之は單に一國民の問題でなく、正に世界的問題である。人間萬事金の世の中として、金權のみを尊重すれば世は守錢奴の天下と化する。英米佛の跋扈横暴は即ちそれである。彼の經濟事犯の闇取引・投機・賭博等より下つて窃盗・强盗・殺人の末に至るまで、概ねこの金錢慾に基因する。されば金さへあれば萬事意の如く成るといふが如き經濟社會を、根本的に改革することは、我等の人生觀・世界觀の刷新を來すものにて、獨逸が過去及現在に於て示し、將來更に行はんとする幣制は、この意義に於て大に研究して然るべきものである。

數年來の統制經濟によりて、異調を示せるもの多々あるが、卑近の例に見るも、一市町内の豆腐屋その他が合同經營となれるあり、近くは東京市内の米屋一萬軒が廢店して、合同企業とならんとするあり、又各家庭に於ける一日三回の炊事を廢して、組合組織とし各員が配達される等を始め、生活改善に關する革新等も漸次行はれて來た。今後は全國を擧げて金融の國營となり、米の專賣となり、產業の綜合となり、各般の組織化さるゝことも、必至の趨勢である。斯くて金權は打破せられ、財閥は消失する。明日の經濟社會は、金錢的利益獲得が目的でなく、經濟行爲は公益を第一主義として、勞務を勵み、職能に應じて仕事に專念し、技術の練達に重點を置き不勞所得はその跡を絶つに至らう。斯くしてこそ國民幸福の增進が保證される。我等は之が促進に對つて、益々勇往邁進せねばならないのである。

（昭和一五・八月）

七、戰時の經濟體制

一、三種の經濟體制

人間の經濟的動機や行動の本質は、大體普遍性を有するが、その發展する樣相は時所位によりて相異するがため、同一國民の生活も平時と戰時とに於て、その趣きが異つてゐる。現代の世界には、(一)自由營利の資本主義經濟を主とする英米佛等あり、(二)之に反して、平時と戰時とを問はず社會主義經濟に據り、國家資本主義の徹底を謀るソヴエート聯邦あり、(三)又この中間を折衷するものとして、ナチス獨逸とファシスト伊太利等がある。しかも今次の歐洲大戰勃發以來、英佛の兩國も戰時體制を實施して統制經濟に出て、我が日本も支那事變以來、國家總動員法を布き、統制經濟を强調する事となつた。

斯く時所位によりて、各國それ〴〵經濟體制を異にするが、平時ならば必ず自由資本主義を取り、戰時となれば必ず統制主義に據るとは限らない。現に日清・日露戰爭當時に於て、

我邦は今次の如き經濟體制を取るに至らなかつた。それは當時の戰爭狀態と之に對する財政經濟事情とが、之を强制するまでの必要を生じなかつたからである。今次の事變は、我邦として未曾有の大戰にて、これ丈けの大規模は初めての經驗なれば、爲政當局の政策にも種々の齟齬を生じ、國民の思惑にも相當錯覺を起して、戰時經濟に關する幾多の問題が紛起するに至つたのである。しかし過去に於ける失策は、今更責むるも詮なき事なれば、寧ろその經驗と刻下の情勢とに顧みて、將來の推移に順應する處置を講ずべきである。

戰時體制が統制經濟となるは、必至の特徵なるが、その强弱の差と厚薄の度は、一に終局の長短如何に比例する。假りに、支那事變が近く休止と見れば、その後の直接戰費は大に減額するであらう。この事變に關する軍事追加豫算は、昭和十五年二月五日の豫算總會に上程されたが、それによれば、向ふ一ケ年間に四十四億六千萬圓、一日一千二百二十萬圓、一時間五十萬八千圓に該當してゐる。又同年一月末現在の國債總額は二百二十億圓にて、內支那事變國庫債券は既に六千億圓を算してゐる。事變終局となれば、此の種のものも減少するが、所謂長期戰にて、尙永續するとなれば更に增額するので、統制も一層强化するに至ることを豫想せねばならない。

この統制經濟は生産・配給・物價・賃銀・雇傭等の物的及人的の各方面に亘つてゐるが、帝國議會の經濟論戰に見れば、將來も尙ほ强化せらるゝ形勢にある。米・石炭・肥料等の國家管理は尙早とせらるゝが如きもマツチ・砂糖・木炭等の生活必需品に對しては、切符制を布かれる。會社利益の配當制限は既に規定されたが、利潤統制・勞働政策も新たに叫ばれてゐる。その他一々枚擧に遑ないが、統制經濟の强化は、資本主義自由經濟、卽ち營利經濟機構の作用を抑止するので、之が戰時體制とし現に是認せられてゐる。

玆に我々の考へさせらるゝことは、(一)我邦に於ては、事變前より英米佛の自由主義・個人主義及之に基く資本主義經濟思想が不評を招きて漸く衰退し、之に反して獨伊兩國のファシズム思想が流行して來た。(二)社會主義の論議も自由主義・個人主義と共に忌避せられ全體主義の流行となつたが、事變勃發後實施せられた經濟政策は如何と見るに、社會主義的色彩が濃厚であつて、目前に表現されてゐる統制經濟は、ビスマーク當時よりヒットラー總統に至る國家社會主義型に酷似するものがある。(三)又一般ジャーナリズムの評論を始め、議會に於ても極度に統制經濟を强調し、國家管理・切符制度・物價調整・賃金制度等を力說し、更に家族手當制・社會保險・土地制度の改革・小賣業免許制等々を主張するは彼の社會主義者である。斯くて刻下の統制經濟なるものは、全體主義の名を以てするも、實は社會主義の色彩が濃厚である。ナチスとは「國家社會主義勞働黨」の略稱なるに徵しても、首肯されるであらう。

二、戰時の統制經濟

戰時に於て統制經濟が强調せられるのは、畢竟戰費の捻出に重點を置き、且つ軍需品の生産擴充を圖るにある。隨つて軍需工業に要する物資の調整上、之に關する一般民間の需給を制限し、或は奢侈贅澤品に重稅を課し、更に生活必需品の節約を奬勵する。斯くて物價は公定せられ、暴利は抑止せられ、賃銀も利益配當も利潤も制限される。玆に於て平時に見られない異狀を呈するのである。

統制經濟强化の時代に於ては、景氣變動の如き現象は殆ど見られない。物價や相場が大體釘付けとなり、人氣・氣配の作用を抑止するからである。卽ち値上値下の人氣・賣人氣・買人氣・見越し・氣構へといふ心的作用の働く餘地がない。ために景氣の恢復・沈滯・繁昌の循環や律動が中止する。景氣循環は商業の波動的運動であるが、統制時代にはその波動が生

じない。さながら、中世の農本主義經濟時代とその趣きを均うする。

又經濟心理にも異狀を來す。その極端に走れば經濟的競爭が消失する。蘇聯（社會主義ソヴェート共和國聯邦）はその適例である。玆には私有財產制なく、國內の全財產は擧げて國有であり、經濟機構は擧げて國營である。投資以て射利する手段なく、貯蓄以て他日に備ふるの要なく、經濟的競爭は凡て地上より一掃されてゐる。即ち蘇聯社會は一の兵營であつて各個人は組織體の細胞に過ぎないから、經濟的獲得、營利慾望の本能を發揮するに由ない。これ即ち國家資本主義にて、一切の經濟作用は國家の各機關之に與かり、個人の自由行動を認めない。所謂階級なき社會であり、貧富の別なき世界であつて、國民は總貧乏化されてゐる。尙ほ蘇聯の統制經濟は、平時と戰時の別なく常住的永久的のものであつて、その全力を軍備擴張と產業の開發に注ぐため社會主義を徹底してゐるのである。

獨伊兩國は世界大戰の結果として、一時破滅に瀕したのであるが、ムッソリーニ及ヒットラー兩雄の出現により今日あるを致した。經濟政策としては統制計畫主義を取り、獨裁政治形態に出づるを以て世には之を蘇聯と一括して集產主義の鼎立と見做す者もあるが、五十步と百步の差あることを閑却すべきでない。獨伊兩國は大戰後、一時赤化の危險狀態に陷り、

之が挽回運動に邁進して、ナチズムと云ひ、ファシズムと稱して、その向ふ所を知らしめ、共に一國一黨主義にて政權を掌握し、國運を挽回建直して成功したる點に於て、兩者稍々その趣を同ふするものがある。特に兩國とも統制、計畫經濟を適宜に施行し、平時も戰時と同樣に緊張し來れることが、今日あるを致せる所以である。

されば統制經濟は、國力の恢復、又は戰時に於ける非常手段にて、臨機應變のものなるが、刻下の如く國際政局複雜怪奇を極め、戰爭の危機を孕むこと頻繁なる時に際しては、容易に緩和し得ざる方面も殘存するの止むなきに至ることを認めねばならない。

三、平時の自由經濟

平時は各自の經濟動機を自由に發揮し、慾望を縱橫に伸張し、營利を趣旨として企業經營し得る經濟機構を想起せしめる。即ち自由主義經濟が平時の特徵と見做される。支那事變發生二年前の日本に於て、現在の如き統制經濟狀態は誰人も曾て夢想しなかつた。日淸・日露の二大戰當時に於ても、國民は之を經驗してゐない。世界大戰當時、歐洲交戰國は獨・墺・露を始め、英佛其の他の國民は徹底せる統制下にありて悲慘の狀態を示せるが、米國や我が

日本は却て好景氣を呈してゐた。當時の歐洲事情を目擊せるもの以外は、唯だ文書によりて之を想像するに止まり、感激も自ら淺薄なるを免れない。我が國民が現下の如き統制經濟時期に遭遇せるは、今次を以て嚆矢とする。舊幕時代の儉約令・禁止令等による光景も、我々は稗史小說や記錄によりて想像するのみで實感を生じない。日常經驗しつゝある所は未だ初期の現象なるが、之を徹底したる革命後のソヴェート聯邦の事態を如何に見るべきぞ。僅々十數年前に於て我が青年學徒及勞働者の間には、總貧乏化する赤色蘇聯の社會を以て、恰も天國のやうに憧憬し、之を表現せんとして屢次大檢擧を見たのであつた。迷妄も亦甚しき限りと云ふべく、此の際彼が如きは忌避こそすれ、斷じて憧憬すべき社會でないことを知悉すべきである。曩にヒットラー・ユーゲンドの一團が來朝視察せる際、到る所、飲食物の豐富なるに喫驚せりとの事であつたが、觀光外人にして異口同音、大戰最中の狀態とは到底思惟されないと驚嘆するのは當然である。

四、相對的と絕對的

斯く統制經濟は非常時の應急策であるが、戰時體制と、國際情勢の上より之を實施するの止むなきに至り、中には半永續性を有するに至つたため、世上之を以て經濟の新形態、新傾向と見做すものあるけれども、實は何等新型を以て目すべきものでなく、自由資本主義經濟の弊害と、その缺陷に對する矯正として社會主義の起れると同一の趣旨に過ぎない。隨つて統制經濟を徹底的・永久的・不變的に實施する最後の結果は、或は蘇聯に類する社會を現出する危險性ないとも限らぬ。

他日休戰となり、事變處理にして進捗すれば、國民の生活必需品需給は圓滑となり、國家管理に屬した物資調整も漸次に改訂修正せられて、再び財界の活躍を來し、國民經濟力の大進展を見、自由活動の範圍が擴大されるから、產業も公平に開發せられ、斯くて平時狀態に復歸するのである。

戰時に於て要求せらるゝ統制經濟も、又平時に於て要求せらるゝ自由經濟も、共に之れ相對的にて、斷じて絕對的に强化すべきものでない。兩極端に眞理は宿らぬから、夫々の國情に應じて異なるを致すのである。自由民主國に於ても戰時は統制策を取り、獨伊の如きは平時にても統制を主とするが、自由の範圍も亦必ずしも少なしとしない。若し常住絕對の統制を施して一切の自由任意を認めざれば、ソヴェート聯邦を現ずる處れはない。統制と云ひ自

由といふは素より絶對でないと同時に、些の新味を帶ぶるものでもない。その一が適正で他が邪曲でもない。凡て時所位に應じて之を取捨し評價すべく、若し絶對の一方のみに偏傾するあらば、それは既に病態である。

戰時は滅私奉公で「個」を客として「全」を主とする。官民上下の差別なく國民一致協力して所期の目的を達せねばならない。故に戰時の經濟倫理として武士道の精神や、ストイック主義道德が鼓吹される。自警・自戒・自肅・自治以て國策に沿ふに至れば最上であるが、世には尙ほ闇取引によりて暴利を貪り、賣惜み買溜めによりて私腹を肥やし、他人の迷惑困憊を意に介せぬものも多々あるから、止むなく法令を布きて之を防止するのである。されば統制經濟の極端に强調せらるゝのは、國民の經濟倫理が低級・未熟・薄弱なることを意味するものである。

例せば、露西亞民族性は飴の如く柔軟で、御無理御尤もと總てを受け容れ、頗る從順なもので、剛毅といふ性格なく、詰り肝腎の中心たる脊骨を持たない。彼には他動ありて自動が乏しいから「歐洲の無骨者」と呼ばれてゐた。果然、過去二十餘年來、乞食同樣の生活となり、人間扱ひでなく一種の機械化されて來た。そこには經濟の心理も倫理も屏息し去つて、機械同樣に動いてゐる世にも憐れな國民がある。

五、戰時體制の經濟倫理

戰時體制の經濟倫理として、そこに新奇な形態が要求されるのでなく、唯だ國民として常に有してゐる德義の一層高度なる發揮が期待される。平時は投機によりて奇利を博するあれば、機敏としてその商才を稱賛せらるゝが、戰時は公定價格あり、之を無視して闇取引により巨利を博するあらば當然犯罪者であり、不德漢である。そは統制組織によつて、社會秩序が維持せらるゝ時代に於て、自分一個の自由を縱にするからである。統制時代はその統制に遵ふが道德であり、之に反して平時の如き商取引に出づるならば、之を嚴刑に處するが至當である。萬一之を寛容するあらば、社會の秩序は紊れて、その底止する所を知らないからである。

戰時の經濟倫理は、平時に比して積極的に、緊張の度を强調する點に於て特徴がある。各物資を大切にして廢物をも利用する、贅澤を避けて無駄を省く、代用品を使用して輸出を多くする等は、平時とて經濟に適ふ行爲なるが、戰時は一層之を勵行する要がある。又出來る

限り多く勞務し、多く生産に努め、隣保互助して勤儉貯蓄に努むる等は、平時とても當然であるが、戰時は更に之を强化するのである。特に新しき經濟倫理の德目を吟味するまでもなく、國策に沿ふ上に於て、必要なる德義の强調を期する。之によりて、物資の不足が補はれ配給が圓滑となり、軍需品の豐富を致し、以て戰爭の目的を達するに適ふことになるのである。

平時は營利・投機・射倖・獲得・競爭心より經濟行動を敢てする。避苦求樂・避難就易を常習とし、功を一簣に虧くあれば之を遺憾なりとして、驚天動地の企業や、投機の一獲千金を夢み、以て成敗利鈍の別を生じ、經濟は益々複雜を致すのである。之に反して戰時經濟統制期間に於ては、既に統制下に棲息し、物の生産需給は法規によりて定まり、所得も累進率の增稅によりて徵せられ、生活必需品も切符制によりて賣買し、軍需品生産は殷賑を極むるも、普通産業は抑制せられてゐる。株式相場も釘付狀態を呈し、一切の物價が公定せらるゝ時代なれば、平時の如き經濟行動は發揮されるものでない。否な之を發揮するならば、不倫不法の罪に座する危險を伴ふ。

戰時の經濟體制は、戰爭の目的遂行を主眼とした組織であり機構である。玆には殆ど自由競爭を認めず、否な之を抑止してゐるが、若し之を極度に徹底せしむれば一時經濟競爭の消滅し去る場合がある。しかも長期戰となれば、その好むと好まざるとに拘らず、交戰國民は之を甘受せねばならない運命に置かれる。

六、程度の問題

經濟と道德との相一致する經濟の倫理化は畢竟一の理想である。經濟が合理的に本質を發揮するに至れば、倫理と合致するのであるが、相齟齬する場合ありて容易に之を期待されない。

平時總て自由を認めらるゝ場合は、弱肉强食の修羅場を演じ、財産に關する犯罪數は多大に上る。又勞資階級の衝突あり、貧富の懸隔を招致する情勢あり、爲に勞働問題となり、社會主義運動を起すに至らしめた。社會主義運動なるものは、畢竟常住の統制經濟を所期するものである。されど絕對常住に徹底せしむれば、ソヴェートの二の舞を演ずるから、半ば之を取り入れた例として、獨伊その他の類型がある。戰時に於て統制經濟を行ふは、各國共通の現象なるも、和戰兩期共に經濟的不倫、不法行爲の絕へざるは、蓋し人間の社會生活上、

その兩極端を忌避し、相互の協調中庸を欲求するに出づることを示唆して餘りある。

平時は自由へ、戰時は統制への重點主義を取るは必至の趨勢なるが、平時と雖も統制を加味し、戰時と雖も自由を加味すべきものであらう、問題はその程度如何にある。加減の適正を得ると否とによりて、經濟倫理の興廢が生ずる。和戰兩期の重點は相違するも、七分三分か五分五分か、何れも調整の適否と國民道德の修養如何によりて、種々の事態が起るのである。

戰時なるが故に統制經濟を極度に强調すれば、必ず効果を奏するとは斷定し難い。統制に對する認識の不足・用意の缺如・見透の不明等によりて政策の誤謬・過失・弱點を生ずる。されば日常生活必需品不足の脅威を感ぜしめつゝある如きは、蓋し政治の貧困を證する一の適例である。

七、統制經濟と獨裁制

統制經濟實施には、由來强權の伴ふを常とする。露國大革命の當初、ケレンスキーの臨時政府は、尙ほ議會に附議したが、レイニン政府成立してより議會は閉鎖せられて獨裁となつた。今日の新憲法も地方より中央まで議會の形態を存するが、公平の選擧でなく强制的である。獨逸はヒットラー總統に一定期限を附して一任し、以て憲法を中止した。伊太利も亦ファシスト政權樹立後、從來の議會は閉鎖された。斯く獨裁制に出でたのは統制上の便法と思ふ。東歐小國にも之に類似する形態を取るがある。之に反して自由民主を建前とする英米佛等は依然議會政治を重視し、統制も議會の協贊を經てゐる。我邦には五・一五事件以來、政黨解消論も起り、政黨の權威は頓みに減退し、往時の政黨內閣は爾來跡を絕つに至つたが、昭和十五年の議會に於て、多少その職能を發揮するかの如き徵候が見えたのは、一般に官僚統制卽ち强權・獨善を忌避する意向の反映と見るべきでない乎。米內內閣には有力政黨人の參加を見たが、就中實業人藤原氏が一枚加はつて商相となつた一事が、如何に人心を新たにし、政治の明朗性を增したか計り知れない。蓋し之れ效果ある統制は、官民協力して共同翼贊に期すべきもので、獨裁制や、官僚の秘密主義・强制主義・獨善主義を忌避する心理を示唆してゐる。今次の議會には珍らしくも、それが慥かに反映してゐた。

八、統制强化の意義

統制經濟强化の聲高きは、國民が時局に顧み、國策に沿ふ經濟倫理觀が尙ほ薄弱にて、自治自肅の不足なるを示唆するけれども、一は我邦が古來歐洲諸國に於ける如き興亡盛衰の深刻なる經驗を閲せざると、他國との戰爭に於ては必ず常勝軍たる歷史を有し、「皇軍は勝利す」といふ先天性を有するによるからであらう。我が國民は武力戰に勝つ如く、經濟戰にも勝ち、思想戰にも戰つものと信じ切つてゐる。

惟ふに皇軍の戰捷は、武士道の精神を體し、訓練行き屆き、身命を君國の爲め犧牲に供して、酷暑嚴寒に耐へ、眞に武人たる本分を忠實に盡すの至誠に徹する上に於て、當に世界無比の戰士と云ふべく、これ國民が皇軍の忠勇に對し、絶對の尊敬と信賴とを有する所以である。然れども今次の經濟戰は過去の日淸日露兩戰當時の如き規模とは比較し難く、戰費のみに見るも幾百倍、幾千倍に上りて、しかも一厘の外債をも仰がず、總て之を國內に於て處辨せねばならぬ環境にある。統制經濟政策も開闢以來初めての經驗とて隨分不心得の輩もあり、之を軍規の嚴にして身命を賭し、奮戰力鬪する戰士の崇高なる態度に比すれば、全く情けなき事態にある。又外交戰は明治以來、親英親米の惰性に禍され、今尙ほ英米追隨を主とする嫌ひありて、その失策頻繁として多く、戰爭に勝つて外交に敗るゝを常習としてゐる。

之は外交當局者の責任なりとするも、實は國民の外交觀念が未熟なる爲め之を招致するのでその責めは國民自ら之を負はねばならぬ。國民の外交思想にして發達し居れば、適正なる外交官も生まるべき筈である。外交の不振は、畢竟國民の外交思想の未熟と認識不足の結果と云へる。

思想戰も亦同じく、歐米に發生したる思想の偏重と、その輸入を競爭し來れる經過に見よ。多くは其の黑白を選ばず、唯だ新奇を衒ひ、流行を追うて、遂には共產主義にまで進んだのであつた。先づ之を吟味し批判するよりも、先陣を爭うて新しがりを見せるため、鼓吹宣傳する稚態や寧ろ憐むべく、思想戰では敗北の歷史が繰返されて來た。斯く武力戰以外の戰爭に於て失敗の跡を遺したのは、蓋し武力戰士の如き訓練を經ず、外國語に通ずるとて外交官となり、外國書を讀めるとて危險思想を宣傳するといふ次第、特に商人に至つては營利射倖以外、眼中何物もなく、平時も戰時も金が儲かりさへすれば何でも厭はぬといふ態度にて、國際競爭上の勝敗など意に介しない嫌ひがある。皇軍が常勝する如く經濟戰・外交戰・思想戰・文化戰等に於ても勝利を占めんと欲するならば國民は皇軍人と同樣に、精神的・技術的訓練を積み、各自の業務に忠實であるのみならず、社會道德に就ても考慮する所なけれ

ばならぬのである。

九、皇軍の精神に學べ

筆者は先般取引ある某書店に至り、米國コロンビヤ大學にて講義された近刊の一史籍（三冊にて約六十圓）を求めようとしたが既に賣却され、品切れで大に失望した。併し最近輸入したる古本中には多少同種の六・七部ある筈だと案内されたが、その棚の主要なものは何時の間にか既に賣切れ、止むなく殘品中の古本を求めた。その際店員に對し「あんな種類の本を物數奇に求める如きは僕位のものと思つてゐた。しかも六七部の古本まで最早賣れ切れたのは少々怪奇だ、一體何れの方面ですか」と訊ねたところ、店員は「それは實は軍部の方です、今日の軍人さんは、國際關係始め種々の研究に熱心で、常に海外の新刊書に着眼されてゐます。世に學者と稱される方々よりも、寧ろ遙かに新進の趣きが見えます。あの方面では大學などよりも新刊物を多く求められ、しかも極めて眞率な研究を遂げてゐます」と。即ち我が軍主腦部は一般社會人に比して餘程水準が高く、智見も廣く、眼識の開けた人が割合多いといふ消息、由來軍部が國運を指導して行く形勢にあるのは、決して偶然でないことが首肯された。今日の我が軍部は、所謂武辨の集團でないことは、周知の事實であつて、日本國家の最高層を構成する實力と併せて、價値を實際に有してゐるのは慥かに軍部である。必ずしも刻下戰時なるが故に、軍人が特に敬愛尊重の目標となるのでない。今日の軍部といふグループは、その教育訓練の高度は勿論、精神的修養も錬磨せられ、戰場に臨めば千辛萬苦を厭はず、忠勇義烈、一死以て君國の爲めに至誠を盡して、一心不亂の態度を徹底する。この崇高なる精神と態度に於て、今日の軍人は一國の模範であり、國民の師表として當に仰ぐべき性格と價値を具へてゐる。即ち教育勅語の精神を身に體得して、之を實行する集團としては、先づ以て軍部を推さねばならぬ實情にある。

世の政治家、教育家、實業家、宗教家等を始め其の業務の何たるを問はず、我が皇軍人の精神と態度とにあやかる所あらば、外交戰・經濟戰・思想戰・文化戰等に於ても、彼の皇軍の連戰連勝するが如く、戰勝を期待される。戰時統制の新らしい經濟倫理は、皇軍人の精神と態度を學ぶことによりて必ず發揮される。これを爲す、何等德目の箇條を論議する要がない。今日の社會人たるものは、須らく皇軍人の精神と態度を師表として、之を體得實行する所あらば、以て足ると確信して疑はないのである。（昭和一五・二・八）

八、今次大戰の世界史的意義

一、世界史回轉の一幕

古今東西、如何なる國と雖も、未だ曾て戰爭の史蹟を有せぬものはない。國內に於ける貧富貴賤の利害衝突、或は一氏族と他氏族の權力爭奪、或は宗敎宗派の異信仰に因る內亂を始め、他民族又は他國家を單位として戰爭することは、人生不可避の條件なるが如く、所謂永久の平和は一種の理想であつて、戰爭こそは現實世界の生活上、必須の連續性と循環性とを有するやうに見える。

人類發生以來の期間を假りに二十四時間と測定すれば、有史前が二十三時間と五十五分を占め、有史後は僅か五分間に過ぎない、卽ち、過去の九割九分は徵すべき記錄なき無史時代で、有史時代は僅か一パーセントに止まると云はれる。又地球の生命は、約二億年と推定されて、將來の永遠無窮は全く想像に絕する。世界年表は埃及古王國の創建を基督紀元前約四千四百年頃とし、又神武紀元前約三千七百四十年頃と記してあるが、その何れに據るも、歷史は過去六千三百四十年の消息を示すに過ぎない。それが二十四時間中の五分間に過ぎぬ割合とならば、無史時代の三十四萬八千餘年間の事實は殆ど不明に屬してゐる譯である。又人類の捷息される地球が二億年の生命ありとの推定によれば、百年の一世紀も宛ながら一秒時の如く、現在世界總人口二十一億の動態は、瞬く間に幾千百の出生となり、死亡となりて實に諸行無常、刻一刻の新陳代謝、日々新たに異動して底止する所を知らない。今次の歐洲戰に見るも、波蘭は二週間、和蘭は五日間、白耳義は三週間位の內に降伏した、その神速は眞に驚異であるが、將來は更に甚だしきものがあらう。

されば將來の永遠性より見れば過去の史實も暫時の經驗に止まり、將來の動向如何は何人にも理解を超越して暗黑である。が、大戰爭と云へば新秩序建設の希望より行はれて來た。しかし假りに新建設を見て和平に歸するとも、新情勢が興れば又戰爭を招致し、更に新秩序の建設へと進むことを幾回となく繰返へす。斯くて治亂興廢片時も止まないのが、世界史の現實である。しかも刻下の東西の二大戰たる支那事變と歐洲の大戰とは、共に世界の新秩序建設、世界史回轉の一幕として之を見れば、洵に意義深きものである。